

鬼塚遺跡Ⅱ.若江遺跡

発掘調査報告

1979.3

東大阪市遺跡保護調査会

はしがき

東大阪市内には、現在周知しているものだけで120ヶ所を数える多くの遺跡があります。これらの遺跡には、私達の先祖が歩んできた足跡が、遺構や遺物として地下に埋蔵されており、これ迄に行なわれた発掘調査からも徐々にではありますが過去の歴史が明らかになりつつあります。

今回報告する鬼塚遺跡は、昨年度に引き続いて天理教東神田大教会の御協力のもとに発掘調査を実施したもので、若江遺跡は遺跡の範囲を確認するために昭和53年度にすすめてきた調査の結果をまとめたものです。

これらの調査によって得られた成果を収載した本書は、調査後のできるだけ早い時期に遺跡の重要性をさらに高めるための役割を荷っています。このような報告書のもつ役割は、多くの埋蔵文化財が失なわれようとしている現在、文化財保護行政のすすむ道程において指針を与えるもの一つとして重要な意味をもっています。

本書が、このような道程の一里塚となり、ひいては市民の皆様への文化財の御理解に役立つものとなれば、幸甚に存じます。

最後に、調査の実施から報告書作成までに御協力をいただいた関係者各位に対して心より感謝の意を表します。

昭和54年3月

東大阪市遺跡保護調査会

理事長 伊東二郎

例　　言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が昭和53年度国庫補助事業（総額1,000,000円、国庫50%、府費25%として計画し、また天理教東神田大教会からも総額1,000,000円の調査費用負担を得て実施した鬼塚遺跡の緊急発掘調査と、昭和53年度国庫補助事業（総額2,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した若江遺跡の範囲確認調査の概要報告書である。
2. 鬼塚遺跡の調査は、東大阪市教育委員会文化財課芋本隆裕を担当として、昭和53年7月24日から同年10月8日まで発掘作業を行ない、その後整理作業を行なった。若江遺跡の調査は、遺跡の北限部については芋本が、南限部については同文化財課下村晴文を担当として昭和54年3月31日までに発掘及び整理作業を実施した。
3. 本書に掲載した造構の実測図は、調査に参加した全員の協力によって作製され、遺物の実測、製図ならびに本文の執筆は、担当者が行なった。
4. 図版に収めた写真のうち、造構については担当者が、遺物については東大阪市遺跡保護調査会上野利明の撮影によるものである。
5. 調査の実施にあたっては、青野正彦氏の協力と以下の学生諸氏の参加を得た。労に対してここに感謝の意を表する。

沢田英彦、室谷勝美、高石俊哉、稲垣義一、石田和俊、中嶋和彦、上野聖二、西村歩、龍正弘、松岡啓介、堀義人、小梅聖、上村武治
6. 発掘調査中は、天理教東神田大教会ならびに森山一郎氏に休息室、湯茶の接待などをはじめいろいろとお世話になった。また、次の諸機関、諸氏より協力と援助を賜わった。明記して謝意を表する。

奈良国立文化財研究所、宮本長二郎、町田章、田代克己、荻田昭次、都出比呂志、中村友博、林野全孝、桜井敏雄、藤井直正（敬称略）

本文目次

鬼塚遺跡II

I 調査に至る経過	1
II 位置と環境	2
III 調査の概要	4
1. E-3地区	4
2. E-4地区	6
IV 出土遺物	12
1. 壁穴内の土器	12
2. 弥生第V様式の土器	17
3. 第V様式以外の土器	25
4. E-3地区出土の奈良、平安時代の土器	25
V まとめ	27
1. 造構について	27
2. 遺物について	29
3. 2・3の問題について	31
VI 遺物観察表	37
1. 壁穴内の土器	37
2. 第V様式の土器	39
3. 第V様式以外の土器	50
若江遺跡	
I 若江遺跡の位置と環境	53
II 遺跡の概要と調査に至る経過	54
III 調査の概要	56
1. 79-N 1~2 トレンチの調査	56
2. 79-S 1~8 トレンチの調査	61
IV まとめ	67

挿図目次

鬼塚遺跡II

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 鬼塚遺跡調査地点	3
第3図 発掘調査地点	4
第4図 E-3地区土層断面図	5

第5図 E-3地区第V層上面実測図	7
第6図 E-4地区第VII層上面実測図	8
第7図 E-4地区土層断面図	9
第8図 垂穴住居址実測図	折り込み
第9図 垂穴内の炭化材分布図	折り込み
第10図 垂穴内の土器	13
第11図 垂穴内の土器 壺、土製品	14
第12図 第V様式土器 壺	15
第13図 第V様式土器 壺、壺	16
第14図 第V様式土器 壺	19
第15図 第V様式土器 壺	20
第16図 第V様式土器 壺、鉢	22
第17図 第V様式土器 高杯、器合	23
第18図 第V様式以外の土器	24
第19図 E-3地区出土 奈良、平安時代の土器	26
第20図 西之辻遺跡出土の土器	32
第21図 鬼塚遺跡における遺構、遺物の垂直分布図	35
若江遺跡	
第1図 周辺の遺跡	53
第2図 若江遺跡の調査地点	55
第3図 N1トレンチ遺構、遺物	56
第4図 N2トレンチ調査地点	57
第5図 N2トレンチ北壁断面図	57
第6図 N2トレンチ遺構	58
第7図 N2トレンチ遺物 瓦器掩	59
第8図 N2トレンチ遺物 木製品、瓦質小皿、土師質皿、合付皿、青磁、青白磁	60
第9図 紡錘車実測図	60
第10図 S1~8トレンチ位置図	61
第11図 S1、S3トレンチ断面図	62
第12図 S4トレンチ断面図	63
第13図 S4トレンチ平面図	64
第14図 S1~8トレンチ遺物 弥生土器、土師器	65
第15図 若江城、若江寺、字切図	67

表 目 次

表1	鬼塚遺跡の調査歴	1
表2	鬼塚遺跡出土第V様式土器の分類表	12
表3	焼粘土塊と土器の重量	28
表4	生駒西麓出土の第V様式土器一覧表	29
若江遺跡		
表1	N2トレンチピット計測値	58
表2	S4トレンチピット計測値	64

図版目次

- 図版1 鬼塚遺跡 造構 堪穴内の炭化材出土状況（東より）
- 図版2 鬼塚遺跡 造構 E—4地区の全景（南より）
堪穴住居址の全景（東より）
- 図版3 鬼塚遺跡 造構 堪穴内の炭化材（北東より）
堪穴内の炭化材（中央部より北東）
- 図版4 鬼塚遺跡 造構 堪穴内の炭化材（北西より）
堪穴内の炭化材（中央部より北西）
- 図版5 鬼塚遺跡 造構 堪穴内の炭化材（南東より）
堪穴内の炭化材（中央部より南東）
- 図版6 鬼塚遺跡 造構 堪穴内の炭化材（南西より）
堪穴内の炭化材（中央部より南西）
- 図版7 鬼塚遺跡 造構 堪穴内の炭化材（南より東壁沿い）
堪穴内の炭化材（北より中央部）
- 図版8 鬼塚遺跡 造構 堪穴内の炭化材（西より中央部）
堪穴内の炭化材（中央部より南壁中央部）
- 図版9 鬼塚遺跡 造構 板状炭化材出土状況（東壁中央部）
組み合わせ材細部（中央部）
- 図版10 鬼塚遺跡 造構 割材に巻かれた蔓状炭化材（南東部）
板状炭化材細部（北東部）
堪穴埋土上層の土器出土状況
- 図版11 鬼塚遺跡 造構 南壁中央部の焼粘土塊（北より）
西北隅の焼粘土塊（東より）
西北隅の焼粘土塊（北より）
- 図版12 鬼塚遺跡 造構 E—3地区掘立柱群全景（東より）
E—3地区掘立柱群全景（北より）
第3層内土器出土状況
- 図版13 鬼塚遺跡 造物 堪穴内の第V様式土器 壺、鉢、土製匙

- 図版14 鬼塚遺跡 遺物 穫穴内、包含層の第V様式 壺
- 図版15 鬼塚遺跡 遺物 穫穴内、包含層の第V様式土器 壺
- 図版16 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺
- 図版17 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺、壺
- 図版18 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺
- 図版19 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺
- 図版20 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺、蓋
- 図版21 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 鉢
- 図版22 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 鉢、ミニチュア土器、器台、高杯
- 図版23 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺
第V様式土器 壺
- 図版24 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺
第V様式土器 壺
- 図版25 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 壺
第V様式土器 壺、鉢
- 図版26 鬼塚遺跡 遺物 第V様式土器 高杯、手焙形土器
第V様式以後の土器 壺
- 図版27 鬼塚遺跡 遺物 第V様式以後の土器 壺、小型鉢、小型器台、高杯
绳文晚期の深鉢、弥生中期の壺、鉢、器台
第V様式土器 壺60の絵画文様、枠痕をみる土器片
- 図版28 鬼塚遺跡 遺物 奈良、平安時代の土器 壺、高杯、杯、皿、把手、須恵器杯、壺
瓦
- 図版29 若江遺跡 造構 N 1 トレンチ全景
N 1 トレンチ井戸
S 4 トレンチピット群
- 図版30 若江遺跡 造構 N 2 トレンチ柱穴
N 2 トレンチ柱穴（拡張後）
N 2 トレンチ柱穴・池・溝
- 図版31 若江遺跡 遺物 N 2 トレンチ池内出土遺物 瓦器碗、土師質皿、石製鋸鋸車等
- 図版32 若江遺跡 遺物 N 2 トレンチ池内出土遺物 土師器高杯、台付皿、羽釜等
S 1～8 トレンチ出土遺物 弥生土器壺、壺、土師器小型丸底壺
等
- 図版33 西之辻遺跡 遺物 第IV様式末～第V様式初頭の土器 壺、壺、蓋
第IV様式末～第V様式初頭の土器 器台、壺、壺、高杯
- 図版34 西之辻遺跡 遺物 第IV様式末～第V様式初頭の土器 壺、壺、鉢、高杯

鬼塚遺跡 II

I 調査に至る経過

鬼塚遺跡は、昭和35年東大阪市箱町の枚岡電報電話局の建設工事によって発見されて以来、数回にわたって発掘調査が行なわれてきた（表1、図2）。これらの調査によって、遺跡の範囲や内容が次第に明らかになりつつある。しかしながら、遺物の出土量に比較して造構が検出された例は必ずしも多いとは言えない。明確な造構としては、昭和43年の調査で弥生後期の壇枠が検出されているだけである。昭和47年の調査も遺跡の南端部に位置するためか、造構については判然としないままであった。

今回の調査は、昭和53年1~2月、東大阪市箱町558番地の天理教東神田大教会敷地内で行なわれた発掘調査にひき続くものである。昨年度の調査では、約250m²を発掘した結果、旧耕土下に古式土器を含む薄い堆積層があり、その下に20~40cmの厚さで弥生後期の土器を多数含んだ土層が堆積し、この層からは銅鏡も1点出土した。包含層下の遺構面では、ピット群、土括、石組造構、焼土の括り等が検出されたが、性格を明らかにできるものはなかった。しかしながら、遺構面直上ならびにピット内から前期弥生式土器と船橋式圓文土器が出土したため、この時期の造構も重複して存在するのではないかと推定された。さらに、船橋式の凸帶文土器と弥生前期中段階の壇との関係については、船橋式土器に弥生土器の影響が認められるとして、これらの共伴関係を認めたうえで圓文、弥生両文化の接触期における鬼塚遺跡の様相を示すものとしている。

このように、前回の調査では圓文晚期~弥生前期の問題に重点をおいて一つの解釈が下された。この問題については、なお資料の集積を必要とするものであり、今回の調査を行なうにあたっても検証すべき重点項目として資料の追加が期待された。他に、遺物では弥生後期~古式

表1 鬼塚遺跡の調査歴

地点	年次	調査主体	備考
A	昭和35年	——	枚岡電報電話局建設工事の際に圓文晚期船橋式の土器と弥生前期の壇が出土。出土層位は未確認。
B	昭和40年	——	枚岡農場建設工事の際に圓文晚期船橋式の土器、土偶を含んだ土層が検出された。
C	昭和43年	東大阪市教育委員会	電報電話局北側の空地で実施。圓文晚期~弥生後期の土器が多く出土。造構として弥生後期の壇枠2基を検出。
D	昭和48年	東大阪市遺跡保護調査会	枚岡中学校の校舎増築に伴って発掘調査を実施。圓文晚期滋賀里式、船橋式の土器少量と大量の弥生後期の土器が出土。
E	昭和53年	東大阪市教育委員会	天理教東神田大教会敷地内で実施。「調査に至る経過」で紹介。

- 参考文献 A、B 藤井直正、都出比呂志「原始古代の枚岡」1967
C 大阪府立花園高校地歴部「河内古代遺跡の研究」1970
D 東大阪市遺跡保護調査会年報 I 1975
E 「鬼塚遺跡発掘調査概要 I」東大阪市教育委員会 1978

土師器にみるべきものがあり、良好な包含層は調査地区外へも広がっていることが確認された。

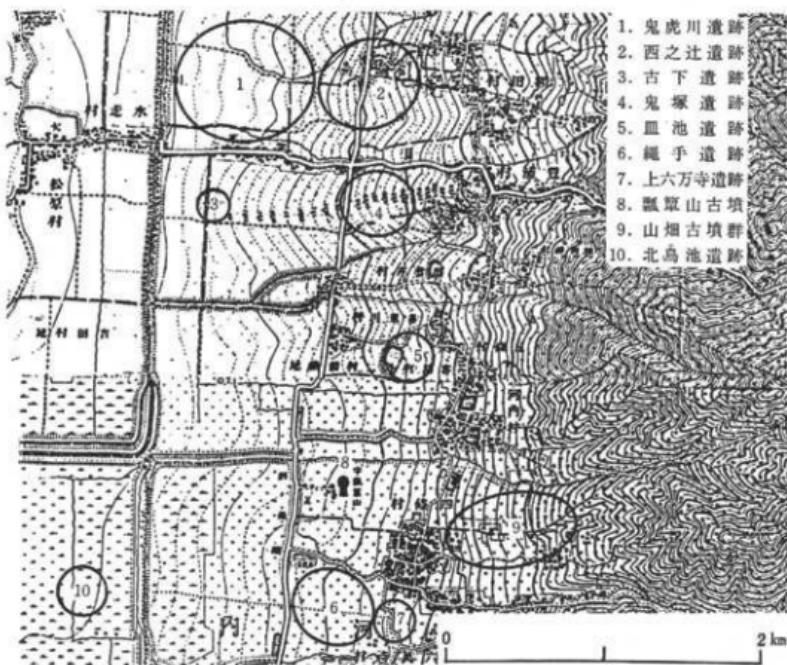
以上のように、1～2月の調査では多くの成果がみられたが、工事予定地域内には、なお未発掘の区域があり、これらの区域には遺物包含層に含まれる土器の量などからみても、かなりの量の遺構、遺物が遺存しているものと推測された。そこで、東大阪市教育委員会としては、再度発掘調査を行なって遺構、遺物の検出に努める必要があると判断し、天理教東神田大教会との協議を再び行なった結果、鶴田進治郎大教長会をはじめ関係者の方々の御理解のもとに、工事の延期を承認していただくことができた。その後も、有形無形の多大な御援助、御協力を賜わり、昭和53年7月24日から発掘調査を開始し、竪穴住居址の検出等の成果をあげて10月8日に終了した。ここに明記して深甚の謝意を表したい。

II 位 置 と 環 境

鬼塚遺跡は東大阪市箱殿町に所在する縄文後期～古墳時代の複合遺跡として周知されており、生駒西麓の東大阪～八尾市域に連続してみられる小規模な扇状地上、標高15～30mに位置している。これらの扇状地地形の中では、八尾市域を除くと石切周辺の辻子谷筋、額田谷筋によって形成されたものが比較的規模が大きく、遺跡の数も多い。石切周辺の遺跡は、辻子谷の北側標高20～30mの扇尖部に縄文後期～古墳時代の芝ヶ丘遺跡、標高5m前後の扇端部に弥生中期の和泉遺跡があり、額田谷の南側には標高10～30mの扇尖部に西之辻遺跡、標高5m前後の扇端部に鬼虎川遺跡、額田谷の北側標高10mに植附遺跡がある。これらの遺跡は北側の辻子谷筋の扇状地と南側の額田谷筋の扇状地とに分かれて、それぞれの地域を単位として生活基盤をおいていたものと思われる。また、西之辻、植附両遺跡と鬼虎川遺跡は弥生中期において、立地を異にしながらも並んで存在しており、生駒西麓の地域性を考えるうえで注目される地域である。

一方、石切周辺以外の山麓には、北に縄文時代と古墳時代の日下遺跡、南に今回の調査地である鬼塚遺跡、弥生後期の皿池遺跡、縄文中期～古墳時代の縄手遺跡、弥生後期の上六万寺遺跡、縄文中期～古墳時代の馬場川遺跡などがあり、標高15～30mの扇尖部に位置している。他に、鬼塚遺跡の西標高6～7mの扇端部には弥生中期の土器が採集された古下遺跡があり、標高5mの平野部微高地には弥生後期末の北鳥池遺跡がある。

以上のように、生駒西麓では数多くの遺跡が扇状地上に存在し、特に弥生時代以後は陸化した平野部に近い地点にも初期農耕集落が発生するほか、可耕地となった扇状地末端の面積によって遺跡の規模や分布密度に疎密が生じたと考えられるなど興味深い点が多い。また、遺跡の立地や規模には時間的な傾向が認められるようであるが、これらについては、今回の調査成果などを踏まえて後に検討したい。



第1図 周辺の遺跡



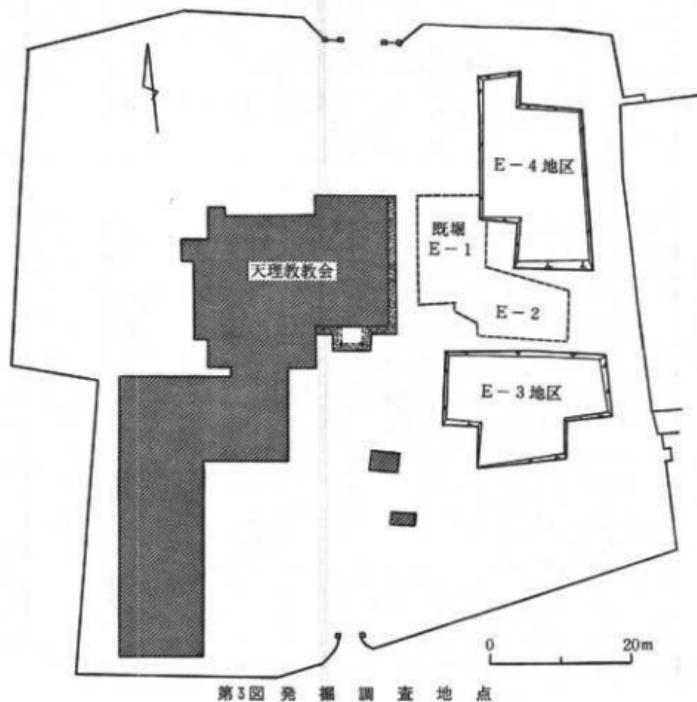
第2図 鬼塚遺跡調査地点

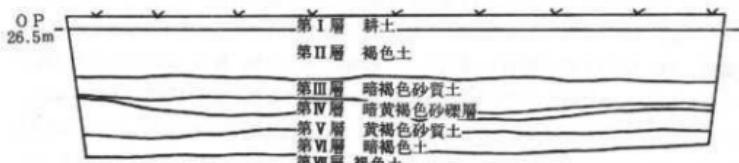
III 調査の概要

今回調査を行なったE地点での調査地区は、昨年度調査の第2地区の南側に東西22m、南北9mの第3地区を、第1地区の東側に東西8m、南北20mの第4地区を設定した。その後調査をすすめていくうちに造構の拡がりを検出するために第3地区では南側に6×11mを拡張し、第4地区では西側に5×15m拡張した。以下にこれらの調査地区について記述を進めていくが、第3地区、第4地区の名称は調査地点名を冠してE-3地区、E-4地区と呼称したい。

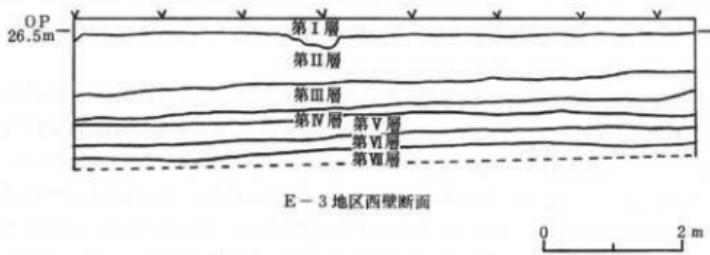
1 E-3地区

調査経過 盛土および耕作土を機械で排除した後人力掘削を開始した。第II層は褐色土で中世の瓦器、土師器片を少量含んでいる。土地を棚田状に整地した際に形成された客土層である。





E-3 地区北壁断面



E-3 地区西壁断面

0 2 m

第4図 E-3地区 土層断面図

第Ⅲ層は暗褐色砂質土で部分的に礫を含んでいた。この層は奈良～平安時代の遺物包含層で土師器、須恵器の出土が多く、黒色土器片も含んでいる。

第Ⅳ層は暗黄褐色砂砾層で上層と下層が入り混じった土質に砂砾を含んだものである。この層の上面で直径20～30cm、深さ約20cmのピットを数個検出した。この層にも奈良～平安時代の土師器、須恵器を含んでいた。

第Ⅴ層は黄褐色砂質土で上層との境は比較的明瞭で、この層の上面で掘立柱の柱穴を多數検出した。これらはIV層でみつかったピットとは明らかに層位を異にしていることにより、奈良～平安時代の造構面は2枚あることがわかった。この面にて南側へ調査地区を拡張したところ拡張部東半部は搅乱を受けていたが、西半部には柱穴の続きがみられた。柱穴の抜がりを調査した後、拡張部を除く範囲を下げたところ、第V層上半の砂分の多い部分から弥生後期～古式土師器の土器片と微量の須恵器片が出土し、第V層の下半部から完形の壺2点が出土した。この2点の壺は大形の長頸壺68と扁球形胴部に細長い口頭部をもった長頸壺87とであり、互いに第V様式の前半と後半とに年代観をもつものであったために、第V層の遺物はより高所からの流れ堆積によるものと判断した。

第VI層は暗褐色土で上層との境は漸移的である。この層の上面でも第V層土が落ち込んだ直径20～30cmのピットを数個検出した。これはE-4地区ではより明確なかたちで検出されているピット群と同一のもので、時期は古墳時代と考えられる。第VI層内からは弥生後期の土器のみが出土した。

第VII層は褐色土で、この上面で焼土塊を多数検出したが明確な造構は見い出すことができなかった。E-4地区で弥生後期の造構面となっている土層がこの面に該当するものである。

造構 第IV層、第V層、第VI層の上面でビットが検出されたが、IV層、VI層のビットは数が少ないので、その性格を明確にし難い。V層上面で検出されたビットは70個以上におよび、柱痕を残すものや磁石を掘えたものなどがあることから、掘立柱建物が存在していたことに間違いない。柱穴は直徑25~40cmのものが多く、深さは一定していないが調査地区的東にあるビットほど浅いもののが多かった。西側のものでは、一辺80cmの方形の掘形をもち、中心に直徑20cmの柱痕をもつ柱穴があり、造構面より46cmの深さをもつて最高に、柱痕をもつ柱穴は30cm前後の深さをもつて対して、東側では柱痕をもつても10cmほどの深さしか残っていないかった。このことは、調査地区的東端にビットの数が極端に少なくなる事実などとも合符することから、平安時代に造構面を削平、整地したためであろう。

柱穴の並びは、規則性をもった配置をみるものがほとんどなく、拡張部西壁沿いの柱列がわずかに柱通りと規則性を示すのみであった。この柱列は柱間2mを基準としてほぼ南北に4間続いている。柱穴は直徑30~35cm、深さ20~25cmをはかる一定したものである。ところが、この柱列の東西には対応する明確な柱列がみられず、わずかに拡張部の柱列より4m東側に2個の柱穴があるにすぎなかった。この2個の柱穴は柱間が2mを基準としているので柱列に伴うものと思われ、建物とした場合は2間×4間以上の細長いものが想定できる。この建物の長辺は、ほぼ南北を指すことから柱列は方位を考慮しての構築と思われる。付近は条里区画も及んでいないため、南北の方位の基準が何によるものか明らかではない。第III層中に縦目、右目をもった平瓦が少量ながら含まれていることから、近くに寺院が存在する可能性もある。

2 E-4地区

調査経過 この地区では耕作土の下にE-3地区で第V層となっている土が現われた。この層は調査地区南端では約30cmの厚さをもっていたが、北へ行くにつれて上昇し、北端近くでは耕作土によって削平されてみることができなくなる。遺物は南半部の第V層内より完形近くに復原できる弥生後期の土器が多く出土した。

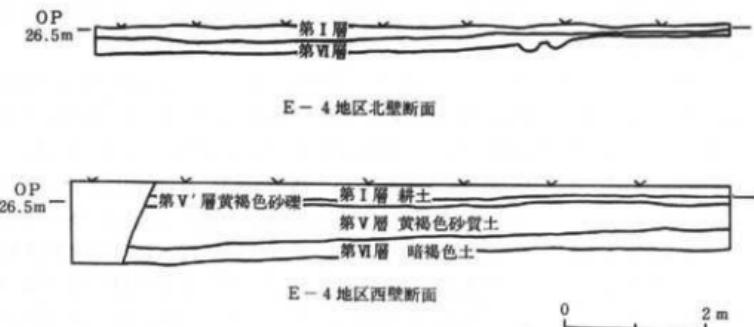
第VI層は調査地区的北半部では黒みがかった色調で、南へ行くほどE-3地区の第VI層に似た暗褐色土となる。この層の上面で黄褐色土が落ち込んだビットを検出した。ビットの並びは規則性をもたず、個々についても大小さまざままで深いもので約30cm、浅いものでは5cmほどである。時期はビットができる以前に堆積した第VI層が古墳時代初頭までの土器を含んでおり、ビット内の黄褐色土がE-3地区で奈良~平安時代の造構面となる第V層と同じ土であることから、古墳時代のものと考えられる。第VI層は弥生後期の土器も大量に含んでいた。

第VII層は、褐色土で礫を多く含んでいる。この層の上面は弥生時代後期の造構面となっており、東から西へ下降し北から南へも降っている。これは調査地区が緩傾斜の尾根状地形の南斜面に位置するためである。



第5図 E-3地区 第V層上面実測図





第7図 E-4 地区 土層断面図

遺構は、まず暗褐色土が落ち込んだビット数個と幅40cm、深さ20cmの溝状遺構を検出し、さらに作業を進めたところ、西壁沿いで方形の竪穴の一角を検出した。この竪穴の輪郭は、幅2～3cmの焼土、炭化物の帯がめぐっていたため比較的容易に判別できた。竪穴内には中央部に黄褐色粘質土が、その周辺には炭化物混じりの褐色土が入っていたので、西壁沿いに小トレンチを入れて土層の確認を行なったところ、この竪穴内へは黄褐色粘質土が埋土として入れられたのちに、炭化物混じりの褐色土がかぶさったものとわかった。また、黄褐色土を10cmほど掘ったところで炭化材の遺存を確認した。

この段階で調査地区を西側へ5mの幅で拡張して竪穴の全形をつかんだ後に、4周の壁面を確認しつつ炭化材の検出にかかった。埋土の上層には完形近くに復原できる数個の土器12, 13, 14, 22があり、その下からは炭化材が次々と現われて、逆に土器はあまり出土しなくなった。炭化材の他に、住居址西北隅で直径30cm程の焼粘土塊が5個積まれた状態でみつかり、各個体の表面には籠目のような痕跡が認められた。粘土塊を探集地から編み籠に入れて運んだようである。さらにこれと同じものが住居址中央部南より1個みつかったが、こちらは西北隅の積まれた焼粘土塊よりも焼け方が著しく籠目の痕跡も顕著であった。かつ検出した面と接する底の部分までもよく焼けていた。これは上屋に懸垂してあったのが火災によって焼け落ちたと考えられる。

これら炭化材と粘土のかたまりのほぼ全貌を検出するおよび、家屋の構造等を知るうえで非常に良好な遺存状況であることが判明したため、床面の検出は炭化材の少ない限られた部分のみにとどめて保存対策を講じたのちに、焼粘土塊をとり上げ埋め戻しを行なった。

遺構 竪穴は $6.2 \times 4.6\text{ m}$ 、面積約 28 m^2 の長方形をなしている。本竪穴に関する記述は、床面の検出部分が限られたため、床面より $5\sim 10\text{ cm}$ 上で検出した炭化材を中心に行なうことしたい。

竪穴の壁面は4周ともよく焼けており、ところどころに壁面に接して立つ炭化材が残るが、これらの炭化材はいずれも壁面の中途でなくなっていて、床面まで達するものではない。竪穴

内部の炭化材は第8図、図版1~4のごとく放射状に倒れ込んだ状況である。南西部部分はやや疎らな分布を示しており、火勢によってほぼ完全に燃焼したものと思われる。

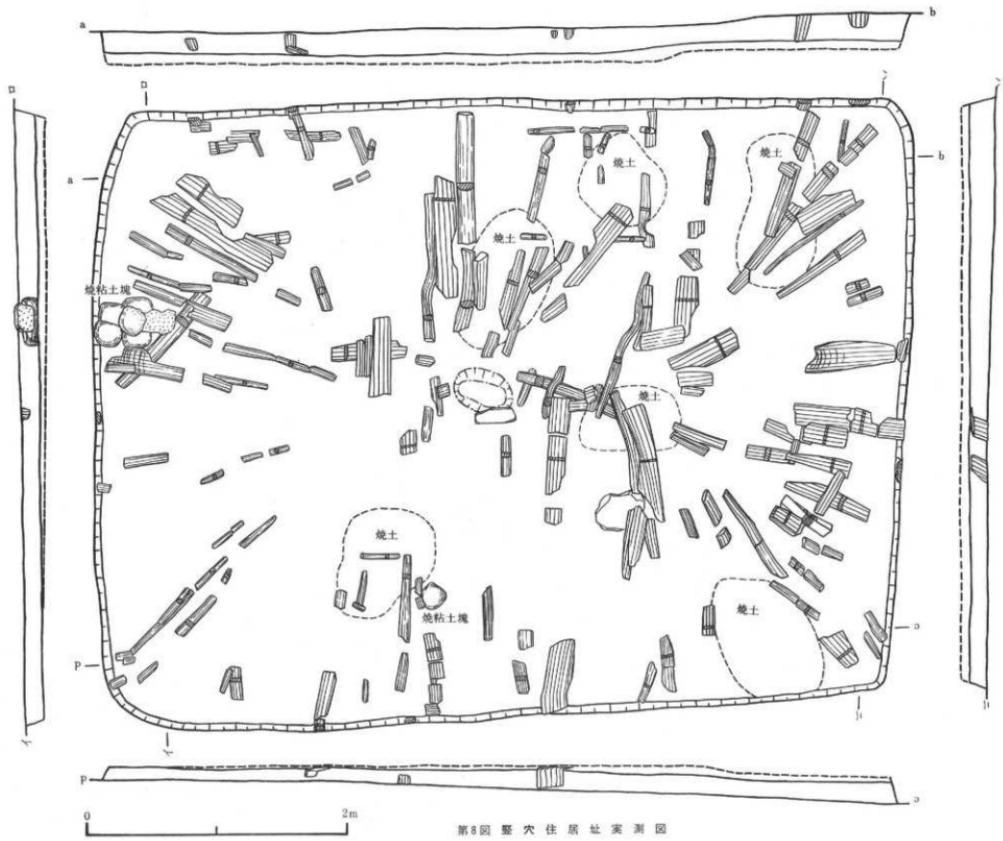
炭化材にはかなりの種類がみられた。これらを炭化材の厚さがわかるものについて、5cm以上の太いもの、3~4cmのもの、2cm以下の板状のものに分けて観察する。そのうち太いものでは、中心部の東西方向の割材、南東部の割材が7~8cm角、北側中央部の断面カマボコ形の半割材は6cm、西部中央の半割材が5cmの厚みをもっている。これらは、他の材と重なる場合は下になって検出されており、特に中央部のものでは、南北からわたされた数本の材を支えるように組んだ恰好である。この材は中央部にあって竪穴の長辺と平行することから棟木に解釈しうる可能性が大きい。次に3~4cmの割材、半割材、丸材をみると、5cm以上の太い材よりは上にあるが多くは2cm以下の板状炭化材より下に検出されている。また、この太さの材どうしが重なっているのは4隅に限られ、4辺の材に重なるものはみられない。一方、板状のものはどうかといえば、他の太い材と重なる場合のほとんどは他より上に位置する。そして、板状のものどうしの重なりも多く認められ、特に東辺中央部のように4隅以外でも認められることが注目される。このように、多少の混亂はあるにしても、大勢としては太いものは下に、中くらいのものは中ほどに、薄い板状炭化材は上に検出されており、この出土状況はこれらの材が本来用いられていた部分での上下関係をそのままに示していると考えてよいであろう。

また、材の厚さに対する量的な関係は、確認できるものだけでまとめると、5cm以上のもの4本、3~4cmのもの20~25本、2cm以下のもの25以上となり、薄い板状のものの量が多いことがわかる。

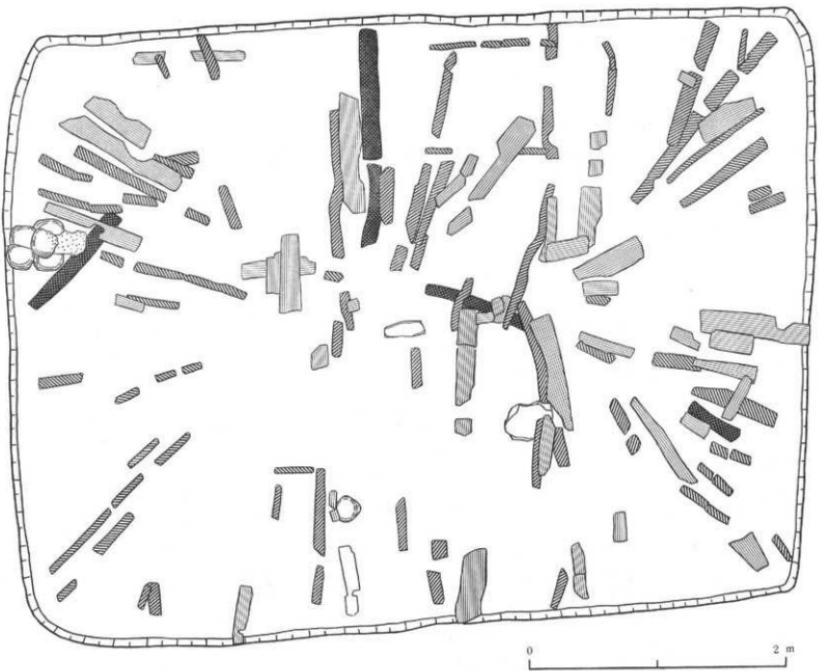
次に材の倒れた位置については、5cm以上のものと3~4cmのものとは、すべて竪穴内の壁面下より中央に向かって倒れ込んでいる。そして、これらと直角に交差して横木と思われる直径2~3cmの丸木が北辺に2列、南辺に1列残っている。2cm以下の板状のものには、東辺中央部や南辺中央部で一端が竪穴外にひっかかって斜めに落ち込んだものが存在する。このうち、板状のものに関しては上屋材か壁体か2通りの考え方があるが、今回の出土状況からは上屋材と考える方が妥当ではないかと思われる。というのは、斜めに落ち込んだ板状のものと壁面との間には隙間があって土が詰っていたことや、壁体とするにはそれらを支えるための杭、あるいは掘立てる場合の溝等の施設が、壁際での床面検出作業の際にも発見されなかったことによる。

このように、板状のものについては上屋材のおそらくは板葺屋根材の可能性が大きいと考えられるのであるが、5cm以上のものや3~4cmのものの架構にはいろいろな解釈があろう。ここでは大きく分けて2つの考え方ができる。

第1は、出土状況通りに骨組となる材を竪穴内の壁際から45°前後の角度で棟木にかけたもので、この場合、板材だけは雨水が住居内に浸入しないために、端を竪穴外に固定したと考えるものである。ただ、西北隅で検出した5個の焼粘土塊が壁面に接して置かれていることが、壁面下からの架構にとって問題となる。



第8圖 居住穴実測図



第9図 壑穴内の炭化材分布図

- 炭化材の種類
- 5cm以上のもの
 - 3~4cmのもの
 - 2cm以下、板状のもの

第2は、粘土塊が壁に接して置かれていることから、竪穴内の空間を広く考え、竪穴外に棒木を直接土中に固定する方法や、杭と結縛して固定する方法、あるいは盛土された周囲の部分で固定する方法などが考えられる。これらは、竪穴外から斜めに落ち込んだような太い材がないことが、大きな難点となる。

以上、いずれをとっても問題が残るため、現在の段階では結論はより多くの資料の集積を持つべきであろうが、今回の竪穴内における炭化材の遺存状況がきわめて良好なものであるだけに、第1の架構方法が可能性は大きいと思われる。いずれにしても、壁面がよく火熱をうけている状況からは、板葺屋根と壁面との間は空洞となっていたであろう。また、板材には固定のための釘や縫隙などが認められることから、屋根に葺かれたと思われる板材は、竪穴外で下端を固定していたものとみられ、あるいは竪穴掘削時の土を外周にめぐらして、その部分に固定したものかもしれない。さらに竪穴内に床面から浮いた状態の焼土が、炭化材と混在してほぼ全域に分布していたことは、板葺きの上に粘土が塗られていた可能性も考えられるであろう。

最後に、竪穴の床面については、東辺に沿った幅1.5mの部分だけが他の床面より約6cm高く形成されており、いわゆるベッド状遺構に該当するものかと思われる。

柱の配置は、床面の調査がわずかな面積であったために不明である。また、壁面下の調査では周溝は存在しなかった。床面中央部には45×30cm、深さ30cmを測るピットを検出した。ピット内には炭化物混じりの黄褐色土が入っていた。これを柱穴とすれば、大阪府芝谷遺跡や紅葉山遺跡のような中央主柱をもつ形態も考えられる。このピットに接して平らな面をもった石が置かれており、他にもう1つ大きな石がある。これらは床面に置かれたものとみられることから、作業台の用途をもつものかもしれない。床面近くからの出土遺物としては、先に説明した焼粘土塊と若干の土器がある。焼粘土塊は、いずれも表面が赤褐色～明褐色を呈し、角閃石や金雲母を混じえたもので上器の胎土と極似している。西北隅の壁面と接する部分では、灰黄色の粘土とさして変わらないほど軟質であった。これらの焼粘土塊は弥生土器の素材と考えてほほ間違いないであろう。西北隅の5個体は貯蔵用で、懸垂した南辺中央部のものはまさに製作に使用される直前の段階を示しているのであろうか。床面近くの土器は、西壁中央部より1mほど東に完形の鉢9、北壁中央直下に小形壺片21があり、土製鉈23も南壁中央部直下より出土した。他はいずれも浮いており、量的には埋土上層部の方により多く出土している。

竪穴以外の遺構はピットも多数検出されたが、柱通りを復原できるものはなかった。



調査風景

IV 出 土 遗 物

今回出土した遺物は大半が弥生第V様式に属する。その他に縄文晩期、弥生中期、弥生～古墳時代への移行期の土器等が同じ土層より出土しており、上層には奈良、平安時代の土器が出土している。

ここではまずE-4地区竪穴内の埋土より出土した土器を概観したのち、竪穴内と包含層内の第V様式土器をまとめて形態、手法の面から分類し、その分類観の大略については表2を補足として概観を記述していきたい。

1. 穹穴内の土器

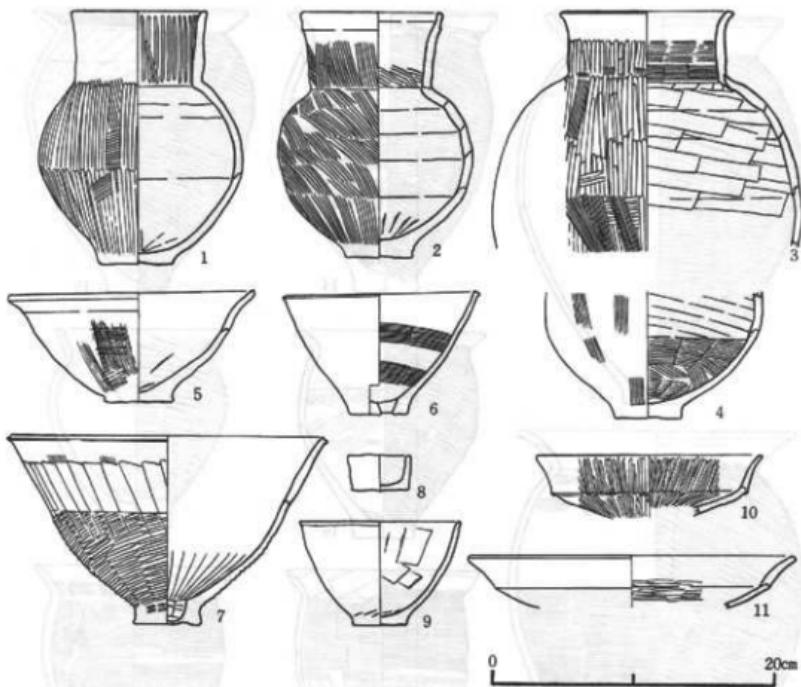
床面近くから出土したものは甕21と鉢9の2点である。甕21は小形で外面に3条～3.5条/cmのタタキ目がみられ、口縁部の中程の接合痕以下にもこれが残る。口縁部はあらいヨコナデを加えただけの粗雑な作りである。鉢9は小形で成形にはタタキ手法を使用せず、ナデによって仕上げている。土製點23も南壁沿いの中央部床面近くから出土したもので、暗褐色を呈する。

埋土内の土器は比較的多い。しかしこれらは年代幅をもつものである。量的には甕が多く、特に埋土上面から出土したものには完形に復原できるものもある。甕は第11図のよう、大形のもの、中形のもの、小形のものに分けられる。大形の12、13は肩の張った丈高の胴部に外反する口縁部が付く。口縁外面に接合痕があり、タタキメも残る。胴部は13の内面調整でみると3段階に分けた成形の過程が認められる。それに対して、外面のタタキメでは胴下部の一線を

表2 鬼塚遺跡出土第V様式土器の分類表

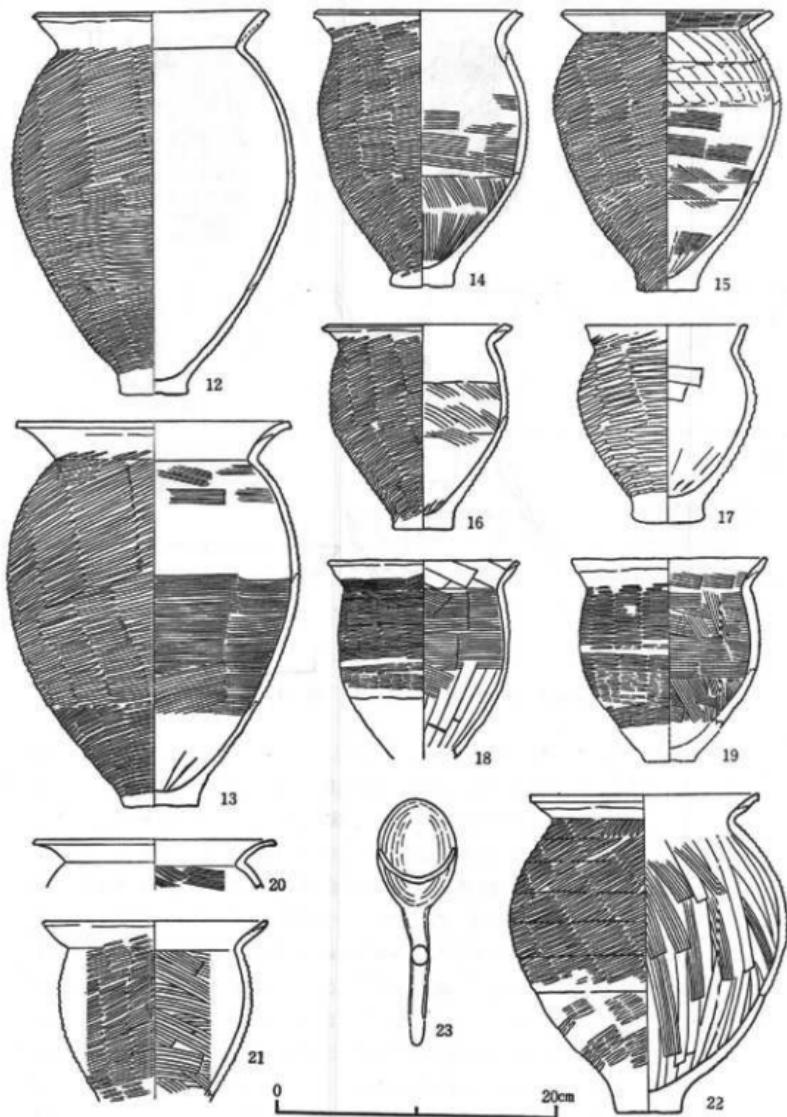
類	A		B		C		D		類	A		B	
	A ₁	A ₂	—	—	C ₁	C ₂	C ₃	—		B ₁	B ₂	—	—
細分	A ₁	A ₂	—	—	C ₁	C ₂	C ₃	—	細分	—	—	B ₁	B ₂
法量	大形	中形	大形	中形	小形	大、中形	大、中形	中、小形	法量	大、中形	中、小形	中、小形	—
口盤	外反	外反	外反	外反	内弯	受口	受口	受口	口盤	外反、内弯	丸、圓	直口	未調整
脚部	面、丸	面、丸	面、丸	面、丸	面	種	肥厚	有	脚部	浅い	浅い	深い	—
底盤のタクメ	—	不明	有	有	有	有	有	有	底盤のタクメ	—	—	—	—
頭部	丈高	丈高	丈高	丈高	球形	不明	不明	丈高、球形	頭部	丈高	無有	直口	未調整
タクメ	3~3.5cm	2.5~3cm	2.5~3.5cm	3~4cm	cm	2.5~3.5cm	3~4cm	3~4cm	タクメ	—	—	—	—
ハゲメ	2.5cm/cm ²	金目、板根	金目、板根	—	金目、板根	有、無	有、無	有、無	ハゲメ	—	—	—	—
上げ底盤	有孔底盤	—	—	—	有孔底盤	—	—	—	上げ底盤	—	—	有有	有有

	高杯		
類	A	B	C
細分	——	——	——
性質	大、中形	大~中形	中、小形
杆口様	直立	外反	漏狀
脚柱	中空 (円錐充填あり)	中空	中空
脚筋	あり且わざり	隆起	開方あり

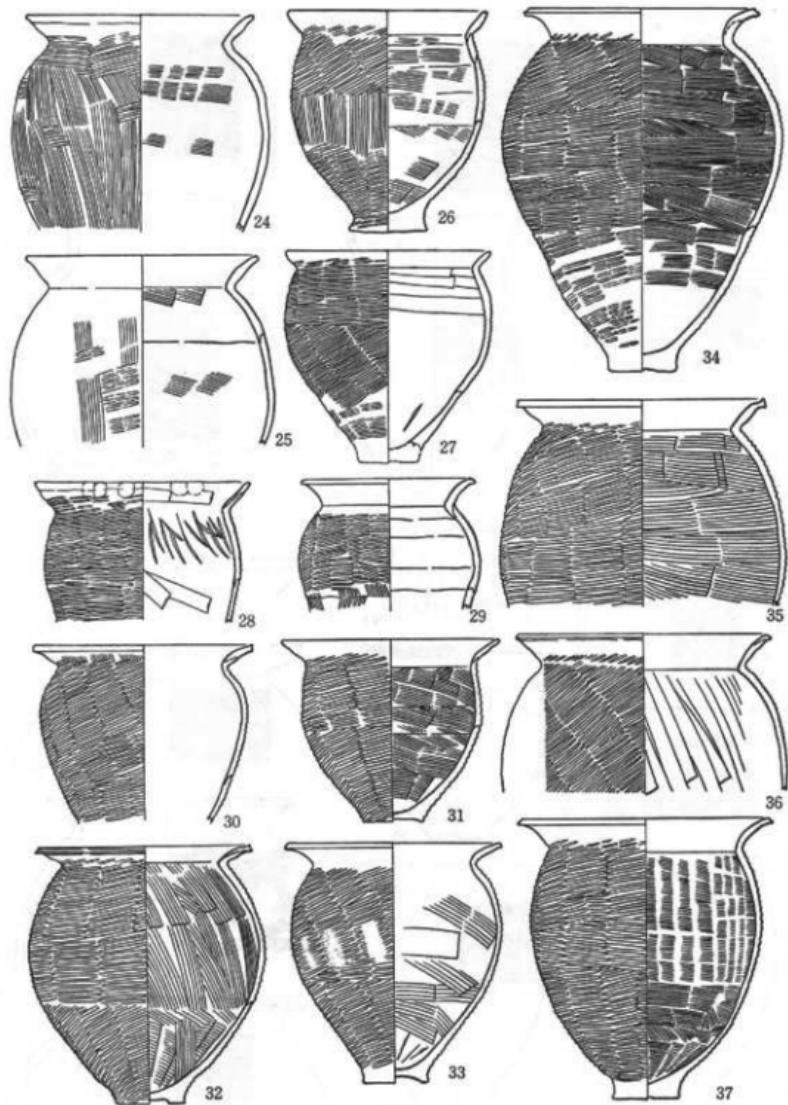


第10図 壺 穴 内 の 土 器 壺、鉢、高杯

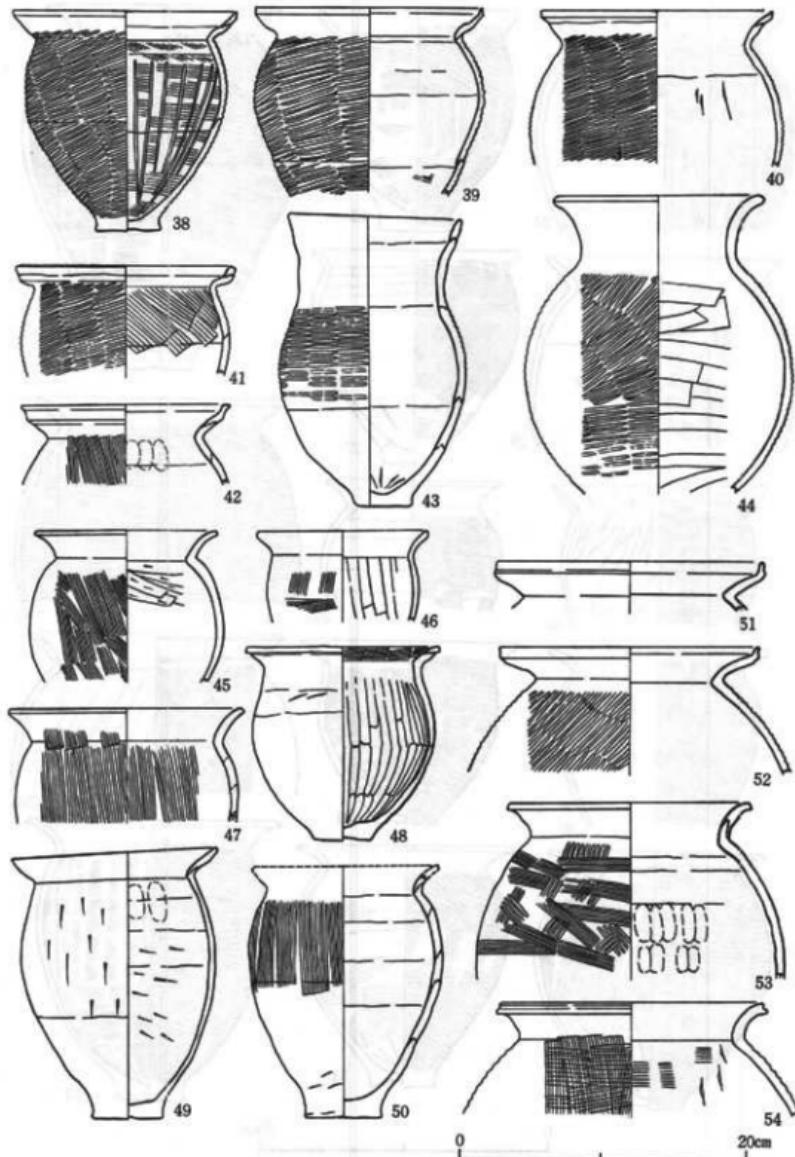
境に傾きを変えるが、最大径部ではタタキメが変化する明らかな一線はない。13のタタキメ原体は胴下部の一線を境に下が細筋（3.5条/cm）、上が太筋（2.5条/cm）と明らかに違ったものを使用している。22は球形に近い胴部をもつもので、胴下部の接合痕以上は2～3cm幅の粘土紐接合痕が認められ、みかけの上では胴下部を除いた成形は連続している。中小形の壺においても、胴内面には2段階あるいは3段階の成形過程が認められ、15、16外面のタタキメは2段階に分かれている。このうち小形のものには個性があり、17のように太筋（2条/cm）のタタキメをもつものや、18、19のように細筋（3.5～4条/cm）のタタキメに口縁部をほとんど調整しない特徴をもつもの等が認められる。壺は、図示しなかったが擬回線+円形浮文を施すする広口の壺をはじめ長頸壺片も多い。しかし、これらのなかには竪穴外の土器片と接合するものもある。図示した1～3は、いずれも埋土上面ないしは上層より出土した短頸壺で、1と3にはタタキメが残り、2は断続的なハケ仕上げを行なっている。1のタタキメはかなりの細筋（4条/cm）である。鉢はタタキメをみる体部に粘土を継ぎ足して口縁部としたものの5、7、有孔鉢6がある。7の内底面は大きく窪み、一部が貫通している。高杯は断片的なものが少量あるだ



第11図 整穴内の土器　壺、土製品



第12図 第V様式土器甕



第13図 第V様式土器 瓢、壺

けである。10は赤褐色の良好な胎土を使用したもので、杯口縁部は立つものの口径は16cmとあまり大きくはない。他にミニチュア土器8がある。

2. 弥生第V様式の土器

甕A 脇外面のタタキメの上にハケ調整が加えられたものである。そのなかでも外反する口縁端部に面をもち、太筋(2.5条/cm)のタタキメの上にていねいなタテハケ調整を行なった54をA₁、他をA₂として区分される。A₂はA₁と比較して口縁部の形状やハケ調整の行ない方が異なるものを一括している。53はA₁と同様な口縁をもつが、脇部のタタキメが乱方向に行なわれている。24、25は脇部にタテハケを施すが、口縁端部を丸くおさめるものである。

甕B 外反する口縁部にタタキメの顕著な第V様式に通有の甕で、器高によって20cm以上の大形、15cm以上の中形、15cm以下の小形に分けて観察を行なった。大形のもの12、13、22、34～36は丈高的脇部をもち、タタキメ主軸の傾きは脇下部の接合痕を境に変化する。なかには13のようにこれを境にタタキメ原体を明らかに異にする例もある。しかし脇中上部のタタキメは、微妙な変化はあるものの絶じて右上から左下にそれ程時間をおかずつに叩いたような状態がみられる。これら大形甕のタタキは丁寧に行なわれており、内面もヨコハケやナデによって平滑に仕上げられている。中形のもの14、15、32、33、37には、15のように大形甕を縮少した肩の張った器形と37のような張りの小さい器形とがみられる。口縁部は15のみが貼付け、他は接合痕部まで脇部からの折り返しによる。脇部は大きく分けて2段階のタタキメが認められ、内面ではさらに3段階の接合痕が認められるもの14、15がある。15の肩部内面は1.5～2.5cm幅の粘土紐の継ぎ目が残っている。32は発達した球形に近い脇部をもっている。小形のもの16～19、21、26～31は各種がみられ、量的にも豊富である。まず、やや内轉ぎみに外折する口縁部がほとんど未調整のものは、すべて小形の甕に付く18、19、21、28。これらは脇部の張りをほとんどたず、明らかに口径の方が大きい。口縁部は、脇部の上縁を折り返して大まかな口縁形を作り出した後に端部の粘土のみを補充している。この補充部分は両面からつまむように指圧を加えてやや内轉ぎみであり、これをさらにヨコナデすれば上面に肥厚する甕C₁の口縁端部となるものである。脇部は最大径下を境に2段階に成形し、21を除いて外面には細筋(3.5～4条/cm)のタタキメがみられる。しかしながら、これらのタタキ手法は、脇下部にタタキを行なっていない18を典型として、脇部を叩きのぼして膨らみをもたせるタタキ手法の効果はほとんどのよう粗雑な作りである。他に、口縁端部を丸くおさめる26、27、31は、2段階成形の脇上半部内面に2～2.5cm幅の粘土紐の継ぎ目がよく残っている。また、外反する口縁端部に面をもつ29は、肩部も口径を凌ぐ張りをもち、大形甕の器形を縮少した形態をなしている。

甕C 口縁部が外反したのち端部が立つ受口状口縁を有するもので、これはさらに上端部に面をもつC₁、上端に突出し先端が鈍い稜となるC₂、上端に稜をもって肥厚するC₃に分けることができる。今回出土したC₁はいずれも中形の甕で大形のものはない。42はタタキメをていねいなタテハケで調整し、41はタタキメをそのまま残すものである。両方とも口縁中程に接

合痕を見る。C₁はC₁とは逆に大形のもの51、52が出土した。51は端部の突出部外面に擬回線がめぐるものである。C₁はつまみあげぎみのヨコナデによって肥厚したものである38~40。上端の肥厚部はないが口縁端部のヨコナデの施し方が同様なもの22、30もこの類に準ずるものである。30、38~40は一括出土したもので、シャープな口縁端部は上田町2式壺に類似するが、器形やタタキメ等は他と変わることろがない。

壺D タタキ手法を用いずに胴部を成形したものを一括する45~50。いずれも胴部の張りがあまりなく、外面にはハケメやあらいナデ、内面にはヘラ搔きやあらいナデがみられる。49は内外ともヘラで搔き削って器壁を薄く上げている。48の胴上半部外面と47、48の胴上半部内面には1.5~2.5cm幅で粘土紐のねぎ目が認められる。この接合痕の状態からは、タタキを用いた壺と同様、下半部を先に製作してその上に粘土紐を積み上げている。これらは調整が行なわれた後も粘土紐の凹凸がよく観察できる。

広口壺A 直立する頸部に外反する口縁部が付き、口縁端部を下方に拡張して施文帯とする。大形のもの56、57が多いが、小形のもの55もある。いずれも施文帯にヘラ先沈線による擬回線+円形浮文が付き、さらに刺突列点文がめぐるものもある。

広口壺B 直立する頸部に外反する口縁部が付くが、無文である。口縁端部を下方に拡張するB₁ 59、端部がほとんど拡張されないB₂ 61~64、頸部から口縁部へゆるやかに移行するB₃ 60に分けることができる。58、61、64にはススが付着する。

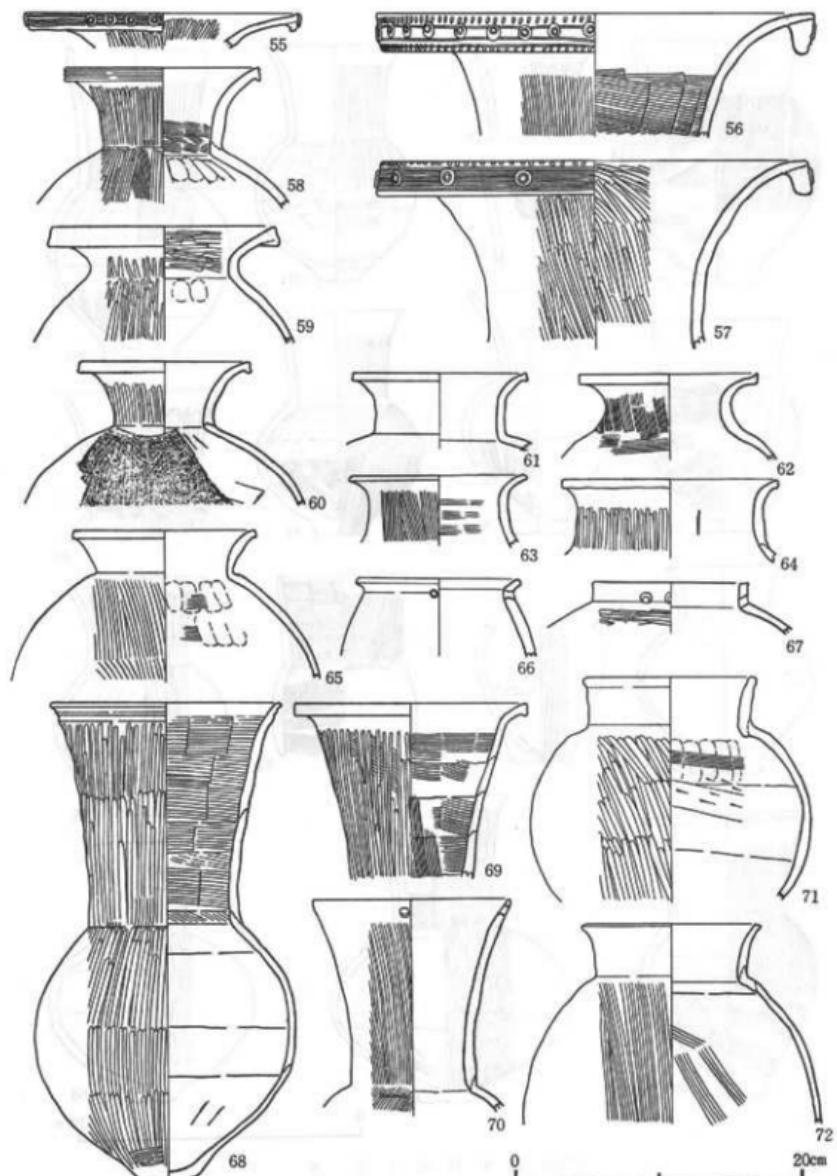
無頸壺 脇の張りが小さく、短く外反する口縁をもつ66と、大きく張る頸部に直立する短い口縁をもつ67がある。いずれも頸部との境に紐穴を有する。66は生駒西麓の胎土ではない。

短頸壺A 直立する短い口頸部が付くもので、比較的大形のもの3、中形のもの71、小形の長頸壺の口頸部を短かくした形状のもの等がある。今回の出土例は球形の胴部が付き、卵形の長手の胴部が付くものはない。1、3、73には胴外面にタタキメが残り、そのうち1、73のタタキメは細筋である。1、43、73にススが付着する。

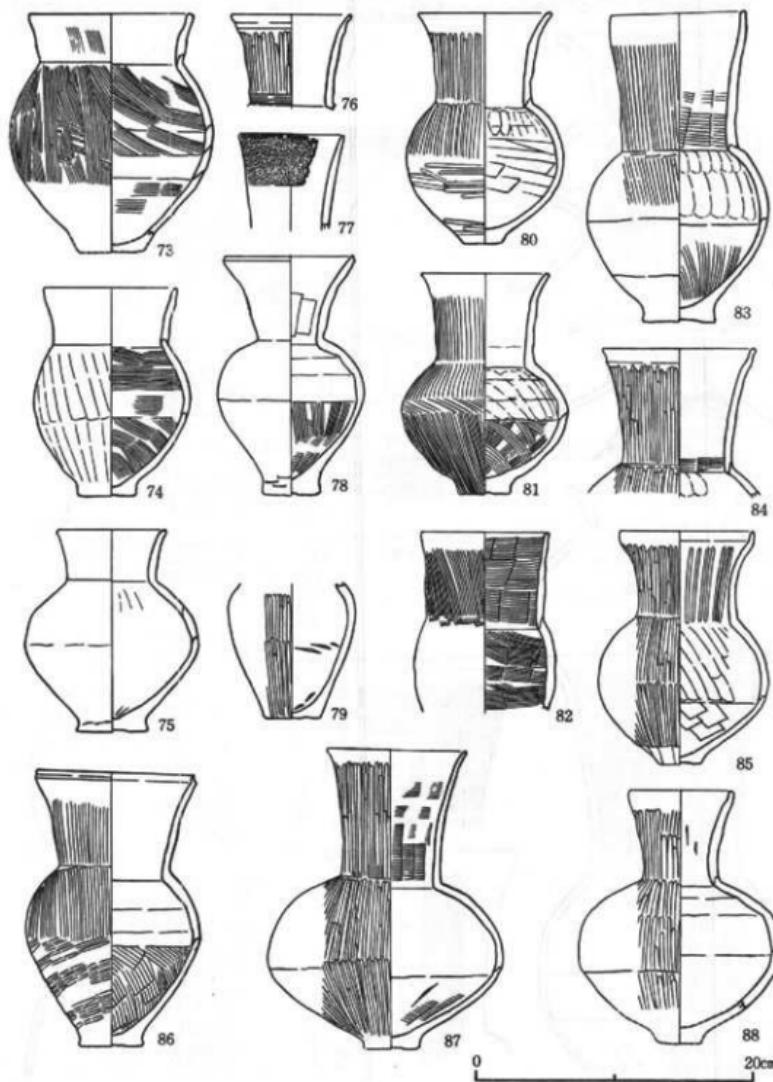
短頸壺B ラッパ状に短く外反する口頸部が付くもので、胴外面を目の粗いハケで調整した壺65、72。72はススが付着する。

長頸壺A 円筒形の長い口頸部をもつ長頸壺で、直口のA₁とその他のA₂とに分けることができる。今回出土しているA₁ 68、70は大形に限られている。68は器高33cmを測るもので、口縁部に2条の回線がめぐり、底部はあまり突出しない形態をとる。全体にヘラミガキを行なっているが胴下部にはタタキメを一部に残している。70は回線はないが同様な口縁形で、端部近くに紐穴が穿たれためずらしいものである。次に、A₂としてまとめたもののなかには、外反する口縁部をもつ大形の69、内轉ぎみの口縁部をもつ中形の83、その他の小形の長頸壺78、80~82、84~86等がある。このうち小形の長頸壺には明褐色~赤褐色の良好な焼きあがりのものが多く、調整もヘラミガキ、ハケ原体によるナデ、ていねいなナデ等によって平滑である。また、86の口縁端部は上方に肥厚する壺C₃と同様な形態で、胴下半部も壺や鉢と共に通するタタキメを見るものである。

長頸壺B 扁の張った扁球形の胴部に対して、細く長い口頸部が付くものである76、77、



第14図 第V様式土器壺



第15図 第V様式土器

87、88。77は口縁外面に櫛描き波状文を施文する。施文は樹原体の方が動いたもので、弱々しい文様である。87は口頸部の形態では長頸壺Aとさして変わらないが、大きく脹の張った胴部と対比すればこの範疇に入るであろう。88は口頸部がやや短いが基本的な形態である。

これらの他の形態をとる壺としては44、79、89がある。44は球形の胴部に外反する短い口頸部が付くもので、胴部全体にタタキメを見る。ススの付着はない。79は薄手の底部に肩の張った丈高の胴部で、これに付く口頸部がどのようなものか判断し難い。89は球形の胴部に内脣ぎみに立つ口頸部が付く。

蓋 口縁内面に沿ってススが付着する蓋が2点出土している90、91。天井部のつまみは鉢にみられる上げ底を逆転した形。

鉢 A 壺の下半部成形段階と共通する器形から鉢として仕上げた大形のもの99、111、112。成形段階の擬口縁をヘラナデしただけのもの111と、粘土紐を縫ぎ足して口縁部を作りたすものの99、112がある。これらは壺の成形段階では内面ハケ調整であるのを、鉢とするものでは最終仕上げに内面ヘラミガキを加えるものが多くみられる。他に、成形段階にタタキメを使用した小形の鉢もまれにみる。

鉢 B 壺の下半部と共に通する器形の中形の鉢。タタキメの有無でB₁とB₂に分かれる。中形の92は、壺 C₃と一括出土のもので口縁形態もよく似ている。93、102、103の口縁端部は擬口縁のままである。また、底部には指おさえによって上げ底ぎみに仕上げたもの93、100、103があるほか、円孔を穿って有孔鉢としたもの96、100、101もある。この種の鉢は器形では壺の下半と共通するがタタキメを使用しないで仕上げたB₂ 97、98、104~107も多い。これらは外面に粘土紐積み上げによる凹凸や接合痕を残し、底部が106、107のような顯著な上げ底を呈するものも多くみられる。有孔鉢では104のように内面からの穿孔の際にはみ出した粘土によって正立不能となった底部をもつものがある。

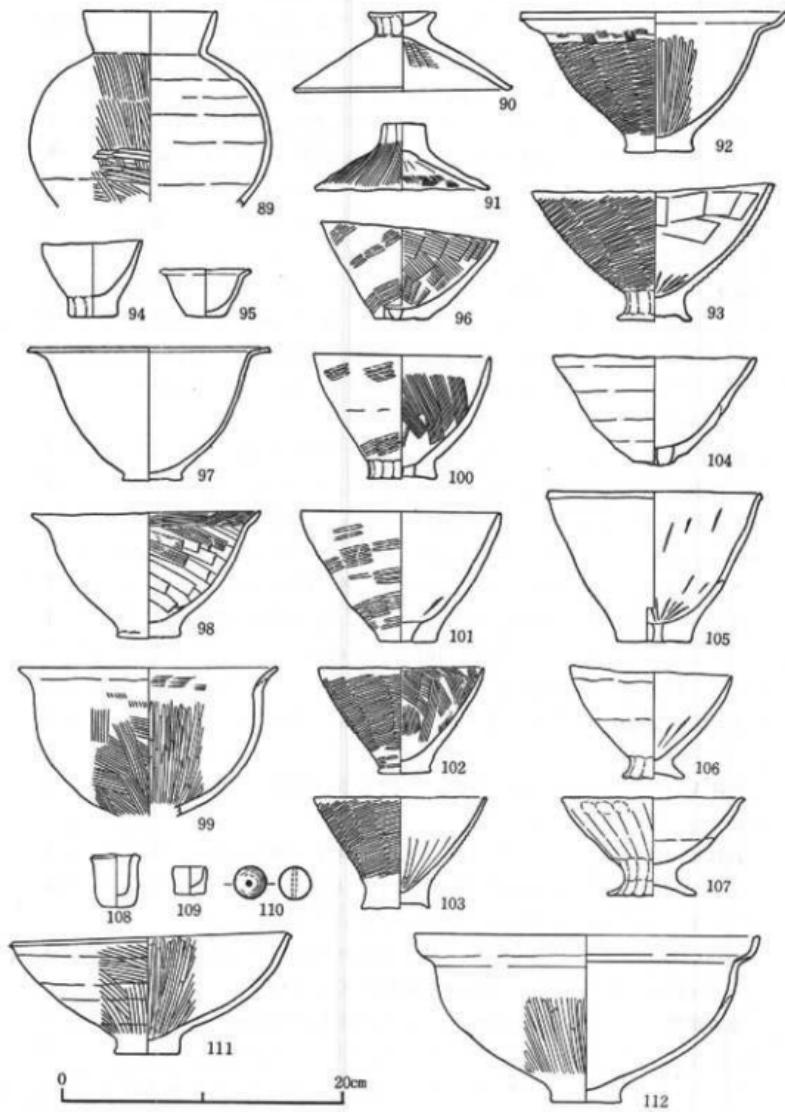
ミニチュア土器 鉢の器形を小形化した94、95と器形を考えずにただ小形に作っただけのものがある。

高杯 A 杯口縁部が直立ぎみの高杯で、今回の土器には破片にそれらしいものが微量あるが明確なものは出土していない。

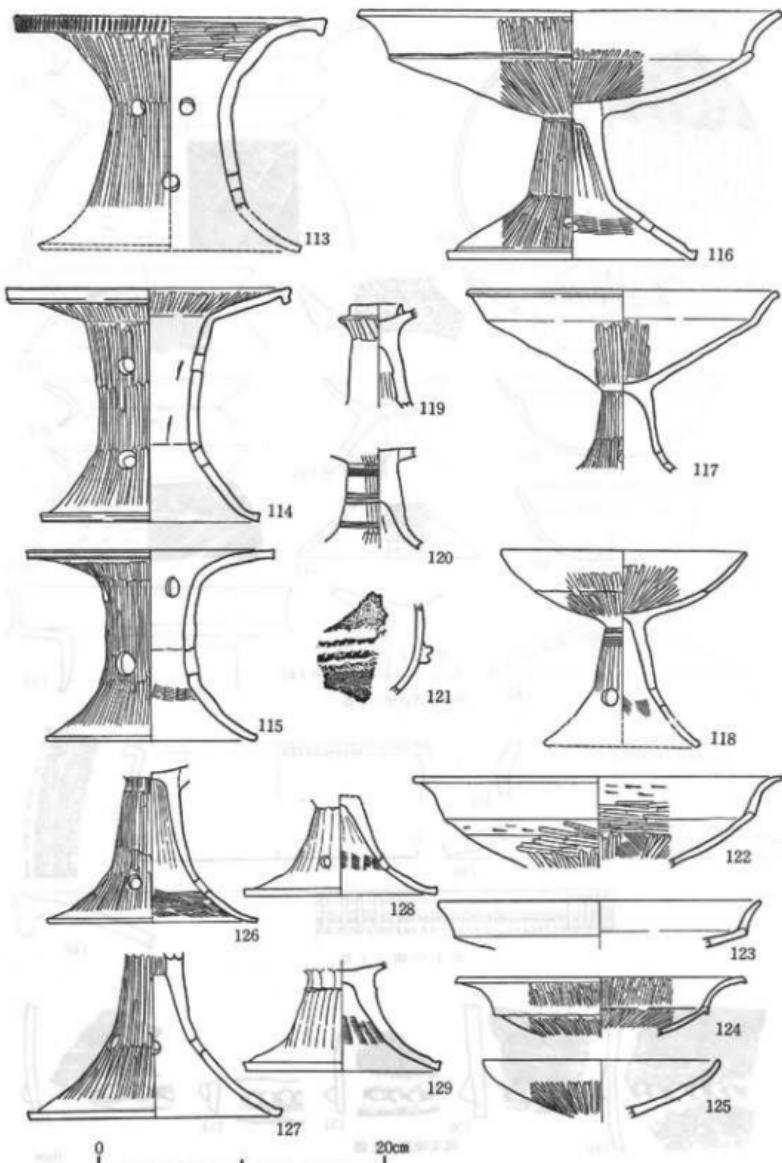
高杯 B 杯口縁部が外反するもの116、117、122~124。116は杯口縁部と底部の接合部外面に擬凹線をもち、脚柱部にも擬凹線がめぐる。117は杯部の屈曲部の稜が鈍いもので、124は逆に杯口縁部が鋭く外反し、屈曲部に突線がめぐるものである。

高杯 C 瓢状の杯部をもつ高杯118、125。118は杯部の口縁部と底部に相当する部分の境に接合痕があり、脚柱の上縁にもヘラによる横線がめぐっている。

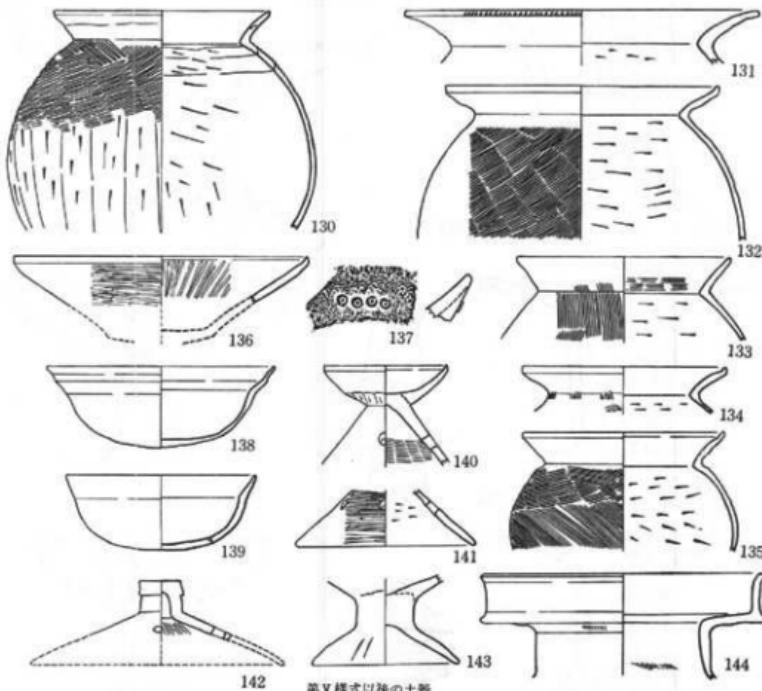
高杯脚部 中空の脚柱部が圧倒的な量を占め、半中実のもの120が少量ある。完全な中実の脚部はない。形態はいずれも裾部が開くもので、脚柱からなだらかに開くものが多く、116の脚のように脚柱から屈曲して開く例は少ない。杯部との接合方法は、脚部だけを半完成品としたうえで杯部粘土を積み上げていく方法で、典型的の1つは脚部の上面にヘラミガキされて杯内底面となっているもの、もう1つは脚柱の貫通孔に杯外底の突起が挿入されたものがあげられ



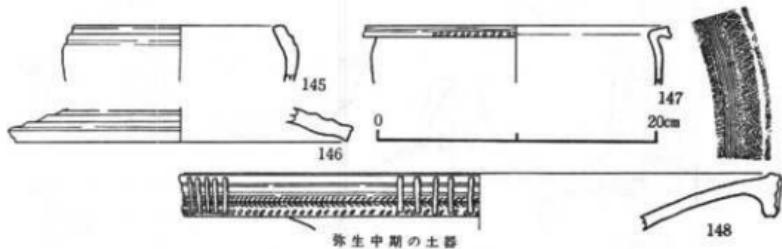
第16図 第V様式土器壺、鉢



第17圖 第V樣式土器 高杯、器台



第V様式以後の土器



弥生中期の土器



縄文晩期の土器

0 10cm

第18図 第V様式以外の土器

る。

器台 A 円筒形の中空部から上下にそれぞれ外反する口縁部と裾部をもつ器高20cm以内の小形の器台。口縁端部を拡張して施文帯とする A₁ 113、口縁端部を拡張するが無文の A₂ 114、口縁端部はそのまま面となっておわる A₃ 115に分かれ、しだいに小形化している。

3. 第V様式以外の土器

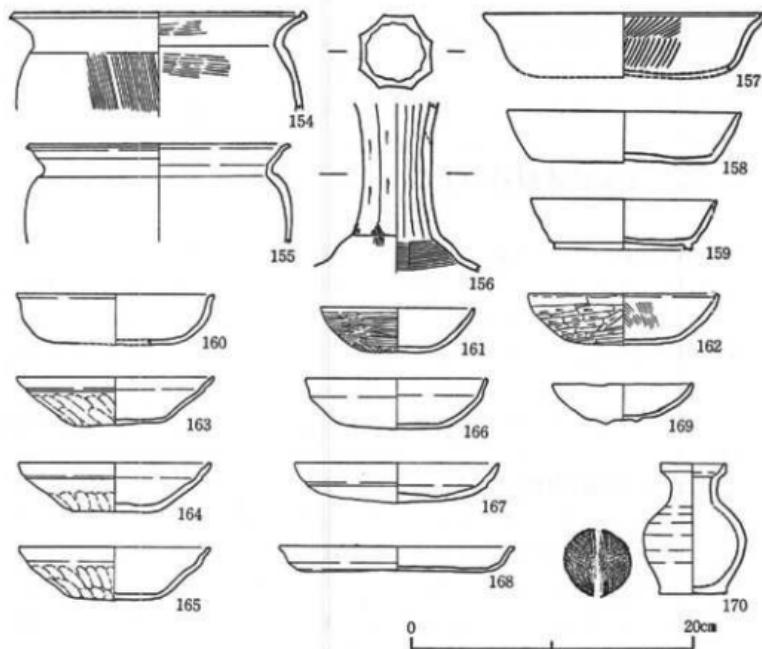
縄文晩期の土器 縄文晩期末船橋式の深鉢片が少量出土している149～153。いずれも刻目凸帯がめぐり砂粒を多く含んだ生駒西麓の胎土を使用する。なお、今回の調査地区では明らかに弥生前期と判別できる土器は見い出せなかった。

弥生中期の土器 少量のみの出土。145、146は回線文をもった鉢と器台の小破片、147は甌口縁部である。148は口径40cmを超える大形の器台で、口縁端部の拡張部には回線、半截竹管押正文、刺突列点文のうえに5本1組の棒状浮文をもち、口縁内面にも回転台を利用した柳描き波状文+直線文を施文している。

上田町2式～古式の布留式土器 壺は「く」の字に鋭く外反し端部が上方に肥厚する口縁部に胴部内面をヘラ削りする典型的な上田町2式壺がある132、134～135。130は形態は類似するが胎土や外面のタタキ(3.5条/cm)、ヘラ削りなどに相違をみる。133は胎土が同じであるが、口縁端部の肥厚部は鈍く、胴部外面のハケ調整など新しい要素をみる。131は胴部内面をヘラ削りするものの第V様式か以降か判断し難い。壺は2重口縁のものが出土している。144はやや内傾する頸部と2重口縁の屈曲部外面が突堤状の段を作る特徴をもち、灰黄色の精良な粘土を使用している。胎土は生駒西麓のものではない。137は口縁端部に粘土を補充して施文帯とし、全体の口縁形を2重口縁様にみせたもので、施文帯は櫛原体の運動による波状文と上端部の刻目文によって加飾されている。高杯は半球形の椀状杯部に初で大きく聞く脚部が付くものが脚部だけ出土している142。143はその前身的な形態のものと思われ第V様式以降のものかどうかわからない。水平な杯底部から大きく長く外反する杯口縁部が付く高杯も断片ながら出土している136。他に、いわゆる小型精製土器が少量出土している。140、141は小型器台、138はやや大きめの小型鉢、139は小型の杯である。いずれも赤色系の色調を呈する。小型丸底壺は今回及び前回の調査でも認められていない。

4. E—3地区出土の奈良・平安時代の土器

土師器には杯、碗、皿、高杯、壺、羽釜等があり、須恵器には杯、壺等がある。土師器杯157は口縁部が立つもので、端部は折り返しておわる。口縁内面には2段に放射状暗文が施されている。160は暗文をもたず、内外面ともナデによって仕上げている。いずれも精良な胎土を使用しており、奈良時代の杯である。碗はヘラミガキで仕上げたもの161、ヘラ削りを行な



第19図 E-3地区出土 奈良・平安時代の土器

うもの162の2点が精良な胎土を使用し、奈良時代の碗である。一方、163～165は口縁のヨコナデ以外は指成形のままであり、凹凸を残している。胎土には金雲母が顯著な砂粒を多く含み9世紀以後のものと思われる。土師器皿では167、168がある。土師器高杯は8角形の脚柱をもつものが出土している。土師器壺は2個体図化した。154は外面タテハケ、内面ヨコハケ調整で、口縁端部を折り返すもので、口縁と胴の境のヨコナデは強くない。155は口縁と胴の境のヨコナデが強調されたものである。

須恵器の杯には高台が付くもの158とないもの159がある。壺170は器高9cmの小形のもので、底面にはろくろからの切り離し痕が残る。これらは奈良時代～10世紀代のものと思われる。

V ま と め

1. 遺構について

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代後期の竪穴住居址、ピット、溝と古墳時代のピット、奈良～平安時代のピット等である。このうち、性格の明らかなものは竪穴住居址と奈良～平安時代の掘立柱建物で、特に竪穴住居址の検出は生駒西麓では数少ないものだけに注目される。この住居址は標高26mをはかる扇状地の南斜面に位置し、土層の堆積状態などからみて、生駒西麓では洪水の危険の少ない比較的高燥な地点にあることがわかる。さらに、この住居址は火災に遭っており、竪穴内に遺存する炭化材は上屋の構造を知るうえで非常に貴重な資料となるものである。

上屋の構造について、まず目をひくのは板状炭化材の量が多いことである。これらの出土状況をみると、板材のもの同士が重なり合うものや、竪穴外から斜めに落ち込んだ状態のものがあるため、板状炭化材は板葺の屋根材である可能性が大きいと思われる。このような板葺の上屋構造のものは現在までにあまり報告されていないが、静岡県登呂遺跡の第2号住居址は遺存した建築用材に板材が多いことからそれと指摘されている^⑨。また、秋田県の藤本小谷道跡で発見された埋没家屋は、板葺屋根を地上まで葺きおろして下端を土中に埋め込んで固定している構造をもっている。この家屋は平安時代のものと考えられているが、竪穴式に属するものである。屋根材には葺縄や釘穴等がないことからこれを固定する方法としては、粘土が上に塗り付けられていたのではないかと考えられている^⑩。さらに、北海道の擦文時代の岐阜遺跡においても、板状炭化材が屋根材と考えられる例が認められている^⑪。そこでは、板状の材は竪穴外の盛土上に固定した横木を下端の支えとして朽木にもたせかけたものと推定している。鬼塚遺跡の住居址を板葺とすると、これらの板材を固定する方法が問題となるが、西日本において類例がないものだけに、結論は後に残しておきたい^⑫。

一方、板状炭化材以外の構造材の架構については、大きく分けて2通りの考え方ができる。第1は、出土状況どおり竪穴内の壁面下から又首あるいは粗木を棟木に架構するもので、第2は、竪穴外にこれらを述がす方法であるが、第1の方が遺構および炭化材の状況から可能性が大きいものと考えられる。このように、竪穴内の炭化材の状況からは屋根材や架構方法に従来あまり類例のない構造のものが考えられるが、もしこれが住居であれば、竪穴内の屋内空間はかなり狭苦しいものとなるため、土器の素材と思われる粘土塊の存在等から作業小屋的なものとする憶測も生じてくる。いずれにしても、板葺屋根や架構方法等はどれだけ一般化し得るかは疑問であり、今後資料の集積を待って建物の用途を含めて考察されるべきものである。

以上のような上屋構造に関する問題の他に、住居の平山プランや屋内高床部の存在も注目される。畿内の弥生後期の住居プランは、石野博信氏の整理によると^⑬ 集落単位で「円型」主流、

「円方」混在、「方型」主流に分かれるようであるが、住居址プランが変化する傾向としては、「円型」から「円方」混在、「方型」への変化がおおむね後期のなかで生じたものと考えられる。中河内では、從来より竪穴住居址の検出例が少なく、現在の段階では生駒西麓の東大阪市域での6例^⑥がわずかに地域的なまとまりをもつ。そのうち「円型」は第V様式前半の岩滝山遺跡だけで、他は「方型」ないしは「長方形」である。そして「方型」プランの4例のなかで、弥生中期の山畠遺跡例と5世紀末の馬場遺跡例を除いた鬼塚、皿池の2例は、皿池が第V様式後半、本例も埋土内の土器に細筋のタタキメをみると同じく後半に位置づけられる。この2例をもって、ただちに生駒西麓の住居プランが第V様式のある時期を境に「円型」から「方型」へと変化したとは確定し難いが、第V様式後半には「方型」が主流を占めているものと思われる。この時期の生駒西麓集落の動向とともに注目される。

屋内高床部の存在は、畿内では北摂や北河内で確認されているが、中、南河内では大阪府東山遺跡でそれらしきものが1棟認められるにすぎない。今回検出した高床部は、長方形プランの一方の短辺だけに5cm程高いベッド状部が認められたもので、播磨大中遺跡や浜津の紅葉山遺跡のように方型プランの3方向ないしは4方向、長方形プランの両短辺にみられるような典型的な屋内高床部^⑦と同様なものかどうか、疑問が残る。

他に、土器の素材と考えられる直徑30cm程度の焼粘土塊を6個体検出したことが注目される。これらの焼粘土塊は屋内中央部で懸垂されていたと思われる一個体と、西北隅に積み上げて保存された状態の5個体とに分かれるが、いずれも胎土そのものに顕著な差はない。懸垂されたものの方は、他の5個体に比べてより製作段階に近いものかと思われ、土器の製作にあたってはある程度の保存期間も考慮して粘土の採集が行なわれていることがわかる。これらは、角閃石や雲母粒を多く混えたもので、今回出土した土器のなかでは明褐色～赤褐色の色調を呈する壺にはほとんど同様の胎土が認められる。壺や高杯にも器表の磨きやナデの部分を除くと同様な胎土のものが多い。ちなみに、これらの焼粘土塊の重さは中央部のもので約5kg、西北隅の5個体は合計で約45kgを量る。壺の一個体の重量と対比すれば(表3)、中央部のものは小形壺で10個、大・中形壺で2～4個分の素材に相当する。また、竪穴内の粘土塊の総量は、小形壺100個、大・中形壺20～40個分もの素材に相当する。実態としては、これらの個体数より少なくなるであろうが、一定の保存期間内においてかなり大量の土器が製作されていた事実の一端はうかがえるであろう。その結果、必然として壺、鉢に共通する逆円錐台のような半完

表3 焼粘土塊と土器の重量

焼粘土塊の重量(kg)	完形の壺形土器の重量(kg)	
中央部 — 5.2 西北隅 5個体 — 計 45	(昨年度出土鬼塚遺跡I掲載) 図42 — 2.05	(本年度) 図22 — 1.46
	(昨年度出土鬼塚遺跡I掲載) 図45 — 1.31	(本年度) 図14 — 0.94
	(本年度) 図38 — 0.54	(本年度) 図16 — 0.56

成品が大量に生産され、後述するように乾燥がかなり進んだ段階でタタキを行なうような事例も生じたのである。

2. 遺物について

鬼塚遺跡では、今回の調査によって繩文晩期末～歴史時代の広範な時期の遺物が出土している。このうち遺物の出土量が多いのは弥生後期の土器で、内容も豊富である。他に、船橋式凸帯文土器と上田町2式～古式の布留式の土器が、包含層内に少量ながら含まれ、上層からは歴史時代の土器も出土している。

船橋式縄文土器は、遺跡範囲のなかで広い分布を示す遺物であり、これに弥生前期の壺が伴って出土する場合がある。これら両者の関係について、昨年度の調査では、層位的な解釈と船橋式土器にみられる弥生土器の影響から同時期とみなしている。しかし新たな資料が期待された今回の調査では、船橋式土器の出土量は少なく、遺構においても弥生後期の他に前期の遺構が重複しているとは認め難い状況であった。従って、船橋式縄文土器と弥生前期の壺とは、鬼塚の集落が縄文晩期から継続するものである限り、弥生文化を受け入れた段階に古い要素をもつ船橋系土器と弥生土器とが一定期間共存することは当然考えられるが、その実態はさらに今後の検証にかかわっている。

さて、出土遺物のなかで大半を占める弥生後期の土器は、以前の調査においてもかなりの量が出土しており、今回のものを加えると生駒西麓の後期弥生土器の実態はかなり詳細に知ることができる。以下においてこれらを整理しておきたい。

今回出土した土器は、弥生後期のなかである程度の年代幅をもつものである。まず、このなかで古い要素をもつものと新しい要素をもつものを選んで年代観を示しておく。

古い要素をもつものは、齧では大形の長頸齧 A₁ が全体の形状と突出しない底部、直口の長

表4 生駒西麓出土の第V様式土器一覧表（年代組を認め得る器種、要素について）

い口頭部、口縁下の2条の凹線文等から第V様式初頭の西之辻I式期に位置づけられる。広口壺A₁、B₁もI式にある。しかし広口壺A₁はより広い年代幅をもつ器種でもある。壺では大形のA₁が胴外面のタタキメをタテハケで調整している施し方にIV様式の名残りをとどめている。

一方、新しい要素としては、壺では細長い口頭部に張りのある胸部が付く長頸壺B、広口壺のなかでも直口壺に近い口縁形態のB₂、短く外反する口縁部をもつ短頸壺B等は、後期後半に現われる器種である。口縁端部を拡張しない広口壺B₂や外反する口縁をもつ小形の長頸壺も同じく後半に盛行する。壺では器形にかかわらず細筋のタタキメをもつもの、受口状口縁のC₂、小形の壺で口縁未調整の粗雑な作りのもの等が後半期になって現われるものと思われる。これらの新しい要素をもつ土器は同じ生駒西麓の上六万寺遺跡や馬場川遺跡の井戸遺構出土の土器に類似がある。このうち上六万寺遺跡には高杯の杯口縁部が長大化する傾向と中実の脚部が認められ、本遺跡とともにV様式を4段階に分けた場合の第3の段階に位置するものの、本遺跡の土器よりはやや新相を示すものとみられる。また馬場川遺跡井戸遺構より出土した土器は、脚内面をヘラ削りする壺を代表とする上田町1式期の段階を示しながらも、一方では古い要素を残す一群の土器を含んでいる。このなかには広口壺A₁も認められるので、広口壺A₁を含む一群の土器は型式上は本遺跡ならびに上六万寺例に類似した様相を呈している。

以上のことから、鬼塚遺跡出土の第V様式上器は、生駒西麓で分ける4段階のなかの第1の段階から第3の段階までを含んでおり、そのなかでも第1の段階の標識である西之辻I式にはそれ程多くの造物を含まず、次の第2、第3の段階に盛行し、上六万寺遺跡よりやや古相のものまでを含んだ年代幅をもつものと考えられる。しかし西之辻I式以降の各段階は、古い形態や手法による各器種のなかに新しい要素が漸進的に混在していくような移行過程であるために、本遺跡の土器をさらに区分することは難かしい。ここでは内容のまとめとして、各器種ごとの概観を記述するにとどらざるを得ない。

壺は、第V様式の後半期に出現する2重口縁壺が、上田町2式期のものを除いて出土せず、有文の広口壺Aが依然として用いられている。無文の広口壺Bは他遺跡と比較すると有文のAに比べて器形の消長がみられる。大形で口縁端部を拡張するB₁は西之辻I式にはほぼ限られ、これより小形で脚部を拡張しないB₂やB₃はその後に現われて無文の壺の主体をなす。本遺跡に限らずB₂、B₃は直口壺とともにスヌの付着する割合が高い。今回出土のB₃の肩部に水鳥かと思われるヘラ描き絵画がみられる。これは土器に描かれた絵画としては第V様式後半の新資料である。壺は脚下半に残る接合痕が顯著で、接合痕以下の大きさは壺の大小に比してあまり大きな違いがない。この接合痕以下に細筋のタタキ原体(3.5/cm)を使用し、以上に太筋のもの(2.5条/cm)を使用した例などもあって、接合痕以下だけを先に半乾燥の状態まで作っていることがよく判る。脚上部は、タタキメの傾きに顯著な境界をみると少なく、多くは右上から左下に連続して叩く動作を繰り返して成形している。この手法が球形壺の壺により顯著にみられたものを、都出比呂志氏は「連続ラセンタタキメ」^④と呼んでいる。また内外面には1.5~2.5cmの幅で粘土紐の接合痕が残るものが多く、脚下部の顯著な接合痕以上はみかけ上、粘土紐を連続して積み上げたものもある。これらは、脚上部の成形には擬口縁をなす程の半完

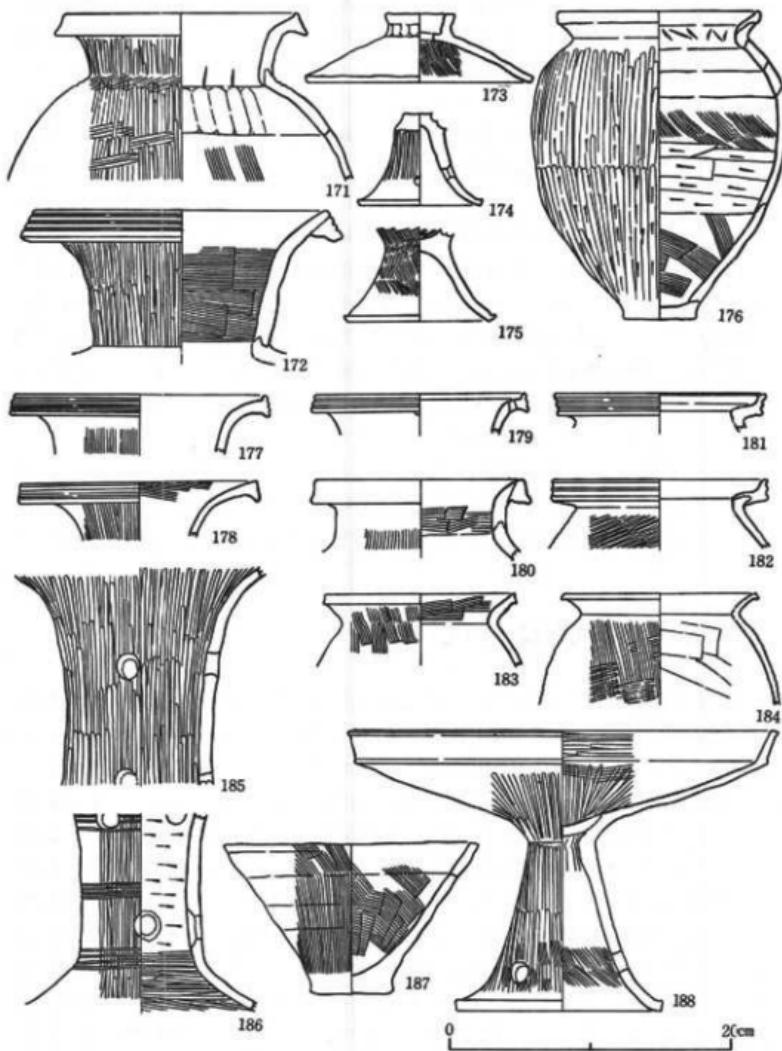
成品をつくることなく、器壁が崩壊しない程度の積み上げと乾燥の作業を繰り返したためであろう¹⁰。また、タタキメの下に粘土紐の接合痕が認められるものやタタキメ痕の浅いものが甕や鉢にみられ、タタキ手法は粘土の乾燥がかなり進んだ段階でも行なわれたことが判る。このことは甕の肩部球形化が進展しない一つの原因にもなっている。さらに、甕や鉢にはタタキ手法を使用しないで成形を行なったものもあり、特に鉢で甕下半部と共通する器形のものには顕著である。この種の鉢では粘土紐の接合痕、器壁の凹凸、全体の歪みなどを残しており、器壁の均質化や器形の成形のためのタタキ手法は必要ではなかったのであろう。そのため、タタキを行なったものにも手法の効果が疑われる程度の痕跡しか残さないものが多い。高杯は杯口縁が外反するもの、楕状杯部のもの、外反するが肩部の稜が鈍いもの等西之辻E、D地点にみられる形態を主体としている。脚部は中空と少量の半中実の脚柱で、中実のものはない。完形の116のように杯口縁と底部の境に擬回線、脚端上部に回線をもつものがあるが、I式の高杯とは杯口縁の他に脚部の拡がりや製作方法等に相違がある。場合は口縁端部を拡張して施文するもの、拡張はするが施文はないもの、拡張施文ともないものの3種がみられ、拡張部の消滅は同筒形器台の最終の段階を示すものと思われる。

これらの第V様式土器は、いずれも生駒西麓の胎土で製作されているのに対して、上田町2式期には吉備地方からの搬入品かと思われる2重口縁壺がみられる¹¹。昭和48年の調査で東海地方のS字状口縁台付甕も出土していることと合わせて、V様式以後は生駒西麓でも土器の移動が盛んになる傾向がうかがえる。

3 2.3の問題について

西之辻I式について 次に、今回の鬼塚遺跡出土遺物のなかで西之辻I式の段階を問題としてとりあげてみたい。西之辻I式は西之辻遺跡では一括出土の良好な資料として報告されている¹²にもかかわらず、他の遺跡に類例が認められないものであった。地理的に最も近い後期の遺跡である鬼塚では、昭和48年と今回の調査でI式土器が少しづつ出土しているが、なお西之辻I式の純粹なセットは把えられていない。このことは、西之辻I式のセット関係が西之辻遺跡だけの個性なのか、あるいは鬼塚遺跡の後期集落がI式以後に発展したのかという問題をさせては通じかないものとしている。また、西之辻I式は各地の後期弥生土器のなかにあっても特異なものであることから、この型式は生駒西麓の閉鎖的な地域性を表わすものとする見解が生じている¹³。この見解は大局的には正しいものであろう。生駒西麓では第V様式を通して他地域から搬入された土器の割合は非常に低く、土器型式の確立に他からの影響はほとんどないものと思われる。従って西之辻I式に関する問題は、この型式の特徴が第V様式初頭の標識として他地域でも普遍性をもつか否かという議論の以前に、土器様式変化の大さな面期にあるV様式初頭に、前代のIV様式からの系譜がどれだけたどれるかを、西之辻遺跡内において検討することから出発せねばならない。

第IV様式は一般に回線文の盛行した時期とされているが、その実態は第V様式に比して明ら



第20図 西之辻遺跡出土の土器

かではないところが多い。河内では、櫛描文のなかに凹線文が部分的に施文される第Ⅲ様式（新）段階の設定によってIV様式の土器はかなり限定されたものとなっている。かつて、第V様式に続く要素を見い出そうとして抽出した西之辻N地点上層式も、無文である以外は後に続く要素がないことから、現在では西之辻遺跡で生じた変異形とされている⁹。このように、IV様式とV様式の比較は土器型式上の差異の方に重点が置かれて認識されているが、IV様式からV様式への移行期は、低地の大規模な遺跡そのものが分解する歴史上的画期であるだけに、西之辻のように中期から後期へ連続する集落での土器型式の移行形態は注目されるのである。

そこで、V様式初頭の西之辻I式への系譜がたどれるIV様式末の実態を、新しく出土した西之辻遺跡の一資料によってみてみたい。第20図に掲載した土器は、昭和52年10月東大阪市東山町1265番地で住宅建設に伴って約30m²の面積を調査した際に出土したものである。出土地点は、かつて小林行雄氏などが調査を行なった近鉄枚岡車庫用地の南に接し、山本博氏などが調査した第5地点を敷地内に含む場所にあたる。遺物は旧耕土下の黒色土層内に含まれ、自然地積の傾斜面を棚田に整地した際に敷地東側では10cm程の包含層が削平されている。山本博氏らの調査した第5地点の土器が、半分程を削り取られた恰好で出土したものそのためである。

遺物は凸基有茎式石錐1点とIV様式を主体とした土器で、土器は凹線文だけの文様構成をもつ類は少なく、新しい要素を加えたものを多く含んでいる。壺には、口縁端部を上下に拡張して端面に凹線をめぐらすIV様式に通有の壺177、179の他に、口縁端部に厚手の拡張部が下方に付き、太いヘラ沈線による擬回線をもつ172、拡張部はもつが無文で頭部に目の粗いハケメが付く178、180、同じく無文の拡張部と胸部にタタキメをみる171等がある。このなかで凹線をもつ壺以外は西之辻I式にもみられる形態であるが、太く深い擬回線や目の粗い頭部のハケメ等はI式にはないことから、古い要素と思われる。壺は、短く外反する口縁部とヘラ削り+磨きで仕上げた胸部をもつ176、ハケやナデ仕上げの183、タタキメをヘラミガキで半ば消した胸部などがあり、瓜生堂や唐古のIV様式に類似がある。また、受口状口縁に明瞭な凹線文を施し、胸部には右上りのタタキメが見られるもの181、182があり、I式の受口状口縁壺の前身と考えられる。他に、外反する口縁部をもち、胸部のタタキメをハケで調整した184は、鬼塚遺跡の壺A₁と同じI式段階のものである。鉢は、凹線文を施文するボウル状のIV様式の鉢の他に、ハケ調整の壺下半部と共に通する器形の鉢187がある。この鉢はV様式に通有のものが全体にふくらみをもつのに対して、直線的な逆円錐形をなす。I式の有孔鉢に類似の器形が認められる。高杯は、杯口縁部が直立するが凹線はみないものが多い。188は口縁部外面のヨコナダゲが強調され、端部は面をもつ。しかしI地点例に比べると口縁部はやや短い。脚部は裾部がほとんど開かず、円板充填がみられる。I式に存在する脚である。他に、小形の脚部もあるが、これも裾部の開きが少ない。器台は凹線をもたず器形も裾部が内彎するIV様式の大形器台とは異なる。186は円筒部にヘラ描きの擬回線が3段階に施文され、内面をヘラ削りするもので、185はやや大形で内外ともヘラ磨きで仕上げている。これらはV様式の器形である。

以上のように、第20図の土器はIV様式の要素である凹線文を一部に残しながらも、新しい器形や製作手法を指向した土器がみられ、これまで出自が不明確であったI式の土器に型式学上

の連続性を認めるものも多い。従って、これらはIV様式末の間隙を埋める資料として、中期から後期へと連続する西之辻遺跡の実態を示す土器群として評価できるものであろう。

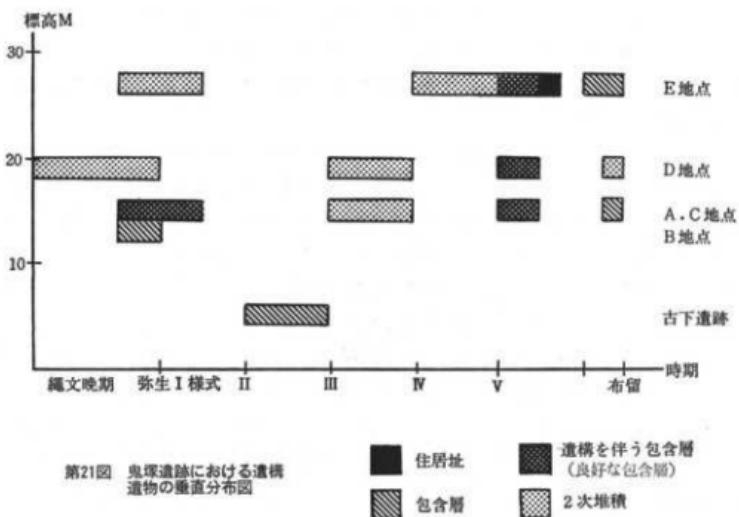
このように、I式土器は西之辻遺跡においてIV様式からの系譜が強く認められるもので、V様式土器のなかにI式が混在する鬼塚遺跡の様相は、I式の器種構成が崩れかけた段階以後のものとして、西之辻遺跡との年代差を表わしていることがわかる。両遺跡は、I式土器の存在形態を基準とすると、中期からの連続性が強く認められるものと、弱いものに分かれるのである。

集落の推移についてこれまで記述したように、鬼塚遺跡の遺物は各時期にわたっているが、遺跡の立地する扇状地斜面各地点の調査では、遺構、遺物の時期や出土量にそれぞれ差異が認められる。これら地点ごとの遺構、遺物の状況は、集落の立地や規模についての時間的な傾向を反映したものと考えられるので、これまでの調査結果を模式的に整理することによってこの問題を検討してみることにする。

第21図は、扇状地斜面に立地する集落の時間的な動向を遺構、遺物の垂直分布にみたものである。この中で少量の遺物は一応2次堆積と表現したが、これらも平面分布などを参考として解釈を加えれば、ある程度意味をもつ資料になるものと思われる。分布図はより多くの資料蓄積を必要とするものであるが、現在の段階でも鬼塚遺跡での集落の動向についてある程度の傾向はうかがえそうである。

これによると、弥生前期は遺構については不明瞭であるが、良好な遺物包含層が標高14～16mのA地点、C地点に認められ、他に標高26～27mのE地点でも少量の土器が出土している。また、これらの各地点において前期の遺物は船底式縄文土器の分布と重複している。弥生中期は、前期、後期に比較して遺構およびまとまった包含層は検出されていない。中期の土器は後期の土器に混って少量が出土しているにすぎない。弥生後期になると遺物の拡がりおよび出土量は他の時期を圧倒するものとなる。標高15mのC地点、19～20mのD地点、26～27mのE地点でいずれも良好な遺物包含層が確認されており、遺構もC地点で壇棺、E地点で住居址を検出している。今回の調査では、後期の包含層の東限を確認することができなかったため、なお高度を上げて続くものとみられる。後期末以降はやや遺物の出土量は減少しているが、分布は後期前半とはほぼ一致する。

これらの結果から推測するに、縄文晩期末から弥生前期には集落の外的な立地や規模等が大きく変化することなく、標高12～16mのあたりを中心としながらも20m以上の高所にも散在するような疎開村的な集落が形成されていたと思われる。しかし弥生中期には発展することなく、逆に規模を縮少しているものとみられ、遺物の出土地点が垂直的にも平面的にも散っているようにならぬままに小規模なものがまとまりなく存在した散村形態が考えられる。このような集落の縮少化は、鬼塚に近い標高6～7mの扇状地末端部にある古下遺跡で第II様式の土器が採集されているように、初期の水田造地である扇状地末端低湿地の近くに集落が形成されたためであると考えられ¹⁰、これらのなかには集村的なものも存在したと思われる。しかし依然として扇状地上に散在するものがあることも事実で、これらが低地に積極的に進出した集落に包括されるものでなければ、生活基盤に占める稻作の比重も低地の集落とは異なっていた可能性



第21図 鬼塚遺跡における遺構遺物の垂直分布図

が大きいであろうし、同じように扇端部の水田に生活基盤をもつ集落であっても、立地の相違は集落の質的な差異に求められるであろう。いずれにしても、鬼塚をはじめ扇状地の遺跡で散在する中期の遺物は無視できないものであり、このことはさらに標高 85m の高所に存在する山畠遺跡が独立した定住的な集落か一時的な集落かの評価とも係っている。

一方、このような扇状地上の集落の停滞に対応するかのように形成された扇状地末端部の集落も、各地の低地遺跡と同じく後期には存在しないことが、最近行なわれた鬼虎川遺跡の発掘調査等で確かめられている⁹⁾。これら低地集落の廃絶は瓜生堂遺跡での安田喜憲氏の花粉分析結果や井関弘太郎氏の研究等¹⁰⁾によると、中期末に起った大洪水や海水準の上昇による平野部の沼沢化が大きな要因と考えられている。それゆえ V 様式に入ると、生駒西麓では再び扇状地上の集落が拡大していく現象がみられるが、この時期に廃絶した低地集落からの集落単位での人の移動がどのように進行なされたか興味のもたれるところである。この移行期を土器型式の推移によってみた場合、西之辻遺跡のように IV 様式から V 様式初頭への連続性が顕著に認められるものと、鬼塚をはじめ多くの V 様式の遺跡のように IV 様式末～V 様式初頭の段階が希薄なものとに分かれることも注目される。西之辻では、隣接する低地の鬼虎川遺跡の廃絶後の IV 様式末から、他の集落に先がけて扇状地の集落を発展させたものとみられるのに対して、鬼塚等では中期の散在化した状態と大差なく、I 式の新しい段階以後になって集落が急速に拡大する様相を呈している。従って、鬼塚遺跡の V 様式の集落は、中期の遺物の出土量が貧弱であるだけに自己発展によるよりも、低地集落の廃絶とそれに引き続く西之辻遺跡の拡大を契機として生じた集落再編成の動向のなかで理解する必要があろう。

このような集落の動向については、なお今後の検討を必要とするが、ここで明らかなことはIV様式末～V様式初頭に西之辻遺跡を先駆として扁状地の集落拡大化の傾向があり、現在の東大阪市域を含む西之辻周辺の遺跡では地理的に近い鬼塚が続いて拡大化している点を指摘しておきたい。

次に、後期の鬼塚集落を先の分布図でみれば、標高15～30m前後の範囲に比高差の大きい集落が形成されており、特に後期後半には、E地点の住居址や出土遺物などからみて、標高20m以上の比較的高い地点にも密度の高い集落が営まれたものと思われる。後期後半になって集落の中心がそれまでよりやや標高の高い地点に認められる例は、他にも縄手遺跡の東100mにある上六万寺遺跡や標高26mの地点に住居址を検出した皿池遺跡などがあり、この現象は集落人口の増加と緩傾斜の扇状地における可耕地開発の影響によるものが大きいと考えられる。そして、その後も続いた扇状地集落の人口圧の高まりと可耕地開発の努力は、V様式末の北島池遺跡のように新たな低地の集落を発生させる方向で働いていたと思われるのである。

＜追記＞今回検出した堅穴住居址は、当初の計画では発掘調査後に教会の建て替え工事によって破壊される予定であった。しかしながら、遺構の重要性について討議を経た今日、鳩田進治郎大教長の御理解と御協力によって建物位置の変更が実現し、堅穴住居址は埋め戻した状態で保存されることとなった。ここまでに至る天理教東神田大教会関係者各位の御協力に対して、ここに敬意を込めてお礼を申し上げたい。

＜注＞① 関野克「住居址と倉庫址との建築学的考察」『登呂』本編所収 日本考古学会 1954

② 永井規男「秋田の埋没家屋」『日本古代文化の探求』家所収 社会思想社 1975

③ 後藤直「岐阜第2遺跡第13号堅穴」『常呂』所収 東京大学文学部 1972

④ 屋根材についての報告は少ない。そのなかで、岡山県沼遺跡A住居址では炭化木の上に厚い茅の灰層がかぶっていたことから、茅葺屋根と検証されている。近藤義郎、渡谷泰彦「津山弥生住居址群の研究」津山市津山郷土館 1957 同県用木山遺跡でも灰層の存在から茅葺と推定されている。神原英朗「用木山遺跡」山陽圏地理文庫財調査事務所 1977 各地の復原家屋も茅葺と考えて設計されている。

⑤ 石野博信「考古学から見た日本古代の住居」『家』所収 社会思想社 1975

⑥ 山畑遺跡、馬場遺跡 藤井直正、都山比呂志「原始古代の牧場」1966

岩瀬山遺跡(2例) 藤井直正、北野保「東大阪市岩瀬山遺跡の調査」1971 皿池遺跡 岩木隆裕「脚手北小学校分校新設工事に伴う皿池遺跡の発掘調査」調査会ニュース No.6 1977

⑦ 屋内高床部をもつ住居の整理も石野前掲⑤による。

⑧ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」考古学研究80号 1974

⑨ このような甕の製作過程についての指摘は、すでに関川尚功「縄向1～3式土器に関する二、三の問題」『縄向』所収 岐井市教育委員会 1976にみられる。

⑩ 「上東遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2 岡山県教育委員会 1974の才ノ町調査区P-1出土の臺に近似するものがある。

⑪ 小林行徳「大阪府枚岡市額田町西之辻遺跡I地点の土器」弥生式土器集成資料編 1958 山本博「額田町石器時代遺跡」「除陽道と額田歴代組」28号所収 1957

⑫ 森岡秀人「畿内第V様式の縄年細分と大師山遺跡出土土器の占める位置」『大師山』所収 関西大学文学部 1977

⑬ 佐原真「大和川と淀川」『古代の日本5』所収 角川書店 1970

⑭ 現在の標高で5～7mの扇状地末端の低地にある弥生遺跡は、北から和泉、鬼虎川、古下、北島池等で、後期末の北島池を除くと他の弥生前期末から中期のものである。これらの遺跡が存在する地点は、現在でも生駒西麓にあって最も排水の不良な地域で、地下水位が高いため古来より天水田に近い水田が分布していた。

⑮ 東大阪市遺跡保護調査会によって昭和50、51、52年に発掘調査が行なわれ、現在整理作業が進められている。概略は調査会ニュースNo.2以後に紹介されている。

⑯ 安田喜憲「瓜生堂遺跡の泥土の花粉分析」「瓜生堂遺跡II」所収 瓜生堂遺跡調査会 1973 井関弘太郎「沖積世後期の海水準変化と遺跡の地形環境」考古学と自然科学第8号 1975

VI 遺物観察表

1. 窪穴内の土器

壹

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
1	口径 9.5 器高 17.8	口頭部 直立する口頭部。外面ヨコナデ、内面ヨコナデ+細筋のヘラミガキ。 胴 部 器体中位に最大径をもつ球形の胴部。外面はタタキメ(4~5条/cm) + ヘラミガキ。内面は最大径下の接合痕を境に、下部はヘラ+ていねいなナデ、下部はあらいユビナデ。上部には2cm幅の粘土紐の継ぎ目を残す。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含むキメ細かな胎土 ○外面にスス付着
2	口径 10.1 器高 17.3	口頭部 直立する頭部からわずかに外に開き、口縁端部近くはつまみ上げた壺形でおわる。内外面ともハケメ(6本/cm) + ヨコナデ。 胴 部 粘土紐の凸凹の残るいびつな球形。器体下部の接合痕を境として、上部は2~2.5cmの粘土紐の継ぎ目が顕著。外面は斜方向のハケメ。下部の接合痕以上は断続的な調整。内面は底部近くをヘラ調整するだけで、あらいユビナデのまま。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
3	口径 12.2	口頭部 直立する口頭部。壺部近くがわずかに外反する。外面タテハケ(10~8本/cm) + ヘラミガキ。内面ヨコハケ+ヨコナデ。 胴 部 やや下ぶくれの球形を呈す。外面はタタキメ(2.5条/cm) + ハケメ+ヘラミガキ。内面はハケメ原体によって左回りに搔く。胴上部に2~2.5cm幅の粘土紐の継ぎ痕が残る。	○外面褐色 ○内面灰褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
4		胴 部 半球形の胴部下半。下半部最大径下に明瞭な接合痕があり、これを境に内面の調整方法は異なる。下部は左回りのハケメ(6本/cm)。上部は斜方向のヘラ搔き。外面はタテハケ。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○7×8cmの黒斑

鉢

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
5	口径 17.4 器高 7.8	口縁部 わずかに外反し、端部は面をもつ。 体 部 タタキ+あらいハケメ(8本/cm)。タタキは充分でなく器表の凹凸を残している。内面はヘラ+ナデ。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
6	口径 14 器高 8.5	体 部 器中位に接合痕あり。逆円錐形で直口の口縁をもち底部に0.7cmの円孔を穿った有孔鉢。内面から穿孔したため外底面が突出し、はみ出した粘土を外面から搔き取っている。成形にタタキは用いず、外面あらいナデ、内面は細かいハケメ(15本/cm)による。	○淡赤褐色~灰褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
7	口径 22.6 器高 13.3	口縁部 逆円錐形の体部に粘土を補充してやや外開きの口縁部とする。端部は面をもっておわる。外面はタテハケ+ナデ、内面は指圧の残るユビナデ。 体 部 タタキメ(3条/cm)が接合部付近だけナデによって消えている。内面は上部をユビナデ、下部をヘラナデする。内底面はドーナツ状に中心が窪み、窪みをヘラで調整する。また、外底面の中心部は内圧によって少し突出している。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○製作途中に有孔鉢から作りかえたものか
9	口径 11.4 器高 7.2	体 部 小型の半球形の器形。器肉は薄い。外面はヘラ+ナデ、内面はヘラ搔きによる。内外面とも平滑。	○暗褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○底面近くで出土

高 杯

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
10	口径16	杯 部 直立ぎみの杯口縁、内外面ともていねいなタテヘラミガキにより平滑。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
11	口径23.2	杯 部 外反する杯口縁。浅い杯部となる。内面ヨコヘラミガキ外面ナデ調整。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土

甕

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
12	口径17 胴径20.2 器高27.5	口縁部 「く」の字に外折し、端部は面をもっておわる。端部近くに接合痕。 胴 部 器体中位よりやや上に最大径をもつ。下半部と上半部ではタタキメ角度が異なる。さらに下半部にもう一ヶ所タタキメ角度の変化する塊があり、接合痕もみる。タタキメは全体にやや太筋（2.5条/cm）。内面はていねいなナデ仕上げで平滑。	○最大径下の接合痕以下は暗褐色 他は褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○器体中位に帯状にスス多し
13	口径19.7 胴径20.9 器高27.7	口縁部 「く」の字に外折したのち、さらに外反し、端部は面をもっておわる。外面にタタキメと接合痕が残る。 胴 部 器体中位に最大径をもつ。胴部の殆どのところに接合痕があり、これを境にタタキメ原体を異にする。上部は太筋（2条/cm）かつ条痕の深いもので、下部は比較的細筋（3～3.5条/cm）のものを使用。さらに最大径部にも接合痕があり、タタキメ角度の微妙な変化あり。内面は下部がヘラナデ、上部が左回りのハケメ（6本/cm）。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○最大径以下10cm程の帯状にスス多し
14	口径15 胴径15 器高19.9	口縁部 ゆるやかに外反する。端部は面をもっておわる。外面全体にタタキメをみる。 胴 部 器体中位よりやや上に最大径をもつ。器高の殆どに明瞭な接合痕。これを境にタタキメ（3条/cm）は2段階に分かれる。内面のハケメがタテハケからヨコハケに変わる。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○最大径以下にスス付着
15	口径15.2 胴径16.4 器高20.2	口縁部 脱く「く」の字に外折する。端部は面をもっておわる。内面は左回りのハケメ（8本/cm）。 胴 部 肩の張る器體。器高殆どに接合痕があり、これを境に外面のタタキメ（2.5～3条/cm）は上下2段階に分かれる。上部のタタキメには、さらに微妙な傾きの変化がみられる。内面は肩部がユビナデ、他はヨコハケによる。肩部内面には1.5～2cm幅で粘土紐の痕跡が残る。	○外面褐色、内面暗褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○最大径以下幅10cmの帯状にスス付着
16	口径13.6 胴径12.8 器高14.7	口縁部 ゆるやかに外反し、内面に接はない。端部はヨコナデによって面をもつ。外面にタタキメと接合痕をみる。 胴 部 器体中位よりやや上に最大径をもつ。最大径部を境にタタキメの角度が変化し、接合痕もみる。内面はていねいなナデ仕上げ。接合部付近はあらいハケ（3～4本/cm）で器壁を搔く。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○最大径部以下にスス多し
17	口径11.6 胴径12.8 器高14.2	口縁部 わずかに外上方に折れ、端部は面をもっておわる。外面にタタキメをみる。 胴 部 器体中位よりやや上に最大径をもつ。外面のタタキメは器体中位を境に、上下2段階に分かれる。タタキメは2条/cmと太筋。内面はヘラ搔きナデによる。小形のわりに器内は厚い。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土。砂粒外し ○内面にこげつき ○外面全体にスス

18	口径13.8 胴径12.3	口縁部 胴 部	わずかに折り返しただけで、外面および端部は未調整。内面もハケメ原体であらく搔くのみ。 口径>胴部最大径。ほとんど張りをもたない器形。外面には水平方向の細筋のタタキメ（4条/cm）。2.5cm程度の幅で接合痕が残る。胴部下半にはタタキメは及んでいない。内面は左回りのハケメ（6～7本/cm）。下半は下から上へあらぐ搔く。	◦淡褐色～褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
19	口径14 胴径13 器高14.5	口縁部 胴 部	ゆるやかに外反したのち、端部近くで内弯する。端部は未調整。外面にタタキメと接合痕、内面に左回りのハケメ（5～6本/cm）。 口径>胴部最大径。器体中位よりやや上に最大径をもつが、あまり張りはない。外面は水平方向のやや細筋のタタキメ（3.5条/cm）をみる。2cm程度の幅で接合痕も残っている。内面は中位の接合痕を境に上半が左回りのハケメ、下半が乱方向のハケメ。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦外面全体にスス
20	口径17.4	口縁部 胴 部	「く」の字に外折したのち、さらに外反し、端部は面をもっておわる。 外面にタタキメはみられず。器表をあらぐナデただけ。内面はヨコハケ（10本/cm）。	◦淡赤褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
21	口径16.1 胴径13.9	口縁部 胴 部	外折したのち内弯し、端部は尖りぎみにおわる。端部はあらいナデを行なうのみ。外面に接合痕あり。 口径>胴径。あまり張らない器体。外面のタタキは主軸角度をしばしば変える乱雑なもの。内面は乱雑なヨコハケ（5～6本/cm）。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦内面のハケメは、19と同じ原体か
22	口径16.3 胴径20.9 器高22.8	口縁部 胴 部	「く」の字に外反し、端部は面をもっておわる。面は外側のヨコナデを強調して生じたもの。外面に接合痕あり。 球形に近い張りのある器形。器体中位よりやや上に最大径をもつ。下半部にある明瞭な接合痕を境として、上部は粘土壁の接合痕がよく観察できる。2～2.5cm幅で輪積みしたのちタタキを行なっている。タタキは3条/cm。下部のタタキメは接合時のたためか消えている部分が多い。内面はハケメ原体によっていきに搔き上げる。	◦褐色～淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦最大径以下6～7cmの帯状にスス多し

2. 第V様式の土器

表

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
24	口径15.9 胴径17.8	口縁部 外反する口縁。端部は丸くおさめる。外面にタタキメが残る。 胴 部 肩が張る胴部。最大径は器高の約1/3にある。外面のタタキメ（3条/cm）は肩部以下をタテハケ（10本/cm）で消される。内面はヨコハケ+ナデによる。	◦外面淡褐色、内面灰褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦口縁外面と最大径部付近にスス多し
25	口径16.2 胴径18.4	口縁部 外反し、端部は丸くおさめる。タタキの有無不明。 胴 部 外面のタタキメはタテハケ（7～8本/cm）によって消す。内面はヨコハケによる。器底のハクリが顕著。	◦淡赤褐色 ◦角閃石を含む胎土 ◦最大径部にスス
26	口径14 胴径13.6 器高15.4	口縁部 外折したのち内轉し、端部は丸くおさめる。外面にタタキメをみる。 胴 部 器体中位よりやや上に最大径をもつが、張りはあまりない。器体中位のタテハケ（5～9本/cm）によってタタキ	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦スス付着なし

			メが帯状に消されている。内面には外面のハケメと対応する部位に明瞭な接合痕があり、接合痕以上はさらに2~2.5cm幅で粘土紐の継ぎ目が残る。内面調整はあらいヨコハケ+ナデによる。	●底部内外面に黒斑
27	口径14.3 胴径14.5 器高14.8 (復原値)	口縁部 胴 部	短く外反する口縁。端部は丸くおさめる。外面にタタキメをみる。 器高の4%に最大径をもつ。タタキメの傾きは3段階に分かれる。タタキメは細筋のもの(3.5~4条/cm)を使用。内面の接合痕はタタキメの変化する部分に対応。最大径以上はヘラで左回りに搔き、砂粒の動きも認められる。以下はヘラナナデにより平滑。	●外面褐色~暗褐色、内面褐色 ●角閃石、金雲母を含む胎土 ●最大径部以上にスス付着
28	口径15 胴径13.8	口縁部 胴 部	外折したのち内彎する口縁。端部は未調整。外面ユビオサエ、内面ヘラ搔きによる。外面に接合痕とタタキメが頗著。口径>胴部最大径、あまり張らない胴部。最大径下に接合痕があり、これを境にタタキメ(3.5条/cm)の傾きも異にする。タタキメは比較的細筋のものを使用。内面はあらいヘラ搔きによる。原体は条痕の不明瞭なハケと同様のものを使用。	●外面褐色~暗褐色、内面淡褐色 ●角閃石、金雲母を含む胎土 ●全体にわたってススがところどころにつく
29	口径12.2 胴径12.8	口縁部 胴 部	外折したのち、さらに外反する。端部は外傾する面をもつ。肩が張る胴部。最大径下に接合痕があり、この部分では継位にタタキを加えて接合部を補強している。タタキメは比較的細筋(3.5条/cm)。内面は1.5~2cmの幅で粘土紐の継ぎ目が残る。	●褐色、胴内面は暗褐色 ●角閃石、金雲母の微粒を含む半細かな胎土
30	口径15.4 胴径14.6	口縁部 胴 部	外反する口縁。端部はつまみあげぎみにヨコナデする。外面に接合痕とタタキメ、その上をタチハケ(8本/cm)調整。肩の張る器形。器高の4%に最大径をもつ。タタキメはしていないで、器体下位の接合部を境に傾きがわずかに変化する。タタキメは3条/cm。内面はていねいなナデ仕上げ。	●明褐色 ●角閃石、金雲母を含む胎土 ●最大径下5cmの幅で帯状にスス多し
31	口径15.3 胴径12.6 器高12.7	口縁部 胴 部	外反する口縁。端部は丸くおさめる。外面に接合痕とタタキメをみる。 口径>胴部最大径。器体中位に最大径をもつが、あまり張らない器形。最大径部に接合痕があり、これを境にタタキメの傾きも異なる。タタキメは2.8条/cm。内面は左回りのハケメ(9本/cm)。外表面は搔き削った痕が頗著である。	●外面明褐色、内面淡褐色 ●角閃石、金雲母を含む胎土 ●外腹下半にスス、内腹下半にこげつき
32	口径15 胴径16.5 器高17.8	口縁部 胴 部	「く」の字に鋭角的に外反する。内面には稜を、外面には接合痕とタタキメをみる。 器体中位よりやや上に最大径をもつ球形の器形。タタキメ(3条/cm)はていねいに施され、接合痕を境に上下2段階に分かれる。最大径部にさらに微妙な傾きの変わり目がみられる。内面は下部が左回りのハケメ(6~10本/cm)。原体は幅4~5cmのもの。上部はタテ方向に施す。底部は頗著な窪み底。	●褐色 ●角閃石、金雲母を含む胎土 ●最大径以下幅10cmにススが頗著
33	口径15.1 胴径14.7 器高16.7	口縁部 胴 部	外反する口縁。端部は面をもつ。 器体中位よりやや上に最大径をもつ、球形に近い器形。タタキメ(3条/cm)は、接合痕を境に上下2段階に分かれ、さらに微妙な傾きの変わり目が下部で一ヶ所、上部で二ヶ所にみる。最大径以下ではユビでおさえたためにタタキメが消えた部分が立つ。内面は全体を左回りのあらいハケメ(5本/cm)で搔き、上部はナデを加える。底部はユビナデによって上げ底ぎみ。	●接合痕より下は暗褐色、上は褐色。 ●角閃石、金雲母を含む胎土 ●最大径下3~4cm幅の帯状にスス多し

34	口径16.4 胴径19.5 器高25.3	口縁部 肩 部	外折したのち、さらに外反する。端部は外傾する面をもつ。外面に接合痕とタタキメを残す。 肩の張った器形。器高の%程に最大径をもつ。下位に明瞭な接合痕があり、この部分で器形は微妙な曲線を描く。タタキメ（3条/cm）の傾きもこれを境に異なる。内面はていねいなヨコハケ（10~11本/cm）。	◦明褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦最大径以下幅10cmの帯状にスス多し
35	口径17.4 胴径20	口縁部 胴 部	外折したのち、端部近くで小さく外反する。端部は面をもつ。 器体中位に最大径をもつ椭円形の肩部。外面のタタキ（3条/cm）は左下りのラセン状の曲線を境として主軸の傾きを変えている部分が3~4ヶ所観察できる。内面は左回りのハケメ（5~6本/cm）が密にみられる。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
36	口径17.8 胴径20	口縁部 胴 部	外反し、端部は面をもっておわる。端部近くに接合痕、外面にタタキメをみる。 器体中位よりやや上に最大径がある。外面のタタキはやや細筋（3~3.5条/cm）、内面は下から上へのヘラ搔き。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
37	口径17.8 胴径16.1 器高19.5	口縁部 胴 部	外折したのち、さらに外反し、端部は外傾する面をもっておわる。外面に接合痕とタタキメを残す。 口径>肩部最大径。あまり張らない肩部、器体中位よりやや上に最大径をもつ。タタキメ（2.5条/cm）の傾きは3段階に分かれる。内面はヨコハケ（8~12本/cm）を主とし、下位では乱方向のハケメが多くなる。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦口縁外面と肩部～最大径部にスス多し
38	口径15.5 胴径14.1 器高15.3	口縁部 胴 部	外折したのち内轉し、端部はつまみあげぎみにヨコナデする。外面に接合痕とタタキメをみる。 口径>肩部最大径。器高の%に最大径をもつ。最大径下の接合痕を境に、タタキメ（3条/cm）の傾きは上下の2段階に分かれる。内面は全体を左回りのハケメ（6本/cm）+タテ方向のヘラナデ。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦最大径以下幅5cmの帯状にスス多し。内面下半にこげつき
39	口径15.9 胴径16.1	口縁部 胴 部	外折したのち内轉し、端部はつまみあげぎみのヨコナデによって、上端に肥厚する。 肩の張る器形。器体中位よりやや下の接合痕を境にタタキメの傾きは2段階に分かれる。内面はていねいなナデ仕上げにより平滑。粘土紐の跡目がわずかに残り、2~2.5cm帶で積み上げたことがわかる。タタキメは接合痕以上2.5条/cm、以下はやや細く3条/cm。	◦外面淡褐色、内面明褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦部分的にスス付着
40	口径16 胴径17.6	口縁部 胴 部	外反する口縁の端部はつまみあげぎみのヨコナデによって上端に若干肥厚する。外面に接合痕とタタキメをみる。 器体中位に最大径をもつ球形に近い器形。外面のタタキ（3~3.5条/cm）はていねいに行なわれている。内面はヘラ+ていねいなナデ仕上げで平滑。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
41	口径15.4 胴径14.6	口縁部 胴 部	外反したのち立ちあがる受口状口縁。上端は面をもつ。外面に接合痕。タタキメをみる。 外面は3条/cmのタタキメ、内面は斜方向にハケ（4~5本/cm）でナデる。器表平滑。	◦明褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦肩部に帯状にスス付着
42	口径14.6	口縁部 胴 部	外反したのち立ち上がる受口状口縁。上端は面をもつ。外面に接合痕をみるが、タタキの痕跡はない。 外面は上から下へのハケメ（6本/cm）、内面は指圧+ユビナデ。2.5cm幅の粘土紐の跡目あり。外面にタタキの痕跡あり。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土

45	口径12.8 胸径13.5	口縁部 胴 部	外反する口縁。端部は丸くおさめる。 外面タテハケ（9本/cm）。内面は肩部をヘラ振きし、砂粒の動きも認められる。以下はユビオサエのため凹凸は残る。タタキの痕跡はない。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
46	口径12 胸径10.6	口縁部 胴 部	外反する口縁。端部は丸くおさめる。 口径>胸部最大径。外面は乱方向のあらいハケメ（6本/cm）。内面はヘラによる搔き上げ。タタキの痕跡はない。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
47	口径16.4 胸径15.6	口縁部 胴 部	外反する口縁部。端部はわずかな面をもつ。外面にタテハケ（7本/cm） 内外面とも下から上へのハケメ。肩部内面に2cm幅の粘土紐痕跡が残る。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
48	口径13.5 胸径12.8 器高13.4	口縁部 胴 部	外反する口縁。端部はヘラヨコアテによるが、粘土のはみ出しは未調整。外面に接合痕、内面は左回りのハケメ（7本/cm）。 器体中位に最大径をもつ、丈の低い器形。外面はヘラナデ。2～2.5cm幅の粘土紐の継ぎ目をみると。内面は下から上へへらで搔く。タタキの痕跡はない。	◦淡褐色～褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦最大径以下にスス付着
49	口径14.3 胸径13.9 器高18.7	口縁部 胴 部	外反したのちわずかに内轉する口縁。 あまり張らない器形。器高の%に最大径をもつ。外面はユビオサエ+下から上へのヘラ削り、内面は左回りのヘラ削り。いずれも砂粒の動きが認められ、器肉は0.2～0.4cmと薄手。内面上半部には2～2.5cm幅の粘土紐の継ぎ目が残る。外面にタタキの痕跡はない。	◦褐色～灰褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦ススは付着せず
50	口径13 胸径13.6 器高17.5 (復原値)	口縁部 胴 部	外反する口縁。端部を欠失する。 あまり張らない器形。器高の%に最大径をもつ。タタキを行なわないため粘土紐の凹凸が残る。器体中位に接合痕。これを境に下部は内外面ともヘラナナデ、上部は外面タテハケ（8～10本/cm）、内面ユビナナデ。上部内面には2～2.5cmの粘土紐の継ぎ目が残る。	◦外面暗褐色、内面灰褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦肩部を除く全面に厚くスス付着
51	口径18.9	口縁部	「く」の字に鋭く外反したのち立ち上がる受口状口縁。上端は鈍い稜となる。立ち上がり部の外面は強いヨコナデによって一條の凹線がめぐる。内面ヘラナナデ。タタキは不明。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦スス付着
52	口径18	口縁部 胴 部	「く」の字に鋭く外反したのち立ち上がる受口状口縁。上端は鈍い稜となる。 張りの大きな器体。2.5条/cmのタタキメはていねいに施され、内面もていねいなヘラナナデ仕上げ。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦ススは付着せず
53	口径17 胸径21.4	口縁部 胴 部	外折したのち、さらに外反する。端部は面をもつ。 外面は乱方向に施されたタタキメ（3～3.5条/cm）+乱方向のハケメ（8本/cm）。内面はユビオサエ+あらいナナデによる。肩部内面には粘土紐の継ぎ目が残る。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦肩部を除き器体中位には帯状にあつくスス付着
54	口径19	口縁部 胴 部	外折したのち、さらに外反する。端部は強いヨコナデによって一條の凹線がめぐる。 張りのある器体。外面はタタキメ（2～2.5条/cm）+タテハケ。内面はヨコハケがていねいで平滑。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦部分的にスス付着

表

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
55	口径19.2	口頭部 大きく外反する口縁の端部を下方に拡張して施文帯とし、4条のヘラ沈線+4個1対の竹管押圧円形浮文をもつ。外面ともていねいなタテヘラミガキ。	○明褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
56	口径30.4	口頭部 直立する頭部から大きく外反する口縁部がのび、端部を下方に拡張して施文帯とする。施文帯には、3条のヘラ沈線+2列のヘラ先刺突文+竹管押圧円形浮文をもつ。頭部の外面はハケ原体(5~6本/cm)によるていねいなナデを行ない、内面はヨコハケ調整する。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
57	口径30.5	口頭部 直立する頭部から大きく外反する口縁部がのび、端部を下方に拡張して施文帯とする。施文帯には円棒状の器具による沈線+1列の刺突文+等間隔で並ぶ竹管押圧円形浮文をもつ。調整は内外ともていねいなヘラミガキによる。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
58	口径13.6	口頭部 直立ぎみの頭部から外反する口縁部がのびる。端部はわずかに拡張し、ヨコナデによって2条の擬凹線があぐる。外面はタテハケ(7本/cm)+ヘラミガキ、内面はヨコハケ+ヨコナデ。 肩 部 外面はタテハケ+ヘラミガキ、内面はユビナデによる。肩部内面にはしづり痕をみる。	○暗褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
59	口径16.2	口頭部 短く直立する頭部に外反する口縁部。端部は下方に拡張するが施文はない。外面ともへラミガキ。肩部外面へラミガキ、内面ユビナデによる。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
60	口径12.5	口頭部 外反する口頭部。端部は面をもっておわる。外面へラミガキ、内面ヨコナデ。 肩 部 張りのある器形。外面へラミガキ、内面は斜方向のヘラ搔きによる。肩部内面にはしづり痕をみる。	○淡褐色~黄褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○肩部外面にヘラ線刻による絵画がある
61	口径12.1	口頭部 直立する頭部に外反する口縁部が付く。端部は面をもっておわる。 肩 部 外面ヨコヘラナデ、内面ユビナデによる。	○明褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○口縁外面にスヌ
62	口径12.5	口頭部 短い直立する頭部に外反する口縁部が付く。端部はつまみあげぎみにヨコナデする。外面は下から上への細かいハケメ(10本/cm)、内面はナデ調整。 肩 部 外面ヨコハケ、内面ナデ調整。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
63	口径12.4	口頭部 直立する頭部に短く外反する口縁部が付く。端部は丸くおさめる。外面タテハケ(6本/cm)、内面ヨコハケ+ナデ。	○明褐色 ○角閃石、金雲母が顕著
64	口径15	口頭部 直立する頭部に短く外反する口縁部が付く。端部は面をもつ。外面へラミガキ、内面ヘラ搔きによる。	○褐色~暗褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
65	口径12.8	口頭部 短く外反する口頭部。端部は面をもっておわる。 肩 部 張りのある器形。外面は下から上へのハケメ(3~4本/cm)。内面はユビオサエ+ヨコハケ。	○暗褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
66	口径11.4	口頭部 短く外反する口縁部。端部は丸くおさめる。肩部との境に紐穴あり。穿孔は両面から行なう。 肩 部 内外面とも器表面ハクリのため調整不明。	○赤褐色 ○白色砂粒多し(非河内産)

67	口径10.8	口頭部 短く直立する口縁部。端部は面をもっておわる。2個1対の紐穴あり。穿孔は外側から行なう。 胴 部 外面はヨコヘラミガキ、内面ナデ調整。	◦明褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
68	口径16 器高33	口頭部 わずかに外反しつつのびる筒形の口頭部。端部近くに凹線が2条めぐる。端部は丸くおさめる。外面はタテハケ(5~6本/cm) + ヘラミガキ、内面は左回りのハケメ。口頭部中位に接合痕あり。 胴 部 球形の器体。薄手の平底になだらかに移行する。外面はタタキメ(3.5条/cm) + ヘラミガキ。内面は器体中位よりやや下に接合痕があり、これを境に上部はユビナデによる。2~3cm幅で粘土紐の継ぎ目が残る。下部はヘラ+ナデにより平滑。	◦黄褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
69	口径16.3	口頭部 わずかに外反する筒形の頭部。端部近くでさらに短く外反し、端部は面をもっておわる。外面は斜方向のハケメ(6本/cm) + ヘラミガキ。内面は左回りのハケメと細かいタテハケ(11本/cm)で調整する。ほぼ2.5cm幅で粘土紐の継ぎ目を残す。	◦外面淡赤褐色、内面暗褐色 ◦角閃石、金雲母を含む精良な胎土
70	口径13.7	口頭部 わずかに外反する筒形の頭部。端部はつまみあげぎみに丸くおさめる。端部近くに紐穴あり。外面は下から上へのハケメ(7本/cm)、内面ナデ調整。 胴 部 外面タテハケ、内面ナデ調整。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
71	口径12	口頭部 直立する口頭部。端部は丸くおさめる。 胴 部 球形の器体。外面ヘラミガキ、内面は最大径以上左回りのヘラ削り、肩部内面はユビオサエ痕が残る。最大径部以下はヘラ調整。	◦明褐色 ◦金雲母、角閃石を含む精良な胎土
72	口径12.4	口頭部 直立する口頭部。端部近くでわずかに外反する。端部は面をもっておわる。 胴 部 下ぶくれの球形の器体。外面タテハケ(7本/cm)、内面はハケメ+ナデ。肩部内面にはユビオサエ痕が残る。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
73	口径11.9 器高17 (復原値)	口頭部 わずかに外反する直口の口縁。端部は面をもっておわる。外面タテハケ(5~6本/cm) + ヨコナデ、内面ヨコナデ。 胴 部 球形の器体。外面は細筋のタタキメ(4~5条/cm) + 下から上へのハケメ(1.6cm巾の原体)。外面下部は手すりによってハケメは消えている。内面はヨコないし斜方向のハケメ。肩部では強く搔く。器体中位に2cm幅の粘土紐の継ぎ目が残る。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦器体中位に帶状にスス多し
74	口径 9.6 器高15.1	口頭部 わずかに外反する直口の口縁。端部は丸くおさめる。 胴 部 球形の器体。最大径下に接合痕。外面ヘラナデ。内面は接合痕以下斜方向のハケメ(10本/cm)、以上ヨコハケ。	◦淡褐色~灰褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
75	口径 7.8 器高14.6	口頭部 わずかに外反する直口の口縁。端部は丸くおさめる。 胴 部 器体中位に張りをもつ球形の器体。最大径部に接合痕。外面は全体をナデ。内面は接合痕以下をヘラ+ていねいなナデ、以上をユビオサエ+あらいナデによる。肩部内面にはしづり痕が残る。	◦外面褐色~暗灰褐色、内面暗褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
76	口径 8.8	口頭部 ゆるやかに外反する筒形の口頭部。端部は丸くおさめる。外面ヘラミガキ。胴部との境に3条のヘラ沈線がめぐる。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
77	口径 7.6	口頭部 ゆるやかに外反する筒形の口頭部。端部は丸くおさめる。口縁外面に直線文+波状文がめぐる。	◦褐色~暗褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土

78	口径 9.4 器高17.2	口頭部 胴 部	外反する筒形の口頭部。端部は面をもっておわる。 肩の張る器形。最大径部に接合痕あり。外面はヘラ+ナデ。 内面は接合痕以下ハケメ（7～8本/cm）、以上はユビナデするが1～2cm幅の粘土紐の痕が残る。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む精良な胎土
79		胴 部	肩の張った丈高の器形。底部は突出しない。外面ヘラミガキ、内面ヘラ搔き。	○淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
80	口径 9.6 器高16.8	口頭部 胴 部	ゆるやかに外反する筒形の口頭部。端部は丸くおさめる。 外面はハケ原体によるていねいなナデ、内面は下から上へのハケメ（5本/cm）。 球形の器体に小さな平底が付く。外面は最大径以上がハケ原体によるていねいなナデ、以下はヨコ方向にあらくナデる。内面は左回りのヘラ搔き。肩部内面はしづら痕をユビオサエする。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
81	口径 9.3 器高16	口頭部 胴 部	口縁端部近くで外反する筒形の口頭部。端部は丸くおさめる。 外面はハケ原体（3～4本/cm）によるていねいなナデ、内面はユビナデ。 球形の器体。最大径部に接合痕があり、これを境に整形手法を異にする。外面は接合痕以上ハケ原体（3～4本/cm）によるていねいなナデ、以下は目の細かいハケ原体（8～9本/cm）によるナデ。内面は接合痕以上ユビナデ、以下は7本/cmのハケメ。接合痕以上に2～2.5cm幅の粘土紐の触ぎ目が残る。	○外面淡褐色、内面明褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
82	口径 9.3	口頭部 胴 部	直立する筒形の口頭部。外面は下から上へのハケメ（9本/cm）、内面は左回りのハケメで外面とは原体を異にする（6本/cm）。	○外面赤褐色、内面は口縁褐色、肩部黒灰色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
83	口径 9.8 器高22.5	口頭部 胴 部	直立する長い頭部に内轉ぎみに立つ口縁部がつく。端部は面をもつ。外面はハケ原体によるていねいなナデ（4～5本/cm）、内面は左回りのハケメ+ヨコナデ。 肩の張る球形の器体。最大径部の接合痕を境に、外面は上部をタテハケ、下部をユビナデ。内面は上部をユビオサエ、下部をタテハケ。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○胴部中位以下にスス付着
84	口径11	口頭部 胴 部	ゆるやかに外反する筒形の口頭部。端部近くをつまみあげぎみにヨコナデする。外面ヘラミガキ、内面右回りのハケメ（8本/cm）+ヨコナデ。 外面ヘラミガキ、肩部内面ユビオサエ。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
85	口径 9.7 器高16.8	口頭部 胴 部	ゆるやかに外反する口頭部。端部近くでつまみあげる。外面ヘラミガキ、内面もヨコナデのうえにミガキを加える。 球形の器体に小さく薄手の平底が付く。底部近くの胴部外面をヘラナデすることでわざわざ突出する平底を作り出している。外面はヘラミガキ、内面は最大径以下の接合痕を境に上部をユビナデ、下部をヘラ搔きする。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む精良な胎土
86	口径11.6 器高20	口頭部 胴 部	ゆるやかに外反する口頭部。端部はつまみあげぎみにヨコナデする。外面はハケ原体（4～5本/cm）によるていねいなナデ。内面ヨコナデ。 肩の張る丈高的器体。最大径部に接合痕があり、これを境に整形手法が異なる。外面は接合痕以上を上から下へのハケ原体によるナデ、以下はタタキによる。タタキは粘土の凹凸を充分叩きのぼす程ではなく、接合時のなで回しによって消えた部分が多い。内面は接合痕以上ユビナデ。1.5～2cmの粘土紐痕が残る。以下はハケメ。	○明褐色～淡褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土

87	口径10.1 器高21.6	口頭部 ゆるやかに外反する長い筒形の口頭部。端部は丸くおさめる。外面はタテハケ（6～7本/cm）+ヘラミガキ、内面は左回りのハケメ+ヨコナデ。 肩 部 腹が大きく張り出す扁球形の器体。最大径部に接合痕。外面はヘラミガキ。内面は接合痕以上ナデ、以下ヨコハケ。底部は小さな突出したもののが付く。	◦褐色～淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
88	口径 7.6	口頭部 ゆるやかに外反する細い筒形の口頭部。端部近くをつまみあげる。外面はヘラミガキ、内面はヘララ掻き+ヨコナデ。 胴 部 腹の張る扁球形の器体。最大径部に接合痕。外面ヘラミガキ、内面は最大径以上ユビナデ。1～3cm幅で粘土絆痕が残る。最大径以下はいねいなナデにより平滑。87のような小さく突出した底部をもつ。	◦外面明褐色、内面灰褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
89	口径 9.6	口頭部 内彎する直口の口頭部。端部は丸くおさめる。 胴 部 球形の器体。外面は上から下へのハケメ（5本/cm）。器体中位よりやや下の接合部は、さらにヨコハケ+ヘラナデを加える。内面は全体に1.5～3cmの幅で粘土絆痕が目立ち、肩部内面はユビオサエ。以下はナデによる。	◦外面赤褐色、内面褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
43	口径12 器高20.3	口頭部 ゆるやかに外反する筒形の口頭部。端部近くに接合痕あり。 胴 部 器体中位よりやや上に最大径をもつ。最大径部よりやや下に接合痕があり、これを境に上部はタタキ（3条/cm）、下部はあらいユビナデによる。内部も上部は指圧+あらいナデ、下部はヘラ+いねいなナデによる。	◦明褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦肩部にスス付着
44	口径14.7	口頭部 直立する頭部から口縁部が外反し、端部はヨコナデすることでわずかな面をもつ。 胴 部 長手の球形を呈する器体。外面はタタキメ（3条/cm）、内面はヘラで掻く。最大径部以上の外面には1.5～2cm幅で粘土絆の跡が目残る。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土

蓋

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
90	口径15.6 器高 5.6	天井部 ユビオサエによってひき出した中空のつまみ。 口縁部 竪形の器体。端部はヘラヨコアテによって面をもつ。 外面ナデ、内面ヨコハケ（5本/cm）。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦口縁内面にススがめぐる。
91	口径12.5 器高 4.8	天井部 中実の突出した円柱状のつまみ。上面は平坦面。外面はハケメ（8本/cm）+ナデ。 口縁部 竪形の器体。端部は未調整。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	◦淡褐色～褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土 ◦口縁内面にススがめぐる

鉢

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
92	口径19 器高10	口縁部 外反したのち内轉し、端部はつまみあげぎみにヨコナデする。 体 部 半球形の器体。外面はタタキメ（3条/cm）。口縁部との境はタテハケ（12本/cm）とヨコナデを加える。内面はヘラミガキ。	◦褐色、内面下半部は黒色（重ね焼きによる変色か） ◦角閃石、金雲母を含む胎土

93	口径17.2 器高 9.8	口縁部 体 部	直口で端部は未調整。端面にみられる沈線は、粘土紐を継ぎ足際に接着を高めるためのものか。 逆円錐形の体部に、ユビオサエによって上げ底ぎみの底部が付く。外面はタタキメ（3条/cm）。内面はヘラ搔きによる。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
96	口径12.6 器高 6.9	口縁部 体 部	直口で端部は未調整。端面は内傾する面となり、浅い沈線がめぐる。 逆円錐形の器体。底部は突出しない平坦面で径 0.6cm の円孔を穿つ。穿孔は内面から行なう。穿孔時の内圧によって外側が若干突出する。体部外面はタタキメ（3条/cm）、内面は搔き上げおよびヨコハケ（6本/cm）。タタキは不鮮明。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
97	口径17.5 器高 9.6	口縁部 体 部	「く」の字に外反し、端部は面をもっておわる。 半球形の体部。全体に器肉が薄い。内外面ともナデ調整。	◦灰褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
98	口径16.3 器高 9	口縁部 体 部	内輪ぎみに外折し、端部は丸くおさめる。外面はあらいヨコナデ、内面はヨコハケ（10本/cm）。 半球形の器体。外面はあらいユビナデのため凹凸は残る。内面は斜方向のハケメで平滑。	◦暗褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
99	口径18.5	口縁部 体 部	外反する口縁部。端部は丸くおさめる。外面に接合痕を残す。内面はヨコハケ（5本/cm）+ヨコナデ。 深い球形の器体。外面は乱方向のハケメ（5本/cm）、内面へラミガキ。	◦明褐色～赤褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
100	口径12.6 器高 8.8	口縁部 体 部	直口で端部はあらいヨコナデ。端部内面に浅い沈線あり。 半球形の体部に、ユビオサエによる上げ底ぎみの底部が付く。底部に径 0.9cm の円孔。穿孔は両面から。体部外面にわずかにタタキメを見るが、器面は接合痕や凹凸を残す。内面は斜方向のハケメ（11本/cm）。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
101	口径14.3 器高 9.2	口縁部 体 部	直口で端部はあらいヨコナデ。 逆円錐形の器体。底部に径 0.7cm の円孔。穿孔は内面から。体部外面はタタキメ（3条/cm）、内面はヘラ+ナデ。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
102	口径11.8 器高 7.6	口縁部 体 部	直口で端部は未調整。 逆円錐形の器体。外面はタタキメ（3条/cm）。内面はハケメ（7本/cm）。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
103	口径12.4 器高 8	口縁部 体 部	直口で端部は未調整。端面には粘土紐の接合を容易にするための沈線がめぐる。 逆円錐形の器体に、ユビオサエによる上げ底ぎみの底部が付く。外面はタタキメ（3条/cm）。内面は下から上へのヘラ搔きによる。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
104	口径14.5 器高 7.7	口縁部 体 部	直口で端部は未調整。 逆円錐形の器体。外面に 1.5~2 cm の粘土紐の継ぎ目が頗著。底部は明瞭な平底をとらず、小さな平坦面をもつ。径 1 cm の円孔が内面から穿たれ、外側にはみ出した粘土はそのままであるため正立は不可能である。内面は外側にくらべて、ていねいなナデによる。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
105	口径15.4 器高10.7	口縁部 体 部	直口で端部はヘラヨコアにてよる面をもつ。 逆円錐形の器体。底部に両面から穿孔の径 0.7cm の円孔あり。体部外面はあらいナデ、内面はヘラ搔き。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
106	口径11.5 器高 7.9	口縁部 体 部	直口で端部は未調整。 逆円錐形の体部に、ユビオサエによる上げ底が付く。体部外面は粘土紐の継ぎ目や凹凸が残る。内面はナデにより比較的平滑。	◦暗褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土

107	口径13 器高7	口縁部 体 部	直口で端部は内傾し未調整。 逆円錐形の浅い器体に、ユビオサエによる上げ底が付く。 体部外面はユビナデ、内面もナデにより平滑。	○褐色～灰褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
111	口径20.2 器高 8.7	口縁部 体 部	直口で端部はヘラヨコアテによる面をもつ。 浅い器体に突出した底部をもつ。外面は1～2cmの幅で粘土組の痕跡を残し、そのうえに乱方向のハケメ（3～4本/cm）調整を行なう。内面はヘラミガキにより平滑。内底面にはユビによるナデが頗著。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土 ○33と一括出土
112	口径24.6 器高12	口縁部 体 部	外反したのち立ち上がる受口状口縁。端部は面をもっておわる。外面に接合痕が残る。 壺の肩下部と共通する器体。外面ヘラミガキ、内面はハクリするがヘラミガキによると思われる。	○赤褐色 ○角閃石を含む胎土

器 台

番号	法量cm	特	徴	色調、胎土、備考
113	口径21.6	口縁部 体 部	体部からゆるやかに外反する口縁部。端部は少々下方に拡張し、櫛先刺実文を施文する。内外面ともヘラミガキ。 中空の円筒部からゆるやかに広がる裾部が付く。円筒部に計8個の円孔がある。円孔は上下2段に交互に穿孔されている。外面はヘラミガキ、内面はしおり痕+ヘラナデ。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
114	口径19.8 器高16.2	口縁部 体 部	体部から「く」の字に外反する口縁部。端部は下方に拡張する。拡張部はヨコナデを強調するが施文はない。内外面ともヘラミガキ。 中空の円筒部に、ゆるやかに広がる裾部が付く。裾端部はヨコナデを強調した面をもつ。外面はヘラミガキ。内面は中空部へラ拭き、裾部ヨコナデ。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
115	口径17.2 器高13.2	口縁部 体 部	体部から「く」の字に外反する口縁部。端部は拡張せず、ヨコナデを強調した面をもつ。外面ヘラミガキ、内面ヨコナデ。 中空の円筒部に屈曲して広がる裾部が付く。端部は面をもつ。外面ヘラミガキ。内面はハケ原体（6本/cm）によって拭き、裾部はヨコナデを加える。	○赤褐色 ○角閃石、金雲母を含む

高 杯

番号	法量cm	特	徴	色調、胎土、備考
116	口径29.4 器高17.3	杯 部 脚 部	わずかに上方にのびる杯底部から、角度をかえて外反する口縁部が付く。接合部にはヘラ先沈線がぬぐる。外面ヘラミガキ、内面は口縁ヨコナデ、底部ヘラミガキ。 中空の脚柱部に屈曲して裾広がりの裾部が付く。脚柱上縁はそのまま杯内底となる。外面タテヘラミガキ。脚柱部内面はしおり痕、裾部内面はヨコハケ（6本/cm）+ナデ。脚端部外面に強いヨコナデによる擦回線がぬぐる。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
117	口径21.7	杯 部 脚 部	外上方にのびる底部に、わずかに角度をかえて外反する口縁部が付く。接合部には長い穂がぬぐる。口縁端部は面をもっておわる。底部内外面はヘラミガキ。 中空の脚柱部。脚柱上縁は杯内底となる。脚柱外面ヘラミガキ、内面へラ拭き。	○黄褐色 ○角閃石を含む胎土

118	口径17	杯 部 浅い椀状の杯部。杯部中位に接合痕があり底部と口縁部との接合部となる。外面ともへラミガキ。 脚 部 中空の脚柱部から屈曲して聞く裾部をもつ。脚柱上部にヘラによる横線が7条めぐる。脚柱外面へラミガキ、内面へラ搔き。裾部外面ナデ、内面ハケメ (12本/cm)。	○黄褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
119		脚 部 中空の脚柱部。脚柱上縁が杯内底面となる。杯内底面には突起が円形に貼り付けられている。脚柱外面は杯部との接合部をへラナデし、以下をユビナデする。内面はしづり痕ナデ。	○暗褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
120		脚 部 半中実の脚柱部。外面はへラミガキのうえに2~3条単位のヘラ沈線が3単位めぐる。脚柱上縁は杯内底面となる。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
122	口径25.7	杯 部 外上方にのびる底部から、角度をかえて外反する口縁部が付く。端部はわざかな面をもつ。口縁外面はヨコナデ、他はへラ搔き (ハケ原体)+へラミガキによる。	○明褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
123	口径22.4	杯 部 平坦な底部から直角近くに立ちあがる口縁部が付く。端部は丸い。外面ともヨコナデおよびナデによる。	○暗褐色 ○角閃石を含む胎土
124	口径20.2	杯 部 わざかに上方にのびる底部から、角度をかえて外反する口縁部が付く。端部は外傾する面をもつ。底部と口縁部の接合部はヨコへラナデによってはみ出した粘土が下方に残となってめぐる。外面ともへラミガキ。	○明褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
125	口径16.4	杯 部 浅い椀状の杯部。外面へラミガキ、内面ナデ調整。	○黄褐色 ○角閃石を含む胎土
126	底径14.6	脚 部 なだらかな裾広がりの脚部。脚柱上縁は杯内底面となる。脚柱上部の杯部ハクリ部にはハケメを見る。脚柱外面へラミガキ。内面は脚柱にしづり痕が残り、裾部は乱方向のハケメ (6本/cm)。	○黄赤色 ○金雲母が頗著、角閃石は目立たず
127	底径17.7	脚 部 なだらかな裾広がりの脚部。外面へラミガキ。内面は脚柱上部にしづり痕、脚柱へラ搔き、裾部ハケメ (5本/cm)+ナデ。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
128	底径13.6	脚 部 丈の低い裾広がりの脚部。外面へラナデ、内面は脚柱しづり痕、裾部ハケメ (7本/cm)。	○暗褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土
129	底径13.8	脚 部 丈の低い裾広がりの脚部。脚柱上部の杯部ハクリ部には指圧痕を見る。外面へラナデ、内面ヨコハケ (6~7本/cm)。	○褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土

手培形土器

番号	法量cm	特 徴	考
121		体 部 腹部破片。凸帯にはヨコナデによる凹線+へラ先削突文。凸帯下の外面には柳搔き波状文+直線文を施文する。調整は内外ともナデによる。	○明褐色 ○角閃石、金雲母を含む胎土

3. 第V様式以外の土器

第V様式以後の土器

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
130	口径15.4 胴径22	口縁部 狹く「く」の字に外反する口縁部。端部はつまみあげぎみにヨコナデする。外面に接合痕あり。 胴 部 球形の器体。外面は比較的細筋のタタキメ（3.5条/cm）。器体中位以下は下から上へのヘラ削りによってタタキメを消す。内面は左回りのヘラ削り。肩部内面に1.5cm幅の粘土無痕跡が残る。	○黄褐色～淡赤褐色 ○企雲母が顕著、角閃石は目立たず ○器体中位にスス多し
131	口径25.3	口縁部 狹く「く」の字に外反する口縁部。端部はわずかな面をもち、ヘラ先刺突文がめぐる。 胴 部 口縁部との境に稜をもち、内面は左回りにヘラ削りする。	○褐色～淡褐色 ○角閃石、企雲母を含む胎土
132	口径19.4	口縁部 狹く「く」の字に外反する口縁。端部はつまみあげぎみにヨコナデし、上端が肥厚する。口縁は折り返して成形している。 胴 部 球形の胴部。外面は細筋のタタキメ（5.5条/cm）。内面は右回りのヘラ削りで器内は薄く仕上げる。	○暗褐色 ○角閃石、企雲母を含む胎土 ○器体中位に帯状にスス多し
133	口径15.3	口縁部 「く」の字に外反し、端部は上端に稜をもっておわる。外面タテハケ+ヨコナデ。内面ヨコハケ+ヨコナデ。 胴 部 外面下から上へのハケメ（7～8本/cm）。内面右回りのヘラ削り。	○淡褐色 ○角閃石、企雲母を含む胎土
134	口径14.6	口縁部 狹く「く」の字に外反する口縁部。端部はつまみあげぎみにヨコナデし、上端が肥厚する。口縁は折り返して成形している。外面タテハケ（8本/cm）+ヨコナデ。 胴 部 外面に極めて細筋のタタキメ（7条/cm）。内面左回りのヘラ削りで器内を薄く仕上げる。	○暗褐色 ○角閃石、企雲母を含む胎土
135	口径14.4 胴径16.4	口縁部 狹く「く」の字に外反する口縁部。端部はつまみあげぎみにヨコナデし、上端が肥厚する。口縁は折り返しによって成形する。 胴 部 肩の張る器体。外面は細筋のタタキメ（6条/cm）+下から上へのハケメ（12本/cm）。内面ヘラ削りによって器内を薄く仕上げる。	○淡褐色 ○角閃石、企雲母を含む胎土
136	口径21	杯 部 平坦な杯底部から大きく外反する口縁部が付く。端部はつまみあげぎみにヨコナデし、上端が肥厚する。外面ヨコヘラミガキ。内面はヨコナデ+放射状暗文。	○淡赤色 ○胎土精良
137		口縁部 外上方にのびる口縁部の端部に粘土を補充して2重口縁状を呈する。施文帯には櫛描き波状文+竹管押円形浮文をもち、上端はヘラ先で刻む。	○褐色 ○角閃石、企雲母を含む胎土
138	口径16.3 器高 5.8	口縁部 2段に短く外反する口縁部。内外ともていねいなヨコナデ。 体 部 浅い椀状の体部。外面ヨコヘラミガキ、内面は細かいハケメ（16本/cm）+ヨコヘラミガキ。	○明赤色 ○胎土精良
139	口径13.5	口縁部 内縁ぎみで端部は薄く尖る。 体 部 浅い椀状の体部。外面はあらいナデ、内面はていねいなナデ。	○淡赤色 ○胎土精良
140	口径 8.9	受皿部 浅い椀状の受皿部。口縁端部はつまみあげぎみのヨコナデにより上端に肥厚する。脚台との境はヘラ削りで整える。円錐形の脚台。外面ヨコヘラミガキ、内面ヨコハケ（7本/cm）+ナデ。	○淡赤色 ○胎土精良

141		脚台部 円錐形の脚台。外面ヨコヘラミガキ、内面ヘラ搔き+ヨコナデ。	◦淡赤色 ◦胎土精良
142		脚 部 短い中空の脚柱部に、大きく広がる裾部が付く。外面ヨコヘラミガキ、内面ハケメ(5~6本/cm)。	◦淡赤色 ◦胎土精良
143		脚 部 短い中実の脚柱部に、内轉ぎみに広がる裾部が付く。内外面ともヘラナデ。	◦黄赤色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
144	口径20.4	口縁部 直立する頭部から鋭く外折したのち、再び屈折して立つ。屈折部分の外面は突出した鈍い稜をもつ。頭部は内外ともハケメ+ヨコナデ。内面下端の接合部分にもハケメを見る。口縁部外面はていねいなヨコナデ。	◦灰黄色 ◦金雲母の微粒含むが角閃石は含まず(非河内産か)

弥生中期の土器

番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
145	口径15	体 部 内側する口縁部の外面に2条の回線文を施文した鉢。	◦淡褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
146	底径24.6	裾 部 なだらかに聞く裾部、外面には3条の回線文を施文した器台。	◦黄褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
147	口径22	口縁部 「く」の字に短く外反する口縁部。口縁端部はわずかに拡張し、ヘラ沈線1条と刺突列点を施す。肩部の張りは少ない。	◦暗褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土
148	口径21.5	口縁部 大きく外反する口縁部。端部は上下に拡張し、施文帯とする。端面には擬回線3条+半截竹管押圧文、ヘラ先削突文+5本単位の棒状浮文がめぐる。口縁内面にも波状文+直線文の施文をみる。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母を含む胎土

繩文土器深鉢

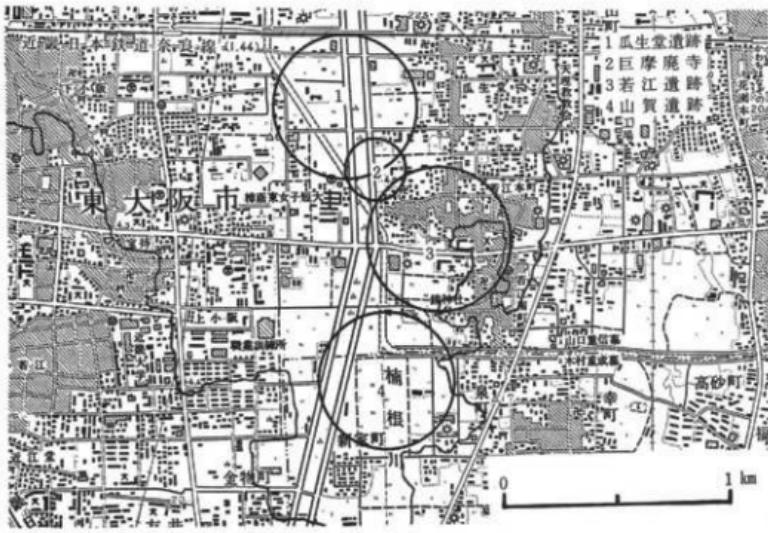
番号	法量cm	特 徴	色調、胎土、備考
149		体 部 凸帯を境に上半はヨコ方向にていねいなナデを施し、下半はヨコに削る。内面は削りによる。凸帯に施された刻目は深く、ヘラを右側に押し開きながらめぐる。	◦暗褐色 ◦角閃石が顕著な胎土
150		体 部 外面はナデ、内面は搔き削り+ナデによる。凸帯は断面三角形を呈し、小さく菱形に押し開いた刻目がめぐる。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母が顕著な胎土
151		体 部 内外面ともナデ。凸帯の刻目は右側に押し開きながらめぐる。	◦褐色 ◦角閃石が顕著な胎土
152		口縁部 わずかに内傾する口縁部。凸帯の刻目は棒状の器具で押し開いたためか、浅く丸みをもつ。	◦褐色 ◦角閃石、金雲母が顕著な胎土
153		体 部 凸帯以上の外面はヨコ方向にていねいなナデを行ない、内面もナデによって仕上げる。凸帯上の刻目は菱形に押し開いたものがめぐる。	◦外面褐色、内面暗灰褐色 ◦角閃石、金雲母の微粒が多い胎土

若江遺跡

I 若江遺跡の位置と環境

若江遺跡は東大阪市若江本町、北町、南町一帯に拡がる歴史時代の遺跡で、若江寺、若江城跡を中心として中世の集落をも含むものである。遺跡は旧大和川筋が形成した標高5m前後の平野上に位置している。

この付近は若江遺跡の他にも、弥生時代以後の各時期の遺跡が存在している。若江遺跡の北と南に隣接する瓜生堂、山賀の両遺跡は、弥生前期に初期農耕集落が形成され、瓜生堂ではこれが中期末まで存続したことが判っている。この両遺跡は、いずれも地表下4~5mに埋没することから、かなりの洪水による堆積があったものと思われ、瓜生堂遺跡の消滅理由もこのような自然環境の変化によると推測されている。その後、弥生後期~古墳時代初頭の土器を含む砂層が付近一帯で厚く堆積している。このような環境が安定するのは古墳時代前期以後である。古墳時代の刳抜井戸が瓜生堂で検出され、5世紀末~6世紀代の埴輪もかなり広い範囲で出土する。奈良、平安時代には、瓜生堂の範囲の東側で「若」の墨書きがある土器が出土し、西側で9世紀代の井戸と柱穴等が検出されている。また鎌倉時代に存在したとされる巨摩庵寺の位置も若江遺跡の北に推定されている。これら古墳時代中期以後の遺構は地表下1m以内にあり、中近世の集落や水田によって削平された部分も多いものと思われる。



第1図 周辺の遺跡

II 遺跡の概要と調査に至る経過

若江遺跡付近は昭和30年代までは旧若江村の集落を除いて一面の田地が広がっていた。中世井戸や溝等の遺構は旧村と田地のかなり広い範囲で検出されており、遺構面は旧表土から30～50cmの浅いところにある。

若江寺、若江城は、文献の上にその名が見えるものである。そのため若江寺は平安時代の元慶年間（877～885）に存続年代の一点をおくことができ、若江城は南北朝末期から戦国時代にかけてのかなり明確な存続年代が考えられている。

さて、これらの位置については、若江村の字切図に記された「寺垣内」・「城」等の小字名によって推定されており、過去の採集遺物にもこれらの小字の範囲から出土したものが多いことと一致している。このようなことから、本市では「寺垣内」・「城」の範囲を中心に、遺跡範囲内と推定する各地点で幾度か発掘調査を行なってきた。主な調査とその概略は以下のとおりである。

1 昭和47年 若江小学校校舎増築に伴う発掘調査 若江南町2丁目60番地において、校舎部分約500m²を東大阪市遺跡保護調査会の担当で調査を行なった結果、旧地表下1m内外で井戸、溝、ピット等を中心とした遺構面を検出。調査地点は小字名で「城」にあたる位置である第2図、72。

2 昭和48年 下水管埋設に伴う発掘調査 若江北町2丁目32番地～3丁目35番地の立坑部分5カ所（130m²）を東大阪市遺跡保護調査会の担当で調査を行なった結果、旧地表下50cm内外で中世の土師器、瓦器、瓦等を含んだ土層を検出した。調査地点は若江遺跡の中心より北西へ500m程離れており、瓜生堂、巨摩廢寺の両遺跡に係るものと予想されていたが、南北朝～室町時代の遺物包含層が検出されたことによって中世の若江集落が城の周辺以外にも存在することが判明した第2図、73-1～5。

3 昭和49年 若江寺、若江城の範囲確認調査 若江南町2丁目53～55番地の田地に3ヶ所のトレンチを設定し、東大阪市教育委員会の担当で調査を行なった第2図74-T1、2、3。調査地点は小字名「寺垣内」の範囲を含むが、中世～近世の瓦積み井戸1基を検出したなどだった。さらに若江北町3丁目526、530番地と若江木町4丁目544番地の3地点で調査を行なった第2図74-S1、2、3。調査地点は小字名「城」の範囲を含む。その結果、74-S1地点で若江城関係かと思われる礎石列をもつ建物、74-S2地点では磚列を側壁とした溝、74-S3地点では瓦溜を検出している。いずれも室町時代頃の遺構と考えられているが、調査範囲が限られていたため性格は明確にはつかめなかった。（文献「若江寺跡・若江城跡」東大阪市教育委員会 1975）

以上のように、遺跡範囲内の各地点で遺構、遺物が検出されている。しかしながら、若江城が消滅した後に、かなり大規模な整地が行なわれ、集落から水田や畑地に変わったところも多く、明確な建物遺構はほとんど検出されていない。従って、現状では小字名「城」およびその



第2図 若江遺跡の調査地点

周辺には遺物、遺構の密度が高いという結果より若江城の存在をおぼろげながら推察するにとどまっている。今回の調査は、このような現状において未だ不明な点が多い若江遺跡のなかで、寺や城以外の集落について南北方向の範囲確認を目的とし、宅地開発等から今後の保存対策を講じる必要上実施したものである。

調査にあたっては、土地所有者である森山一郎氏には土地の提供をはじめとして色々とお世話になった。ここにお礼を申し上げたい。

III 調査の概要

今回の調査は、若江遺跡の南北方向の範囲確認を目的として南と北に分かれて行なった。ここで北限の調査で設定したトレンチをN 1、N 2、南限の調査で設定したトレンチをS 1…S 8と呼び、過去の調査地点との混同をさけるために発掘年次を加えて79—N 1、79—S 1等と表記した。

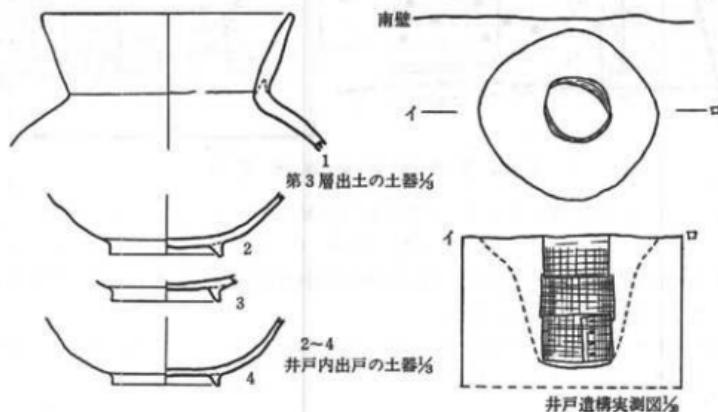
1. 79—N 1～2 トレンチの調査

東大阪市若江北町2丁目49番地にN 1トレンチを、36番地にN 2トレンチを設定した。この付近は、若江遺跡の最北端にあたるとともに巨摩庵寺の推定範囲とも重複している。また、下層には瓜生堂～若江一帯に認められる弥生後期～古墳時代初頭の土器を含んだ砂屑が存在すると思われることから、弥生後期～中世の遺物と中世の集落および巨摩庵寺関係の遺構が確認される可能性がある。発掘は地表下約2mまでを対象として人力掘削を行なった。

N 1 トレンチ

層序は、第1層（盛土）、第2層（水田耕土、暗青灰色砂質土）、第3層（灰色～黄灰色砂層）と続き、地表下2.5mまで確認した。

1層 盛土。厚さ1.4mで灰色砂を主体とする。この砂のなかには弥生後期末～古墳時代初頭の土器を含んでいる。瓜生堂遺跡内の工事で掘削された砂を水田上に盛土して畑地としたとのことである。



第3図 N 1 トレンチ 遺構、遺物

2層 厚さ10cm。重粘で湿田の様相を呈する。水田部分のなかに20cm程高くした畠地（播上田）がみられる。陶磁器、土師質小皿の破片を含む。

3層 厚さ1m以上。この付近一帯にみられる砂層で、部分的に薄く堆積した粘土層を含んでいる。粘土層内から壺口縁部、砂層内から甕片が少量出土。この層の上面は中世の遺構面である。

遺構は、旧耕土直下の第3層を上面として曲物を井戸枠とした井戸遺構が1基検出された。この面は水田耕土直下にあることから、水田耕土を掘き上げた畠地造成の際などによって10cm前後は削平されたものと思われる。井戸は直径1.9m、深さ1.4mの掘形の中心に径70cm前後の曲物を3段積み上げたものである。井戸内より瓦器、土師器小皿の破片が出土している（第3図）。

瓦器は断面3角形の高台を貼り付けたもので、3は内底面に格子状の暗文が施されている。第3層より出土した1は、直口の口頭部をもつ古墳時代初頭の壺であり、灰白色の砂粒を多く含んだ胎土からは搬入品とみられる。

N2トレンチ

層序は、第1層（耕作土）、第2層（床土、褐色土）、第3層（旧耕土、暗灰褐色土）、第4層（黄褐色砂質土）、第5層（黒灰色粘土）、第6層（黒灰色粘土）、第7層（青灰色砂）と続き、地表下1.5mまで確認した。

第1層 厚さ10cm。現在の畠地の耕作土。

第2層 厚さ20cm。床土で、なかに瓦器、土師器、瓦、陶磁器を含む。

第3層 厚さ10cm。旧畠地の耕土で、陶磁器を含む。江戸時代以後に形成されたもの。

第4層 厚さ50~60cm。上面が中世の遺構面となるもので、N1トレンチの第3層に対応するものであろう。この層は水田であった部分では耕土の搅拌や溝の掘削等によってかなり削り取られ、遺構は遺存しなかった。

第5層 厚さ10cm。かなり起伏をもって堆積し、植物遺体を含むが無遺物である。

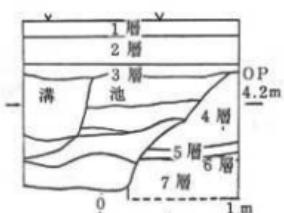
第6層 厚さ10cm。無遺物。

第7層 厚さ30cm以上。無遺物。

遺構は、黄褐色砂質土を上面として柱穴、水溜池、溝等を検出した第6図。これらは柱穴、池、溝



第4図 N2トレンチ調査地点



第5図 N2トレンチ北壁断面図

の年代順に構築されたものと思われる。

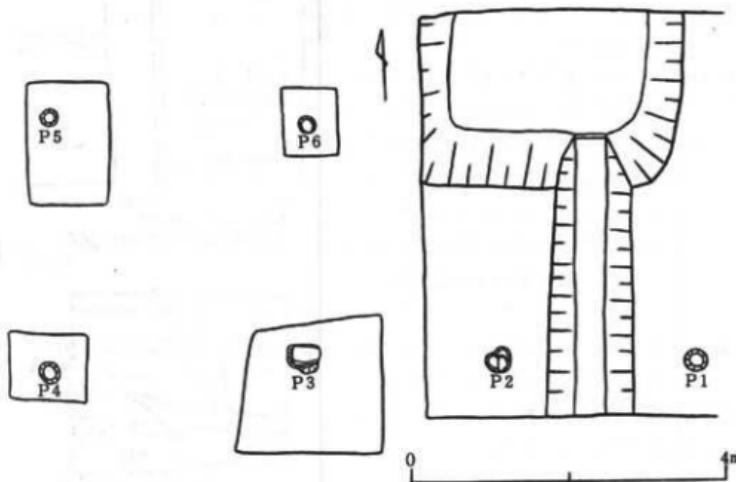
柱穴は東西の柱通りの柱間がやや不揃いである。しかし北側の柱列が池の築造によって削り取られているとみられることから、柱列は水溜池の築造より古いものと思われる。これらの柱穴のうち、P 2 では深さ20cmをはかる掘立柱の痕跡と水平に置かれた礎石がある。この礎石は柱痕跡の上をふさぐようにして埋えられていることから、柱は掘立から礎石上の柱へと補修のために移動したものと思われる。同じような柱痕跡と礎石の関係は P 3 でも認められる。

柱列を掘り込んで築造されている水溜池は、東西方向に約3mの一辺をとる方形のもので、深さは底まで約85cmある。池内は、底に暗青灰色の粘土と砂がブロック状に堆積した上に暗褐色粘土、粘質土が水平に堆積し、その上に暗褐色、暗灰褐色の埋土が入っている。池内からは埋土、堆積土の両方から瓦器、土師器が多く出土し、また少量ながら須恵器、磁器、陶器も出土した。また、底からは編み籠、曲物容器の底などの木製品も出土し、埋土には焼土が多く含まれていた。

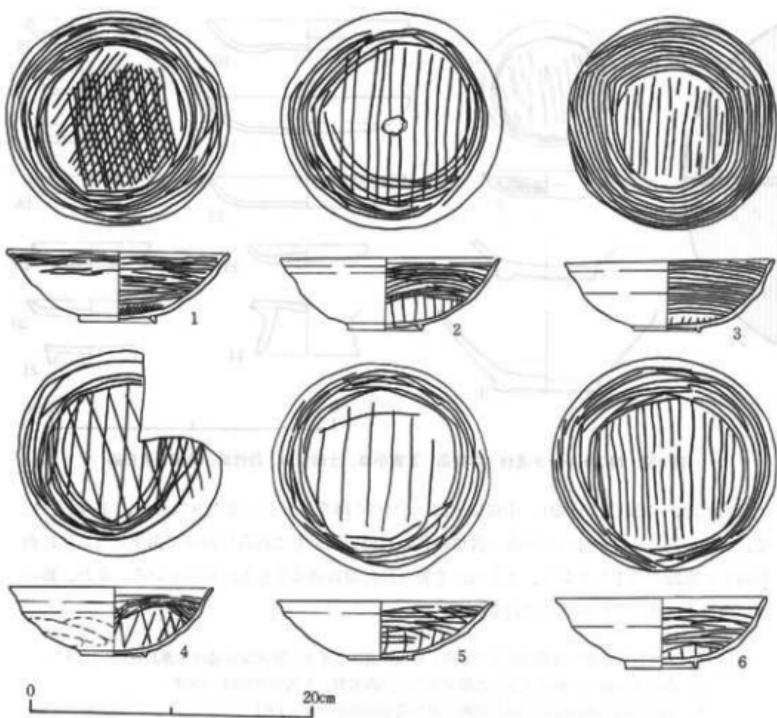
池の埋った後に掘削された溝は、幅80cm、深さ60cmのU字溝で、底に10~20cmの厚さで灰褐色の粘土と砂がブロック状に堆積し、上層は灰褐色粘質土の埋土である。溝内出土遺物は、堆

表1 N 2 トレンチピット計測値

ピット番号	規 模 (cm)	ピット番号	規 模 (cm)
P 1	30×30-21	P 4	24×28-20
P 2	30×32-19	P 5	20×20-14.8
P 3	35×42-20.5	P 6	20×20-12



第6図 N 2 トレンチ遺構

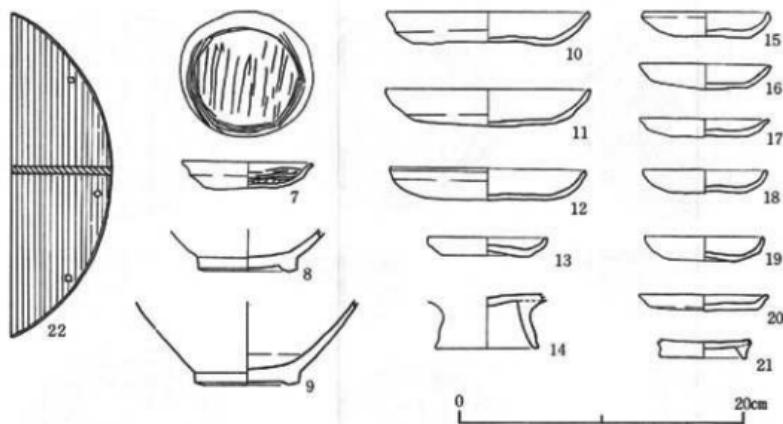


第7図 N2トレンチ遺物 瓦器検

積土、埋土とも水溜池内の遺物同様のものである。

これらの遺構の年代は、池内から出土した完形を含む多くの瓦器楕や土師質小皿がおおよそ鎌倉末～南北朝期のものであり、柱列が構成する掘立柱建物の一辺が条里区画と同様の南北を指すことが判断の材料となる。特に柱列は、瓜生堂遺跡の範囲内で最近検出した平安時代のものが条里区画に左右されない不定方向のものである^⑩ことから、今回検出したものは中世のものと考えてほぼ間違いないと思われる。おそらく建物、水溜池の年代は近接し、瓦器楕の年代に近い時期と考えるのが、全体に占めるこの時期の遺物の量からも妥当であろうと思う。

出土遺物は、図示したものはすべて池内から出土したものである。瓦器楕は、いずれも口径に比して器高が低く、断面3角形の小さな高台が付いている。このなかでは口径に対する器高の割合が最も大きい3は、内外とも丁寧な作りで、暗文は連続的に整然と施されている。一方、最も小さい5は、器形の歪みが大きく、内外の調整や暗文も乱雑である。今回出土した瓦器楕は、口縁端部の面が消失し、高台の突出度も小さく、内面のラセン状暗文も施されない新しい段階のもので白石太一郎氏編年^⑪の6～7型式、稻垣晋也氏編年^⑫のH～J型式に相当する。



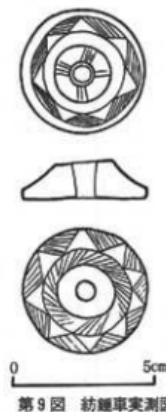
第8図 N 2トレンチ遺物 木製品、瓦質小皿、土師質皿、台付皿、青磁、青白磁

土師器には、小皿13.15~20、中皿10~12、台付皿14等がある。また9は青磁、8は青白磁で、台形の低い高台が付いている。古墳時代の石製紡錘車もこれらに混って出土した。他に曲物容器の底22が出土しており、3ヶ所に木製の目釘が貫通孔とともに残っている。また、轔の羽口の出土は生業との関係で注目される。

- (注) ①「古墳時代～歴史時代の瓜生堂遺跡」東大阪遺跡ガイド 東大阪市遺跡保護調査会 1978
 ② 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の考察」古代学研究54 1969
 ③ 福垣吾也「法隆寺出土の瓦器検」大和文化研究6-4 1961

小結

N 1、N 2トレンチは若江遺跡では最北部に設定したもので、付近は巨摩廢寺や瓜生堂遺跡上層の遺構、遺物も拡がっている可能性を持つ地域であった。発掘調査の結果、N 1トレンチでは旧耕土下の第3層上面で曲物枠の井戸1基を検出し、N 2トレンチでは鎌倉末～南北朝期の建物、池とその後築かれた溝を検出した。これらのことから、若江遺跡の中世集落は小字名「城」付近と同様の耕土下50cm以内の砂質土層を造構面として北側へもかなり大きく拡がっていたものとみられる。今回N 2トレンチで轔の羽口や多くの焼土を検出したが、これらは若江遺跡の中心部でもしばしば検出されているものである。中世の若江集落はわれわれの想像以上に大規模で、専門化した分野を生業とする人々も多く存在したのかもしれない。造構面が浅いために、造構の残りがあまりよくないことが障害となるが、今後とも調査によって資料を集積し、集落の内容に一步でも近づいていく努力が必要である。



第9図 紡錘車実測図

2. 79-S1~8トレンチの調査

東大阪市若江南町5丁目337番地にS1、S2トレンチを、339番地にS3~S5トレンチ341番地にS6トレンチ、332番地にS7~S8トレンチをそれぞれ設定した。この付近は、若江遺跡の最南端にあたり、上層で古墳時代~室町時代の遺構が、下層で弥生時代の遺構が重複して確認できる可能性があるため、調査方法として盛土及び間層については機械掘削をおこない、順次調査を進めていく方法をとったが、下層においては地表下約4mの深さになり、安全上の問題から精査することができず、遺物の包含状態を確認するのにとどまった。以下順次、各トレンチで明らかになったことを記していきたい。

S1トレンチ

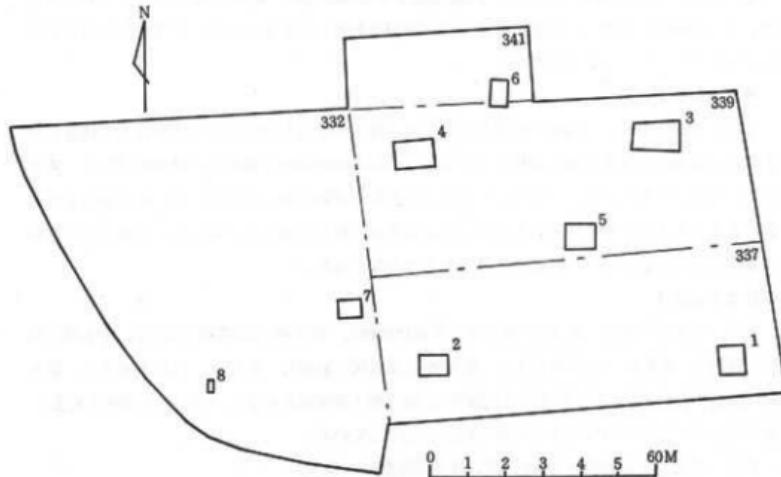
337番地の南東隅に設定した。層序は、第1層（盛土）、第2層（黄褐色砂層）、第3層（灰褐色砂層）、第4層（暗灰色粘砂土）、第5層（淡青灰色砂層）、第6層（淡灰色砂層）、第7層（黒褐色腐植土）、第8層（青灰色粘砂土）、第9層（暗灰色砂層）、第10層（淡褐色砂層）、第11層（淡青灰色砂層）、第12層（黒褐色腐植土）と続き、各層は凹凸なく平坦に堆積している。

1層 盛土。厚さ約80~100cmで地域一帯に盛り上げられている。昭和39年の第二寝屋川開削時の盛土であろう。

2層 厚さ約50cm。2層直上が弥生時代終末期の遺構面を形成すると思われるが、本トレンチでは遺構面はすでに削平されている。土師器、須恵器などの破片が少量出土。

3層 厚さ約50cmで一帯に堆積している。無遺物。

4層 厚さ約50cmでほぼ平坦に堆積している。無遺物。



第10図 S1~8トレンチ位置図

- 5層} 厚さ約50cmで上層は細かな砂粒、
6層 下層は粗い砂粒が堆積。現在は、
水位が下がったために湧水はま
たくない。
- 7層 厚さ20cmで植物遺体が若干認めら
れる。
- 8層 厚さ約60cmで一応に堆積が認めら
れ、無遺物。
- 9層 厚さ約30~40cm、粗い砂層で弥生
土器を若干含む。弥生前期の包含
層を形成すると思われるが、遺構
面となるべき層位は確認できなか
った。
- 10層 漩水が激しい。一帯にもっとも厚
く堆積する。
- 11層 9層との区別は明瞭でないが、若
干砂粒が粗くなる。

- 12層 植物遺体を若干含む。腐植土であるが、本トレンチ内では遺物、遺構とも認められな
かった。

本トレンチでは、上層、下層とも明確な遺構は確認できなかったが、地表下約3mのところ
で弥生前期の遺物包含層を認めた。機械掘削によるため遺物の量は少なく遺構も明確でない
が、第二寝屋川の掘削時に大量に弥生土器が発見されていることからも、弥生前期の包含層が
続いていることが十分に考えられる。

S 2 トレンチ

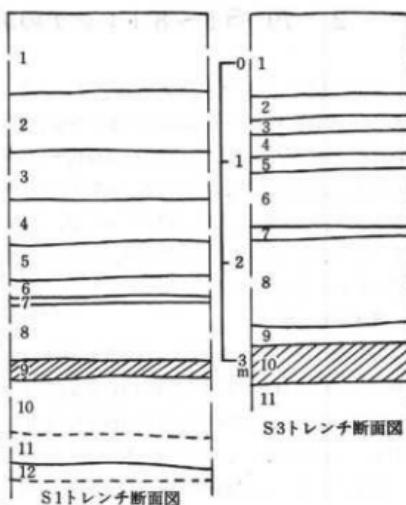
S 1 トレンチの西、約70mの地点に設定した。盛土を除去したのち、第2層直上で精査した
ところ、幅50cm、深さ20cmの規模でトレンチの北から南へ伸びる溝状の遺構を確認した。溝内
には、何らの遺物も認められなかったので、時期など詳細は明らかでないが、第2層直上で瓦
器の細片が若干出土していることから、ほぼ中世期に属する溝と考えられる。上層で溝状遺構
を確認したために、下層への掘り下げはおこなわなかった。

S 3 トレンチ

層序は上から第1層(盛土)、第2層(茶褐色砂層)、第3層(淡茶褐色砂層)、第4層(黃
褐色砂層)、第5層(淡灰色粘土)、第6層(淡青灰色砂層)、第7層(黒色腐植土)、第8
層(淡青灰色砂層)、第9層(淡灰色砂層)、第10層(淡灰褐色粘土)、第11層(青灰色粘土)
となる。各層位は凹凸なく平坦な堆積状況をしめしている。

- 1層 盛土。厚さ約80~100cm、第二寝屋川開削時の盛土。

- 2層 古墳時代の遺構面を形成すると思われるが、すでに削平されており遺構は確認できな



第11図 S 1、S 3 トレンチ断面図

- かった。土師器が若干出土している。
- 3層 厚さ約20cmで、土師器、弥生後期の土器片が若干出土している。
- 4層 厚さ約20~30cm。無遺物。
- 5層 粘土層に変るが無遺物。
- 6層 厚さ約50~60cm、第1トレンチにおいても認められ、一帯に広がっている。無遺物。
- 7層 厚さ10~20cmで植物遺体を若干含む。
- 8層 厚さ約90~100cmで細かな砂粒、自然木をわずかに含む。遺物、遺構は認められない。
- 9層 厚さ約20~30cmで粗い砂粒を多く含み、湧水が激しい。弥生土器を若干含むが流れ込みにより堆積したものであろう。
- 10層 弥生前期の包含層、粘土中より弥生土器を検出。機械掘削であるため一部掘りあげた土砂内より採集をおこなう。
- 11層 弥生前期の遺構面を形成すると思われる。今回は精査はできなかったが、遺構が検出される可能性が高い。

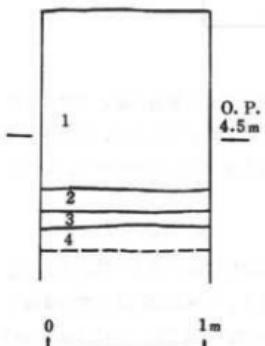
S 4 トレンチ

S 3 トレンチの西、約50m、339番地内に第4トレンチを設定した。層序は上層から、1層（盛土）、2層（茶褐色粘砂土）、3層（淡黄褐色砂層）、4層（淡茶褐色砂層）となる。各層位はほぼ平坦に堆積しているが、第3層のみは西にいくに従ってわずかに薄くなる。この3層を切り込んで計7カ所のピットを検出した。ピットはいずれも削平を受けており、皿状に凹む底の残存部は浅い。ピット内には炭まじりの暗褐色土が堆積しており、ベース面との色別は容易であった。ピット内より弥生時代末から古墳時代初頭の土器が検出できた。各ピットの計測値は表記したとおりであるが、いずれのピットも何らの施設も伴なわず、素掘りで皿状に凹むもので、今回の調査では性格を明確にはできなかった。

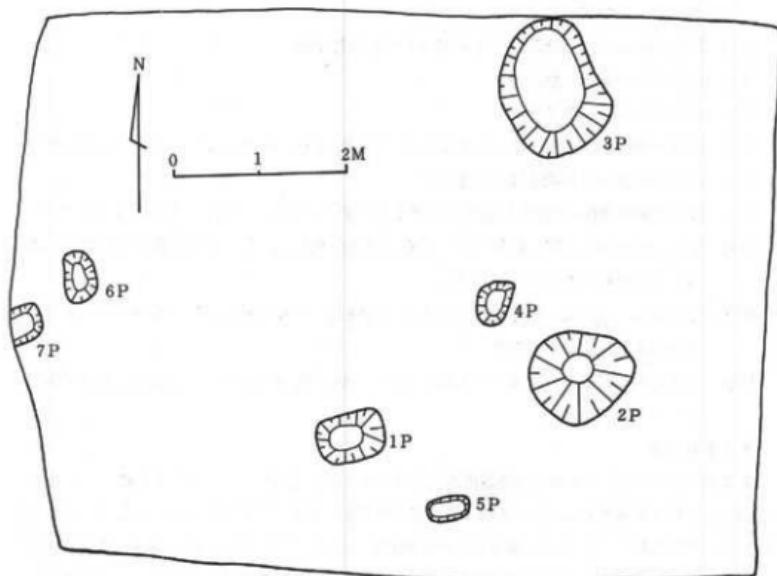
S 5 トレンチ

S 3 トレンチで検出した弥生前期の包含層とS 4 トレンチで検出した弥生時代末～古墳時代の遺構の広がりを確認するために、ほぼ中央付近にS 5 トレンチを設定した。

層序は、S 3 トレンチの場合と同様であるが、弥生前期の包含層と考えられる第10層（淡灰褐色粘土）は本トレンチでは黒色粘土層になるが、機械掘削による土層観察の結果では遺構、遺物は認められなかった。しかしながら、下層に青灰色粘土層が続き、明確な遺構面を形成するところから、今後の調査によっては、遺構が検出される可能性が高いと思われる。



第12図 S 4 トレンチ断面図



第13図 S 4 トレンチ平面図

表2 S 4 トレンチピット計測値

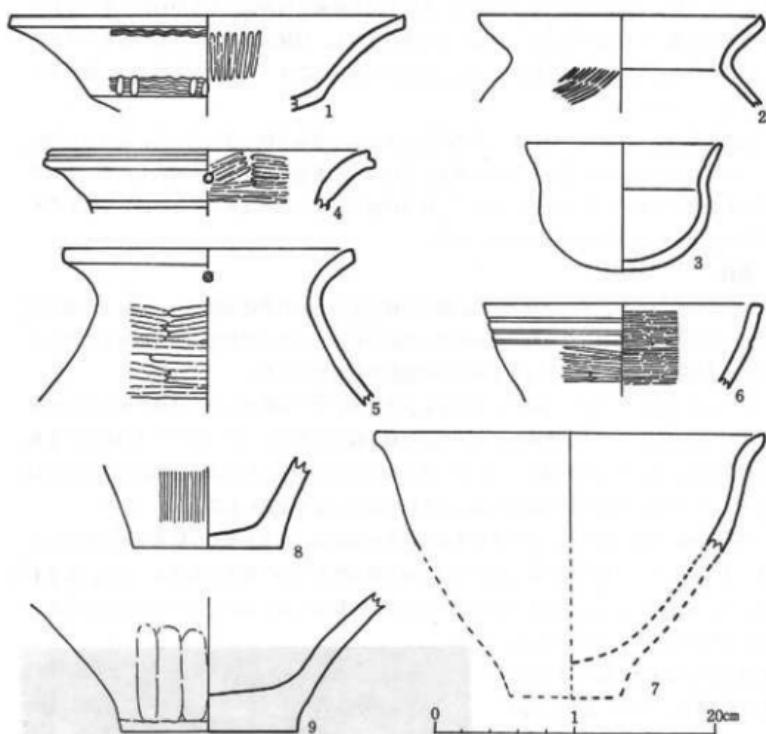
名 称	規 模 (単位cm)	名 称	規 模 (単位cm)
No 1	80×55-16	No 5	50×20- 5.6
No 2	100×130-16.5	No 6	60×40-10.9
No 3	160×130-17.1	No 7	50×40- 7.4
No 4	50×40- 6.7		

S 6 トレンチ

S 4 トレンチで検出した造構の北への広がりを確認するために北東約30m付近、341番地内にS 6 トレンチを設定した。S 6 トレンチは、一段高く盛土がおこなわれおり、この盛土を機械掘削により排除した。S 4 トレンチで確認した造構は本トレンチでは検出できず、明確な造構面の続きも確認できなかった。

S 7 トレンチ

337・339番地の西に続く、332番地内に設定した。この田圃は現状では東よりは約1mほど低くなっている。前期の包含層の広がりを確認するために設定し、機械掘削によって約4mまで掘り下げた。層序は、S 3 トレンチと同様であるが、第10層(淡灰褐色粘土)には砂層の混入が認められ、砂層内より弥生土器片を若干検出したがいずれもが流れ込みによるものと思われる。



第14図 S 1～8 トレンチ遺物、弥生器、土器器

S 8 トレンチ

332番地の南西隅に上層の造構の広がりを確認するため設定した。層序は上から 1 層（耕土）、2 層（淡灰褐色土）、3 層（黄褐色粘土）、4 層（茶褐色粘砂土）、5 層（黄褐色土）6 層（淡黄褐色砂層）、7 層（灰色粘土）になる。本トレンチでは三枚の床土が検出できた。すなわち、1 層は現在の床土、3 層は第二寝屋川開削時、5 層は大和川付替時における床土と思われる。江戸時代以降の土地利用によってこの付近では造構はほとんど削平されていると思われる。

出土遺物

出土遺物はすべて土器であり、S 4 トレンチのピット内から出土した弥生時代末～古墳時代初頭に属する土器と第3 トレンチから出土した弥生前期の土器にわけることができる。

S 3 トレンチピット内の土器はすべて細片になっており、図化できるものは一部であった。1 は高杯の杯部で口径28cmを計り、杯底部に稜をもち、大きく外反する口縁部をもつ。波状文

棒状浮文を配し、装飾豊かな土器である。3は小型丸底壺で内外面ともていねいにナデられている。2は甌の口縁部で体部外面に細かな叩き目を施し、口縁端部をわずかにつまみあげる。雲母、角閃石を含む胎土で茶褐色を呈し、河内系の土器である。その他、製塙土器の脚台部が一点出土している。

前期の土器には壺・甌・鉢があったが、図化できたのは壺・鉢のみであった。壺は短い頸部からわずかに外反する口縁をもつて4、5のように蓋用の穿孔を施すものもある。すべてていねいなヘラ磨きがおこなわれている。鉢は口縁がわずかに外反する7と直口しておわる6とがあり6には3条の沈線が施されている。

小結

今回の試掘地点は、若江遺跡の性格、範囲を確認するために若江地区でも、もっとも南端にあたる地点を選んでおこなった。この結果、地表下約1mの地点で弥生末～古墳時代初頭の遺構と地表下約4mのところから弥生前期の遺物包含層を確認した。

弥生末～古墳時代初頭の遺構は、S4トレンチにおいてのみ検出した。遺構の広がりを確認するために設定したS5、S6トレンチでは遺構を検出できなかった。後世の土地利用、水利作用を考えるならばかなり削平を受けていると思われる。しかしながら、遺構によっては残存するものがあり、今後面的な調査をおこなえば明らかになると思われる。

弥生前期の遺物包含層は、地差下約4mの深さに位置し、湧水も激しく精査をおこなうことはできなかった。機械掘削によって遺物包含層を確認するという作業にとどまったが、S2トレンチ、S3トレンチ、S7トレンチで前期の遺物を検出した。このことから一応この地域一帯に前期の包含層が分布することが明らかになった。時期的には前期（中）頃から（新）段階に位置すると思われる。今回の試掘地点より、南西約100mの地点で山賀遺跡の存在が確認されており、今回の調査で前期の遺物が出土したことから、山賀遺跡の範囲を拡げて考えることも可能になり、今後遺構などが検出されれば1つの遺跡として把握することができると思われる。



調査地點周辺

IV ま　と　め

1. 若江遺跡は若江寺、若江城とそのまわりに存在した中世集落を含んだ遺跡である。これまで何回か発掘調査が行なわれてきたが、井戸や溝は多くを検出しながらも明確な建物遺構等はあまり検出されていなかった。さらに遺跡の範囲は小字名「城」や「寺境内」を中心としてどれ程の範囲に拡がるかも、これまででは城や寺関係を主に追求していただけたあまり問題にはされていなかった。そこで、今回の範囲確認調査では、城や寺の周間に存在したと思われる中世集落の確認を目的として実施した。

2. 発掘調査は、遺跡の北限、南限を確認するために北と南に分かれて行ない、北限部では2ヶ所のトレンチ、南限部では8ヶ所のトレンチを設定して調査を行なった。北限部の調査では若江遺跡の北端の確認とともに、隣接する巨摩庵寺や瓜生堂遺跡上層の遺構、遺物の拡がりの確認をかねて行ない、南限部では若江遺跡の下層でしばしば出土する弥生土器や隣接する山賀遺跡の範囲が東大阪市域まで延びているかどうかという点の確認も合わせて行なった。

3. 発掘調査の結果、北限部のN1トレンチで中世の曲物枠の井戸遺構を1基、N2トレンチでも同じく中世の掘立柱建物、池を検出し、その後構築されたU字溝もこれらと切り合い関係をもって検出した。中世の建物は、掘立柱を修理あるいは建て替えの際に礎石をもつものとしていた。池は一辺が約3mの方形と思われるもので、建物の北側柱列を削り取って掘られていることから建物より後のものとわかる。池内からは多くの瓦器、土師質小皿と青磁、青白磁、陶器等が出土した。これらは瓦器軋の型式から、鎌倉末～南北朝期のものと思われ、建物や池の年代もさほどかけ離れたものではないと考えられた。また、轍の羽口や焼土が出土したこと、この建物で営んだ生業についても想像が及ぶが、これについては若江遺跡中心部でも同様な遺物がしばしば出土することから今後資料の集積を待つて問題にすべきであろう。

4. 南限部の調査では、中世の集落範囲はこの地点



第15図 若江城、若江寺、字切図

までは及んでいないことが判明した。しかしながら、新たに古墳時代初頭の遺構面を検出し、下層からは弥生前期の土器が出土したことが注目される。S 4 トレンチで検出した古墳時代初頭のピットは、旧耕土のすぐ下にあらわれたことから、古墳時代初頭以後の河内平野は洪水による堆積の少ない比較的安定した状態にあったようである。このことは、瓜生堂遺跡上層の古墳時代中期以後の遺構面も同様の砂質土層上に検出されるものが多く、全般的な傾向と言えよう。一方、弥生前期の土器は、地表下 4 ~ 5 m の深さに堆積した黒色粘土内から出土したもので、南の八尾市域を中心をもつと思われる山賀遺跡がこの地点まで拡がるものと思われる。

5. 以上のように、今回の調査では中世の遺跡だけでなく古墳、弥生の各時期においても新たな知見が得られた。これらの結果を今後の開発に対する文化財保護のための資料としたい。

以上

図 版

壁穴内の炭化材出土状況

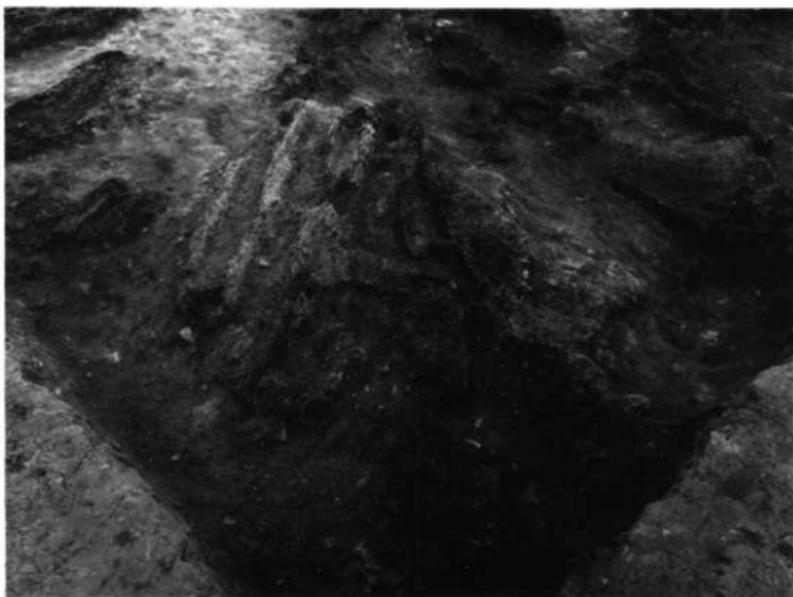




E-4 地区の全 景（南より）



竪穴住居址の全 景（東より）



竪穴内の炭化材（北東より）



竪穴内の炭化材（中央部より北東）



竪穴内の炭化材（北西より）



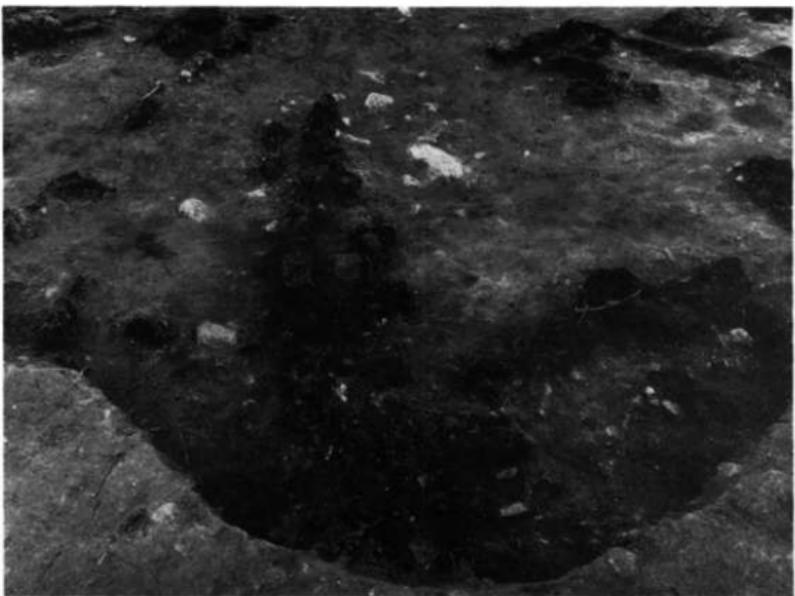
竪穴内の炭化材（中央部より北西）



竪穴内の炭化材（南東より）



竪穴内の炭化材（中央部より南東）



竪穴内の炭化材（南西より）



竪穴内の炭化材（中央部より南西）



竪穴内の炭化材（南より東壁沿い）



竪穴内の炭化材（北より中央部）



竪穴内の炭化材（西より中央部）



竪穴内の炭化材（中央部より南壁中央部）



板状炭化材出土状況（東壁中央部）



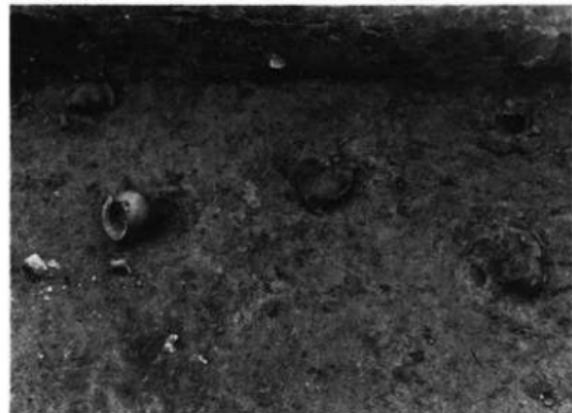
組み合わせ材細部（中央部）



割材に巻かれた蔓状炭化材（南東部）



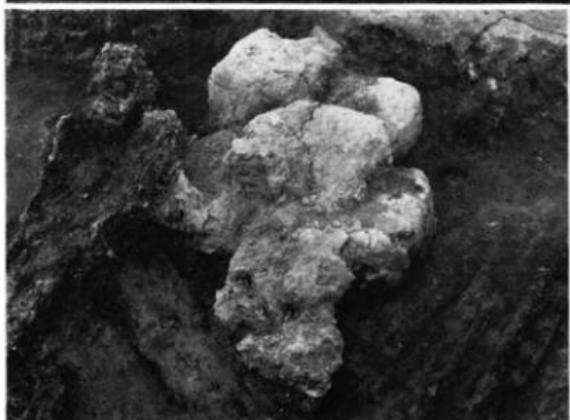
板状炭化材細部
(北東部)



整穴埋土上層の土器出土状況



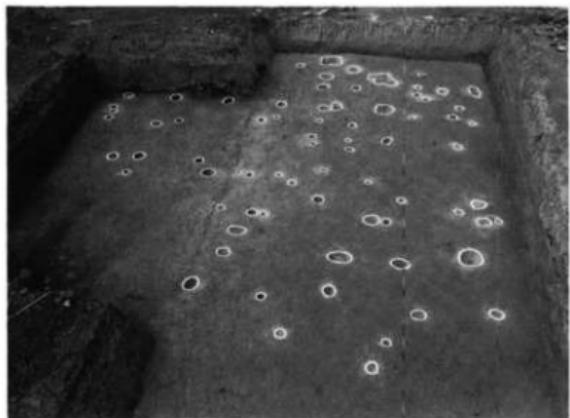
南壁中央部の焼粘土塊
(北より)



西北隅の焼粘土塊
(東より)



西北隅の焼粘土塊
(北より)



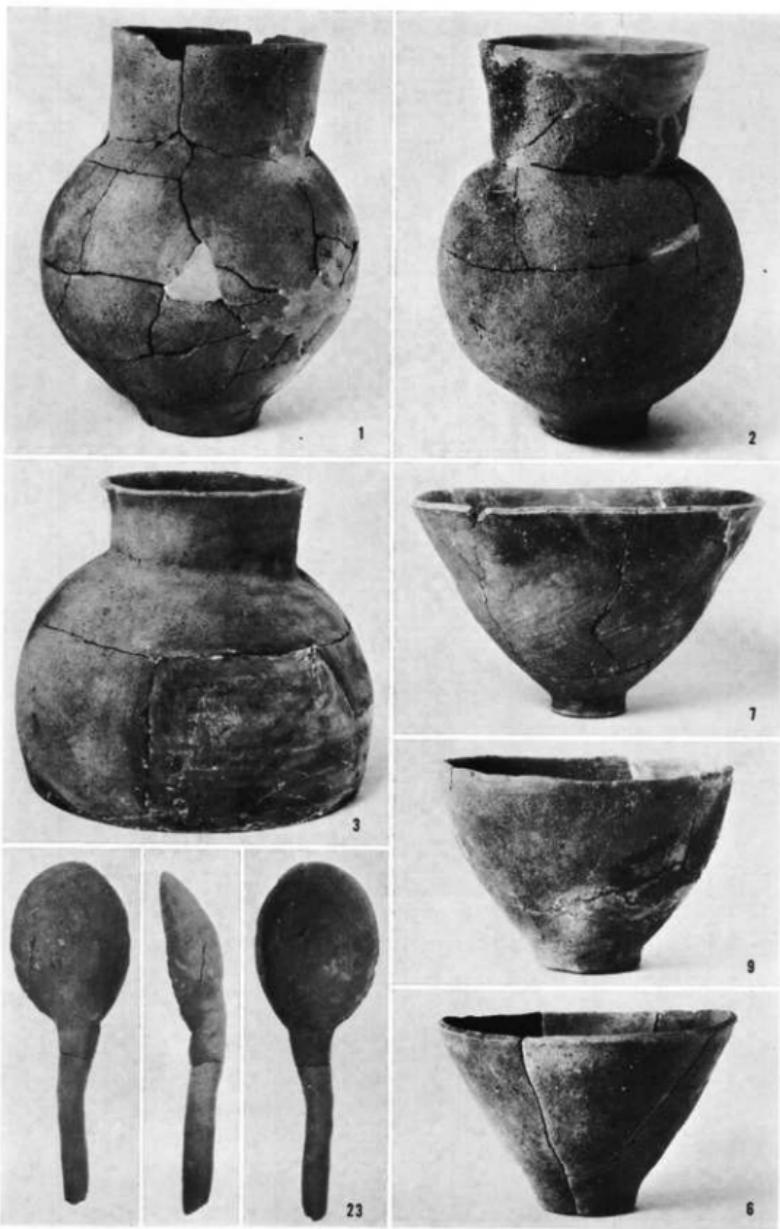
E-3 地区掘立柱群全
景（東より）



E-3 地区掘立柱群全
景（北より）



第3層内土器出土状況



竪穴内の第V様式土器 壺、鉢、土製匙



14



12



34

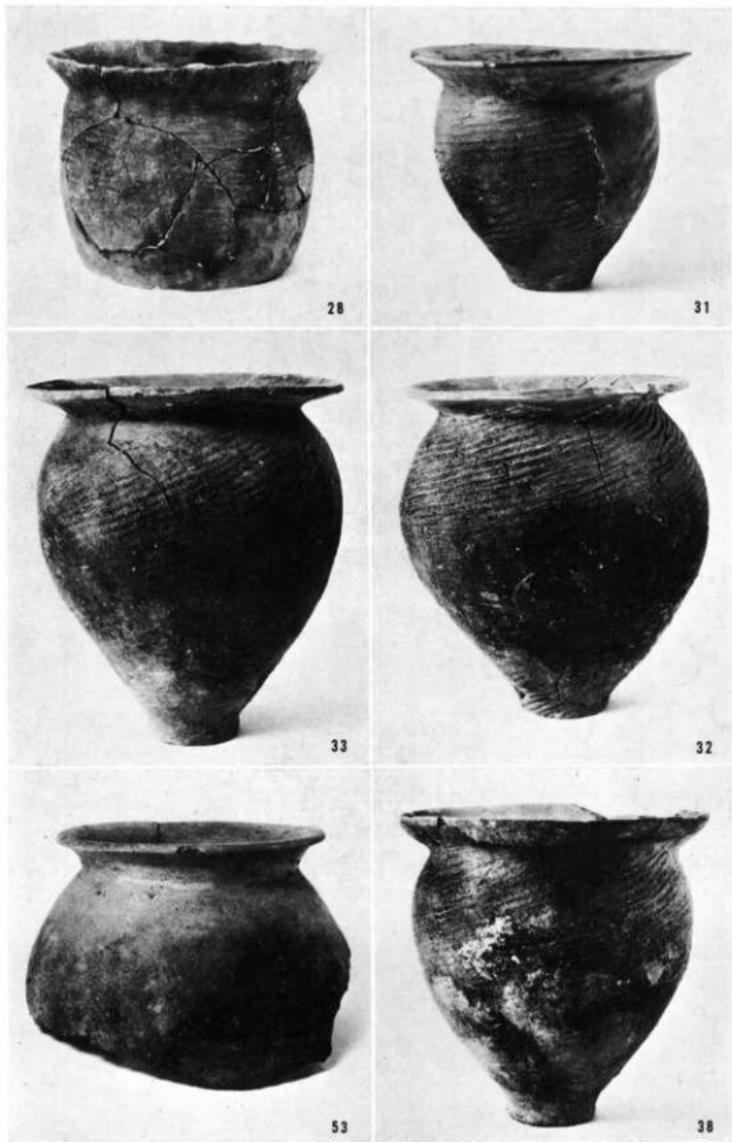


13

竪穴内、包含層の第V様式土器 壺



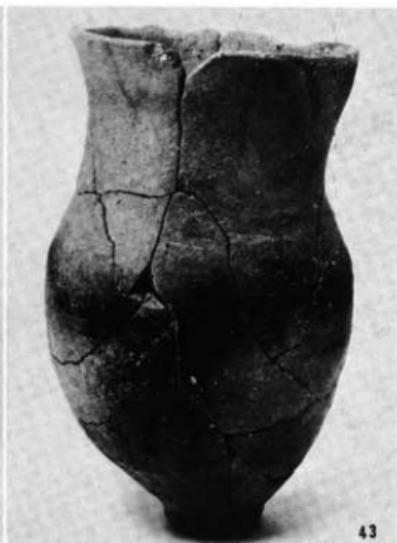
竪穴内、包含層の第V様式土器 漆



第V様式土器 壺



49



43



50



48



56

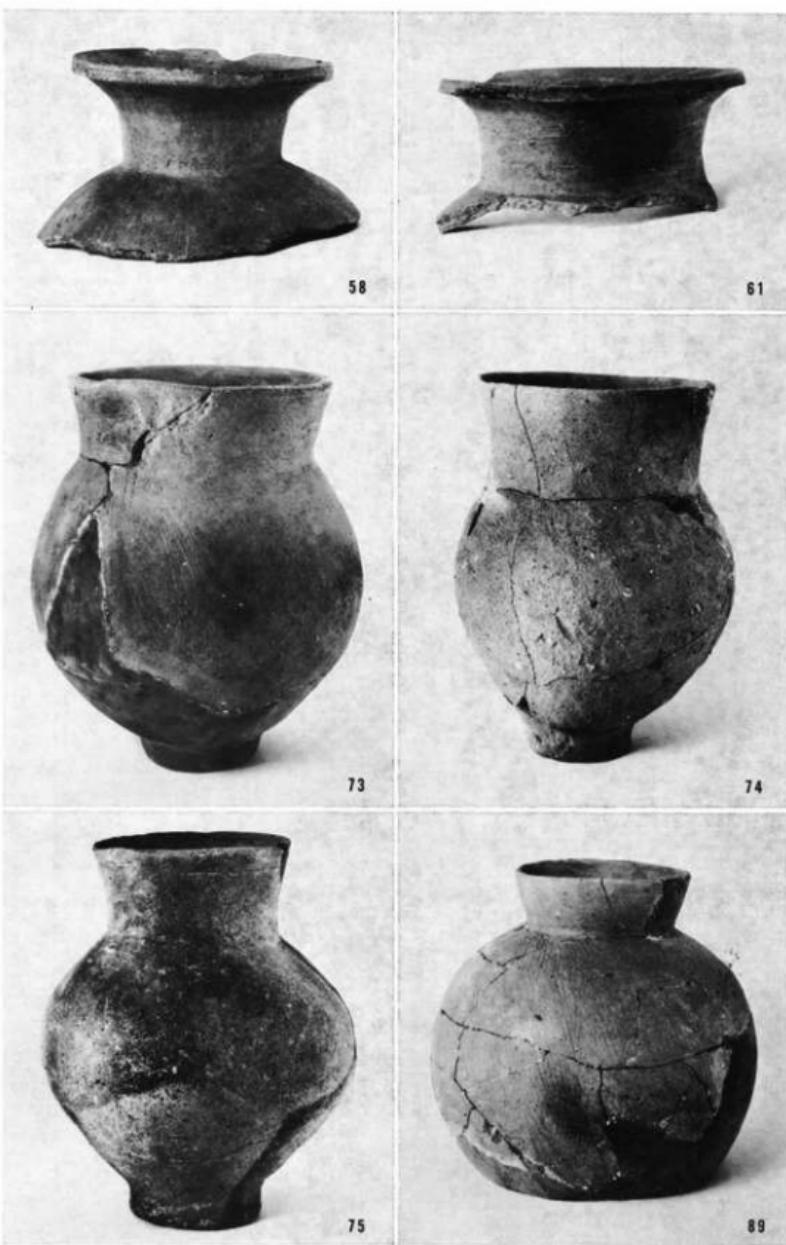


57

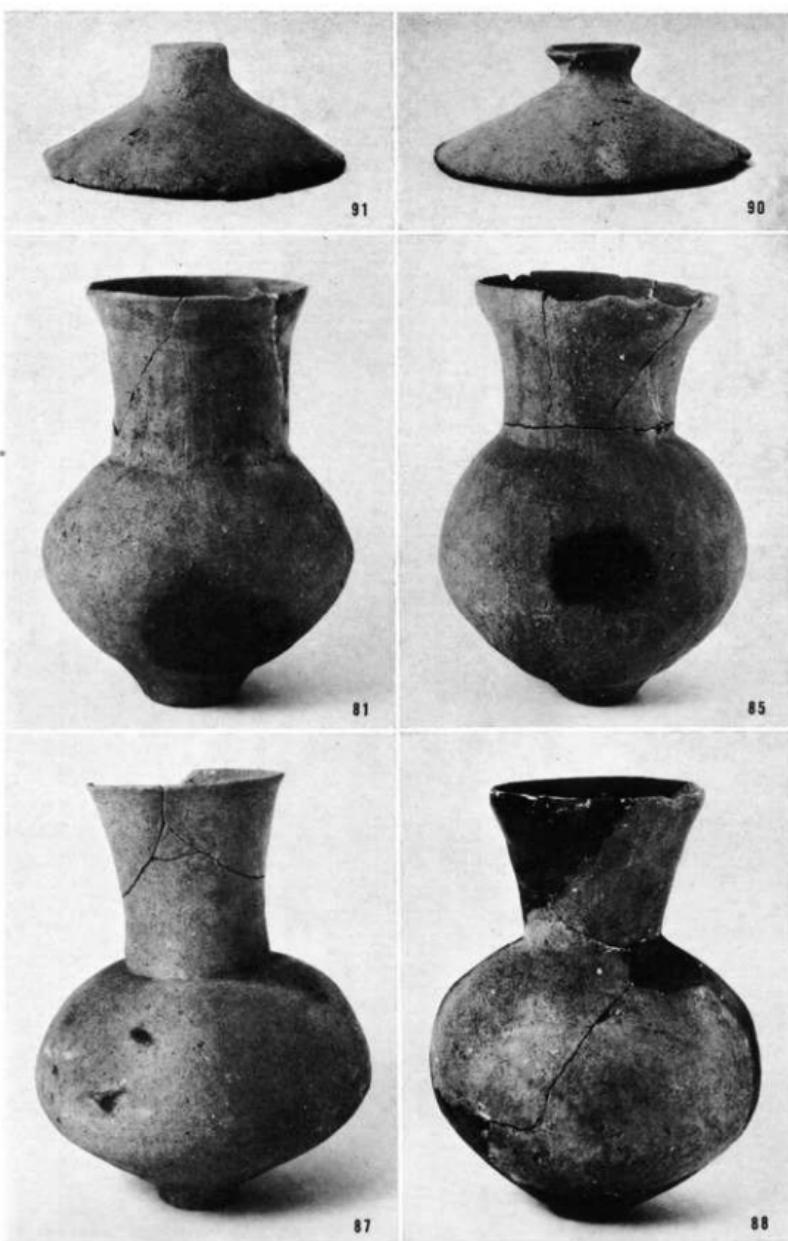
第V様式土器 壺、壺



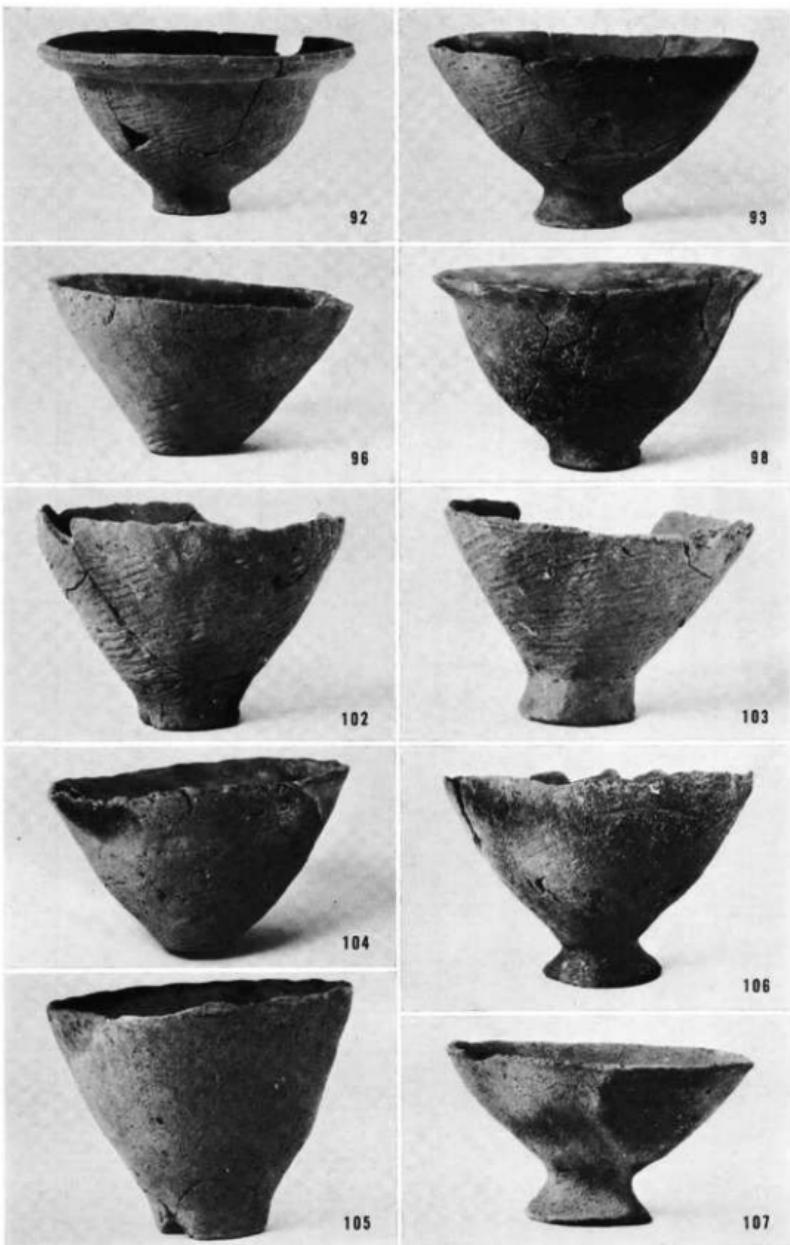
第V様式土器 壺



第V様式土器 壺



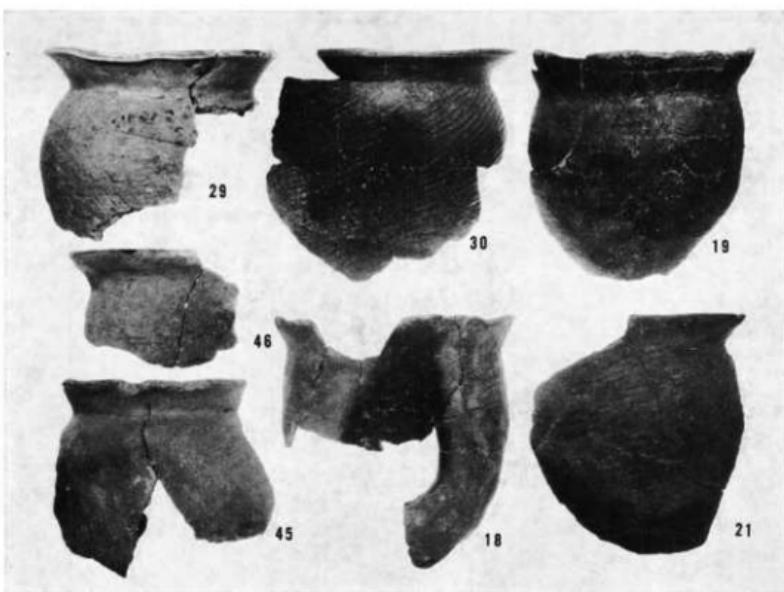
第V様式土器 壺、蓋



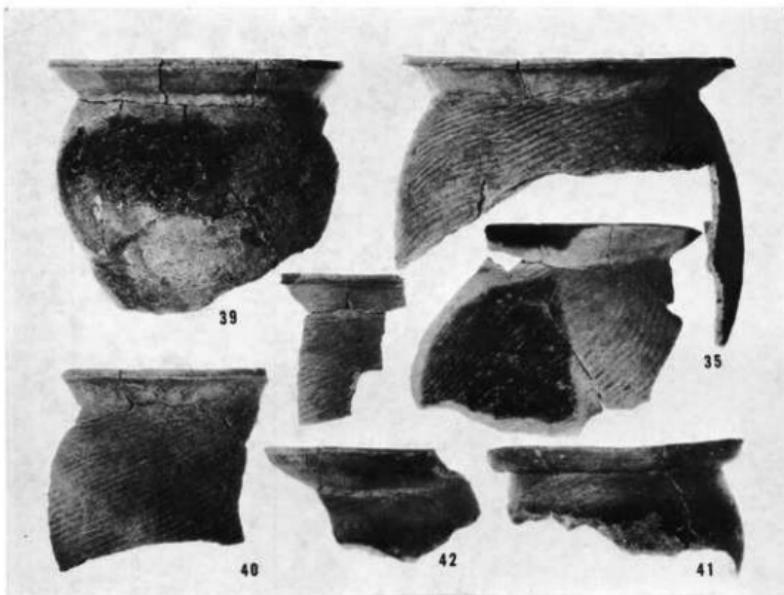
第 V 様式土器 鉢



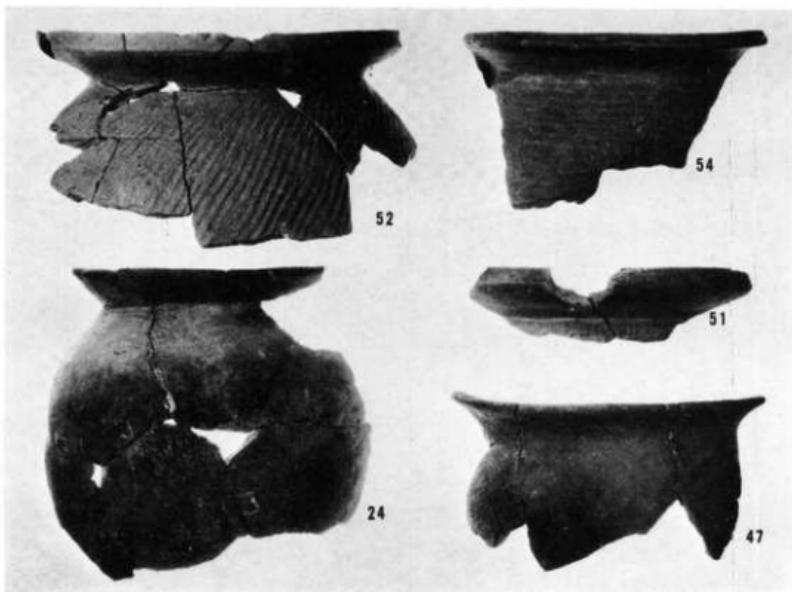
第V様式土器 鉢、ミニチュア土器、器台、高杯



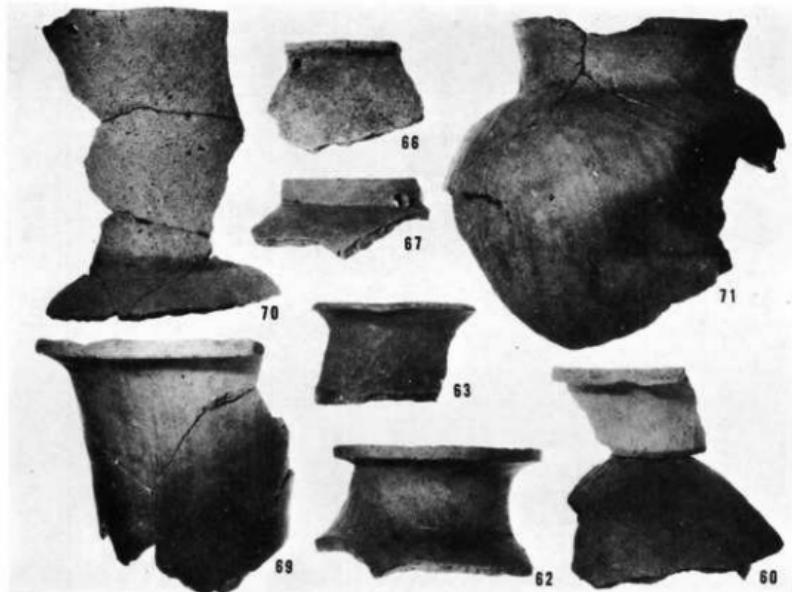
第V様式土器 壺 (18.19.21は竪穴より出土)



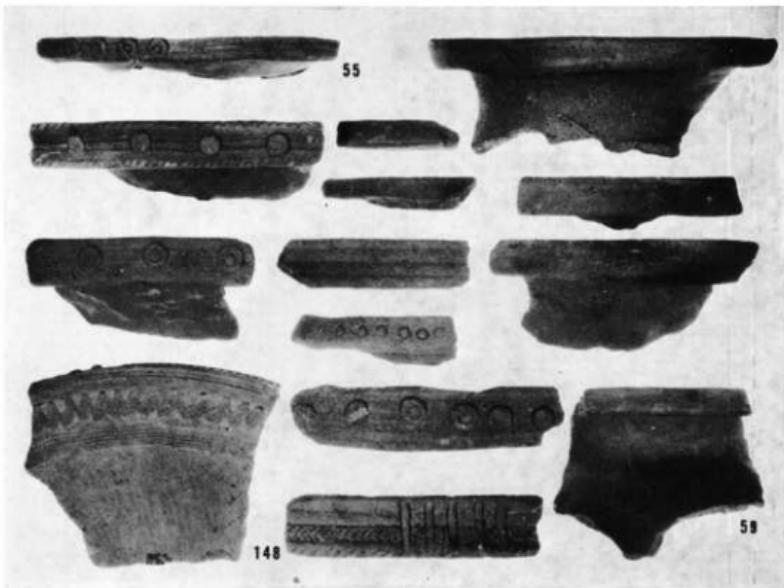
第V様式土器 壺



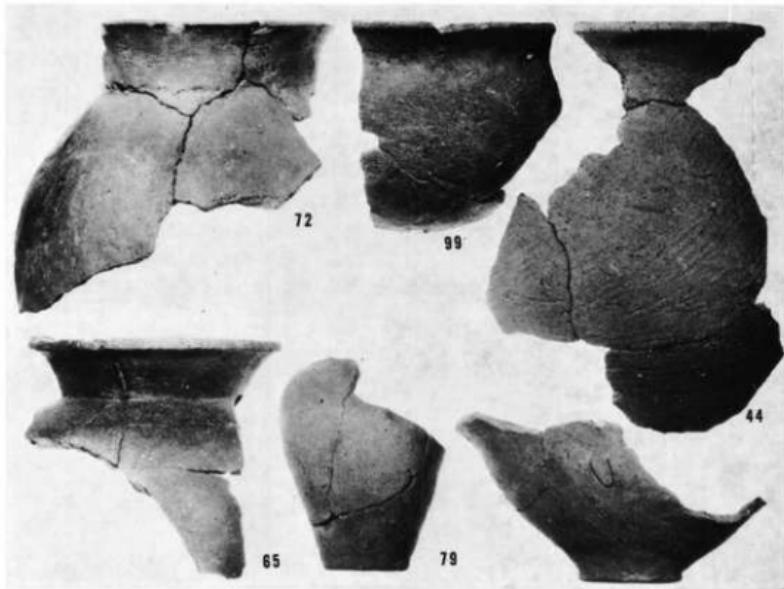
第V様式土器 壺



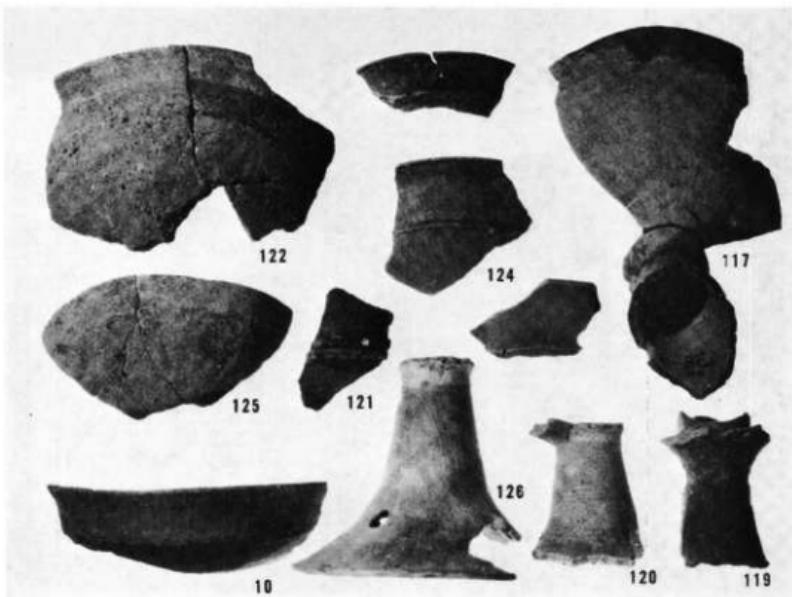
第V様式土器 壺



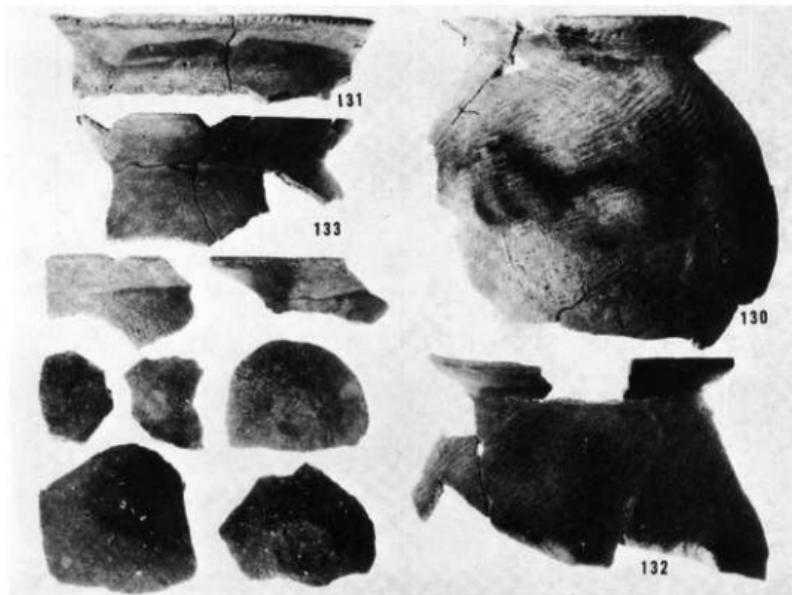
第V様式土器 壺（148はIV様式の器台）



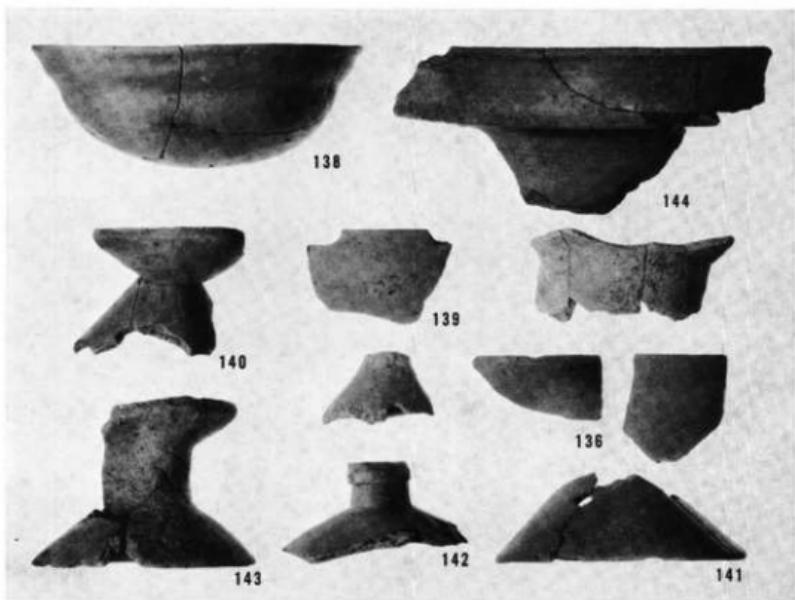
第V様式土器 壺、鉢



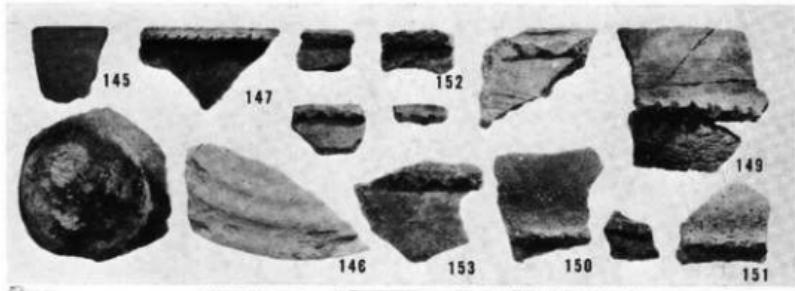
第V様式土器 高杯、手焙形土器



第V様式以後の土器 壺



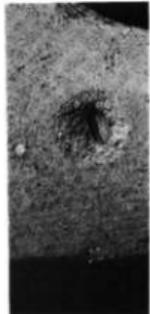
第V様式以後の土器 壺、小型鉢、小型器台、高杯

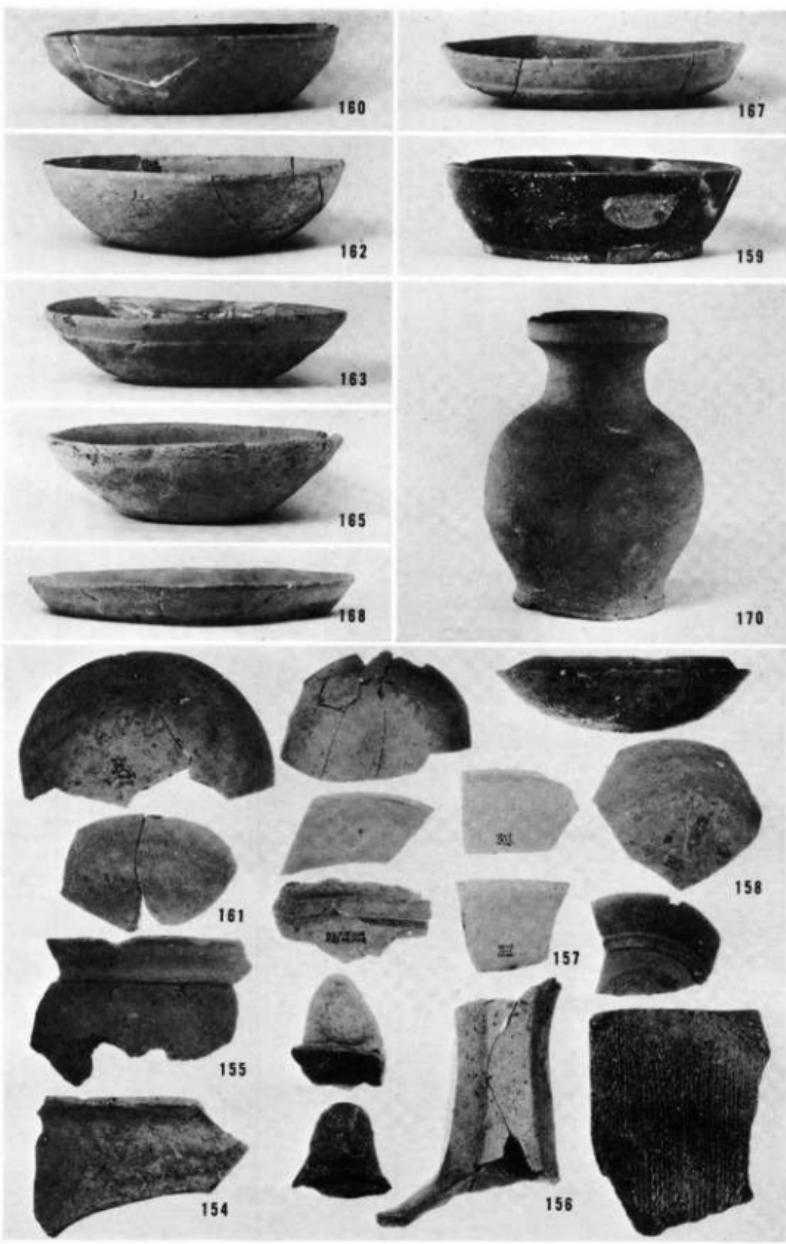


上、縄文晩期の深鉢、弥生中期の壺、鉢、器台

右、第V様式土器
壺60の絵画文
様(4/5)

左、糊痕を見る土
器片(1/1)





奈良、平安時代の土器 壺、高杯、杯、皿、把手 須恵器、杯、壺、瓦



N1 トレンチ全景



N1 トレンチ井戸



S4 トレンチピット群



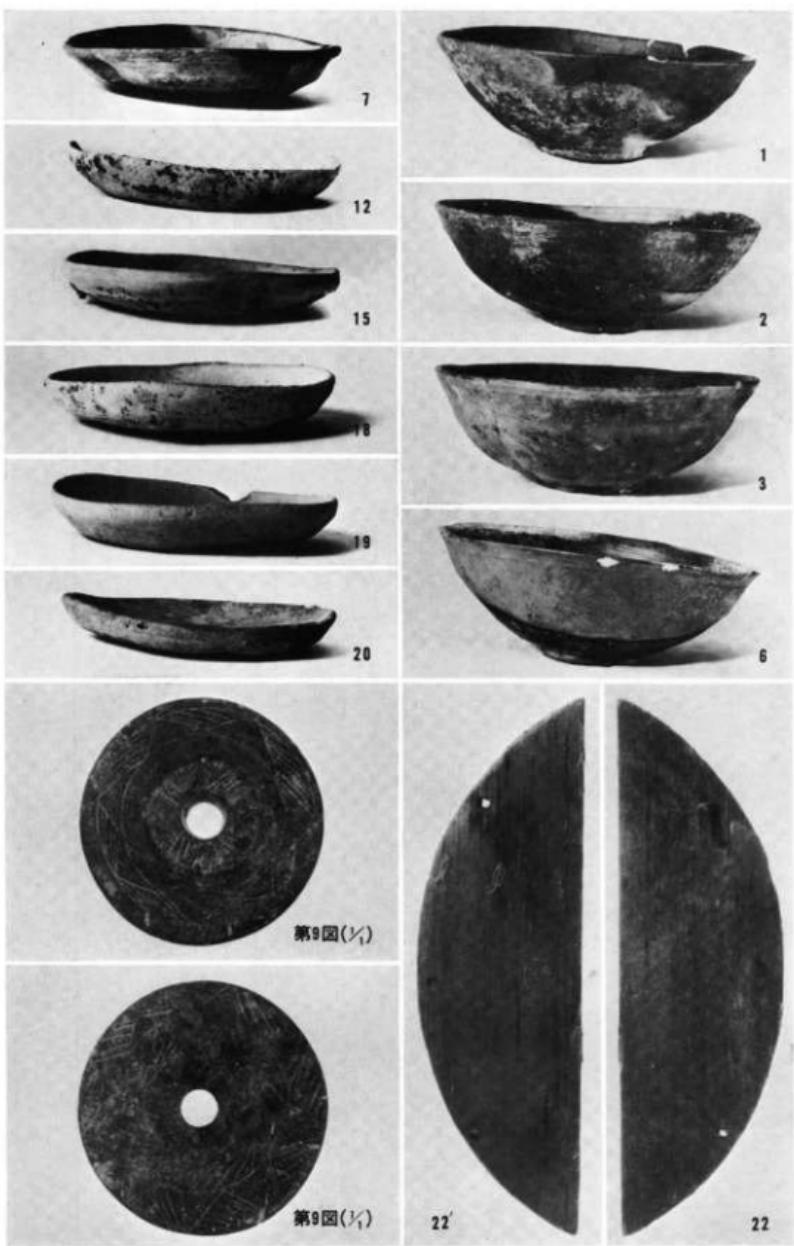
N2 トレンチ柱穴



N2 トレンチ柱穴（拡張後）



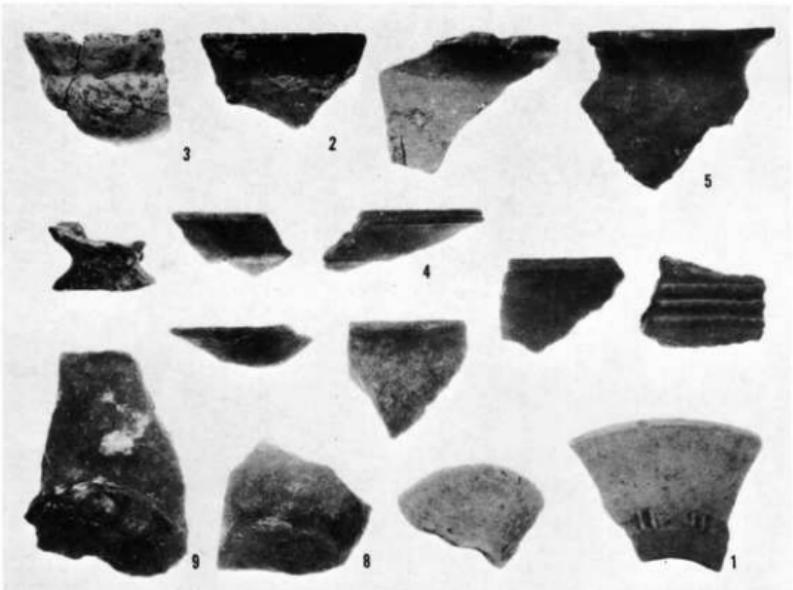
N2 トレンチ柱穴、池溝



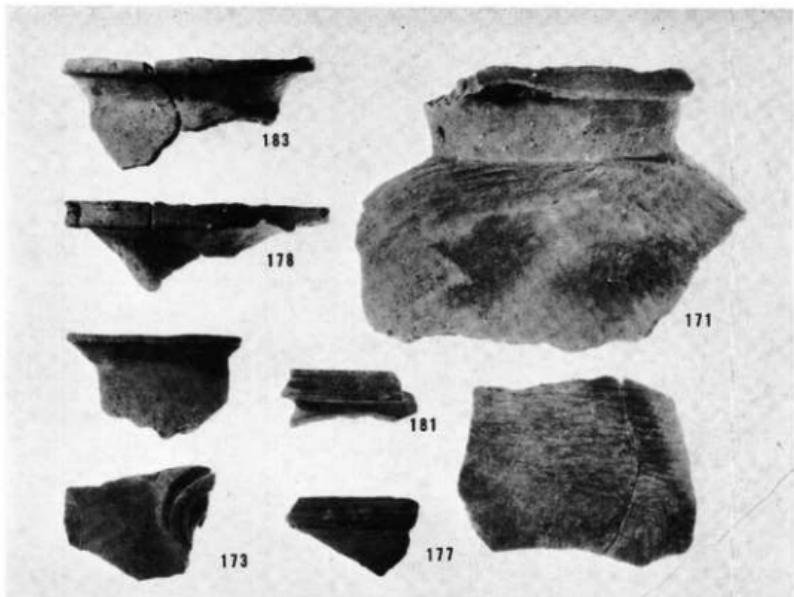
N2 トレンチ池内出土遺物 瓦器椀、土師質皿、石製紡錐車、木製容器底部



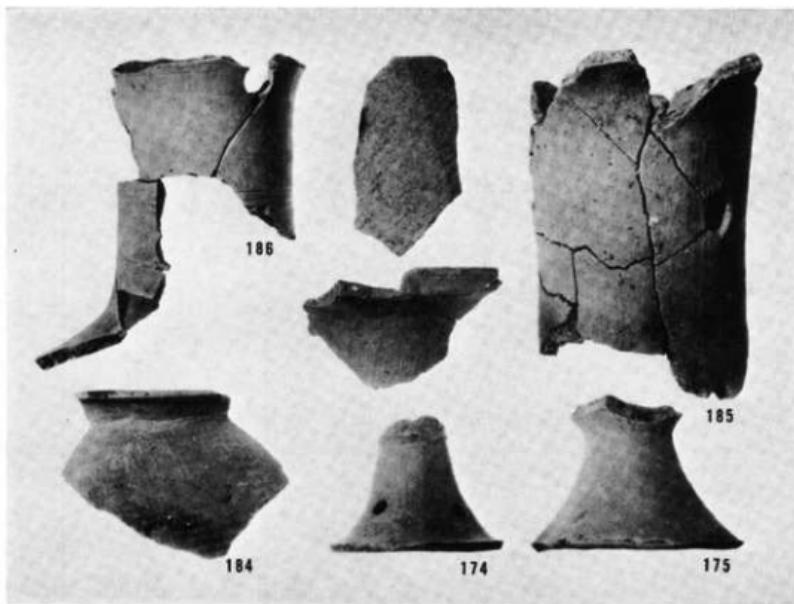
N2 トレンチ池内出土遺物 土師器高杯、台付皿、羽釜、陶磁器、瓦、輔



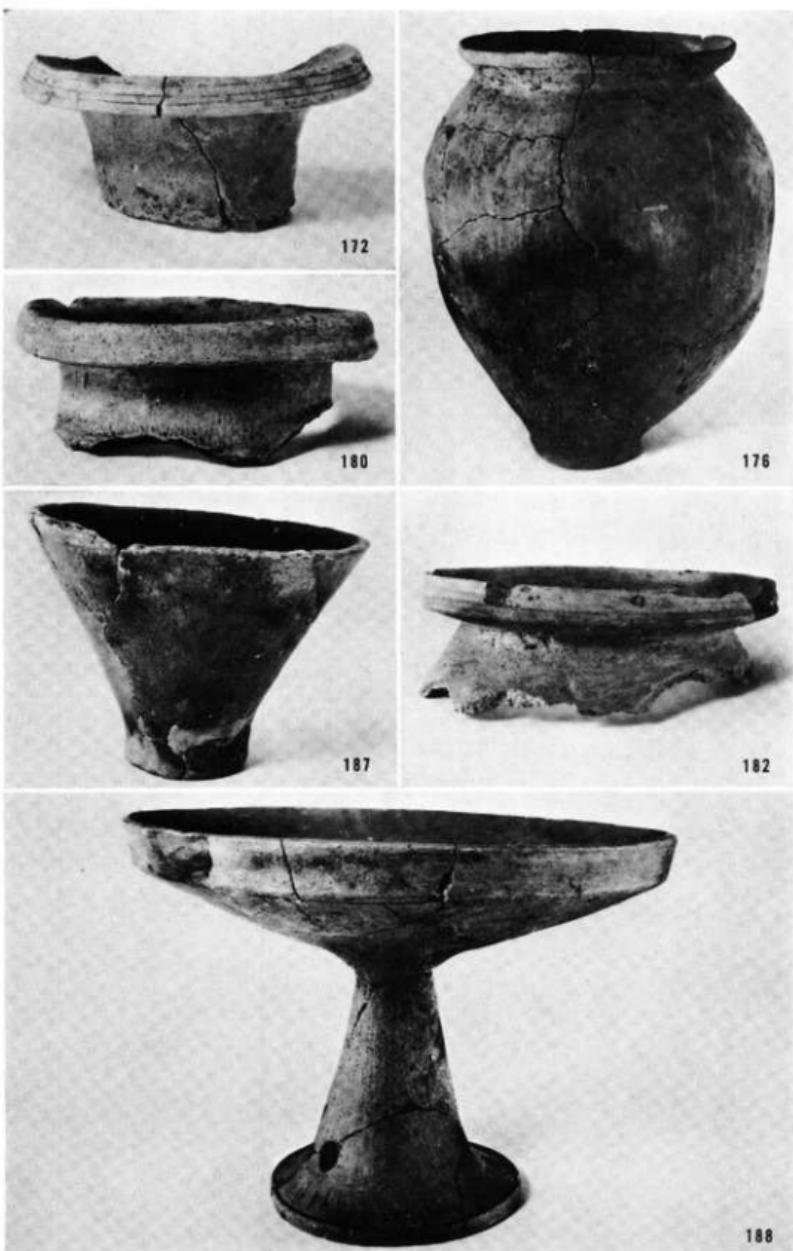
S1~8 トレンチ出土遺物 弥生土器壺、甕、土師器小型丸底壺、高杯、甕、脚台



第IV様式末～第V様式初頭の土器 壺、壺、蓋



第IV様式末～第V様式初頭の土器 器台、壺、壺、高杯



第IV様式末～第V様式初頭の土器 壺、壺、鉢、高杯

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 19
鬼塚遺跡Ⅱ・若江遺跡

発行日 昭和54年3月31日
発行 東大阪市遺跡保護調査会
印刷所 中村朝日堂印刷所